
閃光のプロキオン

ジェフティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閃光のプロキオン

【Nコード】

N6407X

【作者名】

ジェフティ

【あらすじ】

今から17年前。東京を壊滅させる程の何か起きた。都市は破壊され、日本は17年の歳月を経て首都を長野県へ移す。しかし、『何か』がもたらしたものはそれだけでは無かった。主人公、瀬田大輔は謎のシステム《DE-S》を搭載した機動兵器プロキオンを駆り、17年前の謎へと迫る。

設定、解説（前書き）

多少ネタバレを含みます。
順次更新予定。

設定、解説

・プロキオン

> i 3 7 5 2 4 — 4 7 0 5 <

主人公、瀬田大輔の操縦する二足歩行型兵器。大きさは7m前後。日本の対MFL組織、VMFLの母体となった相模原遺伝子研究所に隠されていた。

17年前に東京で起きた『何か』を研究し、作られたと思われる機体で、軍部は正式採用の意向を固めていたが、制御不能の謎のシステム、《DE-S》により見送りと鳴る。

DE-S起動後は機体の装甲が開き、放出される膨大なエネルギーを粒子状にして散布する。たった3%システムを開放しただけで機体の運動性能が2倍に跳ね上がるなど、その効果は絶大。

しかしながらDE-Sはある特定の遺伝子配列パターンを鍵として発動するため起動できる者は限られている。

また、これほどの性能を有しているが空中での戦闘は、追加装備であるExternal Flight Systemを使わなければ不可能。

主に専用のアサルトライフルを使い、近接戦闘時はアンダーマウントレイルに装備されたバヨネット（銃剣）使用。

動力は核エンジンであり、膨大なエネルギーを放出するDE-Sは別系統である。そのためDE-Sを使用せずに起動が可能である。照準は目の動きに合わせ移動するアイコンタクトシステムを採用。

また、プロキオンはプロトタイプだと予想され、プロキオンを元にシリウスが作られたと思われる。

・シリウス

プロキオンの後継機と思われる機体。犬のような四足歩行の形で発見された。

軍部は、はじめプロキオンではなくシリウスの起動実験を行なっていたが実験中にDE-Sが拒絶反応を起こし、実験は更迭となった。プロキオンとは違い、DE-Sから放出されたエネルギーを動力とする。備蓄されたエネルギーを用いてDE-S無しでの起動も可能である。

また、DE-Sと動力部が直結しているため、プロキオンを遥かに凌駕する運動性能を誇る。

DE-S起動後は犬のような四足歩行形態より変形、二足歩行の人形兵器となる。

主兵装はナイフのみで、その機動性を活かすことが重要となる。

パイロットは瀬田大輔の幼なじみ、雀野愛菜。彼女がなぜ起動出来たのかは解析中。

・AD アイマードレス

シリウス、プロキオンと同じく相模原遺伝子研究所で見つかった物。しかし、7m級の巨大兵器であるプロキオン、シリウスとは違い、人が装着することでその真価を発揮する。

もともと相模原遺伝子研究所に残されていたのは設計図のみで、それはVMFLが独自に開発したためDE-Sのようなものは搭載されていない。

ウェアラブルコンピュータを元に作られ、『着る戦闘機』をコンセプトに開発された。

各所に設けられたスラスターがコンピューター制御により飛行を可能とする。

また、一般に普及し始めたAR（拡張現実）技術によりヘッドマウントディスプレイを通してあらゆるスコープを投影するARマルチサイトを採用。様々な局面に対応できる。

自衛軍でも採用を検討されていたがパイロットの需要があまりにも少ない上、コストも掛かるため凍結となった。

フライングドレス

・FD

アイマードレス

ADの開発過程で作られた試作品。

飛行すること以外は考えられていない為、装甲も何もない。

アイマードレス

速度もADに遥かに劣る。そのため緊急時の移動手段、災害救助用として使われる。

・二三式特殊起動戦車

VMFLが正式採用した兵器の一つ。通常の戦車と比べるとこじんまりとしている。

小回りが効き、対MFL用に改良された滑空砲を装備するため市街地での戦闘に向いているということで採用された。

定員は3人でドライバーと砲手、通信士の三人で操縦する。

・OH-10 サムライ

二三式と同じくVMFLが正式採用した兵器の一つ。

小回りの効く小柄な攻撃ヘリで、その大きさの割に火器の携行数は多くなっている。

? オ
? リ
? オ
? ン

第一話 犬の先駆 プロキオン

プロローグ

17年前。日本は未曾有の危機に陥った。東京で起きた「何か」によって首都の機能は全て止まって国の運営は再起不能だと言われた。それからいろんな国の人たちにお世話になって今では東京は第一級封鎖区画と名前を変えている。

こんなこと今では中学生。いや、下手したら小学生でも知っているような知識だ。

首都は長野県に移され、日本はようやく再び歩きだした。

第一話 犬の先駆 プロキオン

「こら、瀬田！何やってる！」

スコン。頭に何かが当たったような感覚がする。僕は何事かと思つて上を見上げると仏頂面の先生が立っていた。その手には丸めた日本史の教科書があつて僕はそれに殴られた。

どうやら僕は眠っていた。前の席の西 涼介が僕のほうを振り向いて笑う。何だと思つて頬に触ると凹凸のような物が感じられた。顔にシワが出来たのだ。

涼介を原因に始まった笑いはクラス中に拡散し、先生はイライラを募らせる。とうとう怒りが頂点に達したのか先生はチョークを黒板に叩きつける。

「いいか、続きからやるぞ。17年前の『何か』が発生した後、東京探査探査班として――」

僕は頬のシワを隠すように触れながら窓を見た。僕の席は窓際では

ない。窓際の横の列、その一番後ろだ。しかしながら僕の隣は空席で既に半年はその席の持ち主が現れたことは無かった、確か長門さんがったかな？

物思いにふけっている間にも授業は進んでいる。東京探査班。東京が壊滅した理由を解き明かすべく相模原宗介という科学者がいるんな人を引き連れて東京に向かった。けれども第6回の東京探査班で班員は皆行方不明になった。確か昨日の予習で読んだ内容はそんな感じだった。

5時限目の社会が終わり、掃除当番だった特別教室を適当に箒ではくと僕は教科書類の入ったカバンを肩にかけて隣の教室である2年4組の廊下に立った。ややあって教室の中から茶髪の髪の長い少女が急いでカバンを持って僕の方へ駆け寄る。

「ゴメン、待たせた？」

「いいや」

そう言っ僕らは歩きだした。

僕と彼女、「雀野 愛菜」は恋人でもなんでもない。ただのご近所さんだ。訳あって家に親の居ない僕は彼女の家になかば居候の形で住ませてもらっている。その理由はというと僕の親父は軍人だからだ。それも全て東京で起きた「何か」が関係している。

突然遺伝的変異凶暴化生命体。変異体とかMFLと呼称される奇形の生物が17年前から大量発生し始めた。遺伝的な影響で凶暴化した生物は人々を襲い、二次災害を引き起こした。これも昨日日本史の教科書で読んだことだ。始めはアメリカに頼っていたけど今では自衛軍が本格的にMFLの駆除を始めている。

時折この新長野市にも現れることもあったりするぐらいで親父の勤め先のVMFLという部隊が出動しているらしい。

下駄箱で靴をはきかえると校門前の駅には既に電車が止まっていた。

新長野市は再開発によって交通網が発達した。学校などの施設をいっばいつくるよりも交通網を発達させた方が安上がりだからだ。

僕と愛菜は電子定期券を改札にタッチさせるとホームへと向かった。新長野第三高校駅はさほど広くはない。僕らは止まっていた電車に駆け込むと満席で座席は諦めて奥の窓際に背中をもたれた。

「間も無く発車します」

アナウンスが流れ、警笛が鳴ると数秒してから電車が発車した。

ガタンガタンと一定のリズムを刻んだ揺れが僕を眠りへと誘うが夕暮れの強い日差しがそうはさせてくれなかった。

「ねえ、今日の夕飯は何がいいかな？」

愛菜がツンツンと僕の制服をつつきながら言った。

「そうだな——」

両手を組んで考える。無難にカレー……いや、ハンバーグか……

すると先程の列車の揺れとは比にならない震動が響いた。強い地震でも起きたのかというような強い揺れが。

「最近……多いね」

愛菜が窓を見ながら言った。僕は愛菜の視線の先を追う。町の中で黒い煙が上がっている。

「またMFLか……」

慣れというのは怖いもので地震に日本人が慣れているように現存している巨大都市の中で一番東京に近いこの長野にはよくMFLが現れた。

サイレンが鳴った、予め列車に取り付けられたものだ。

「新日本政府よりお伝えします。現在、新長野市B7ブロックにてMFLが出現しました。よって、この列車は通常運行を中止しシエルトーに向かいます。ご了承ください。繰り返し——」

バチンと音が鳴った。その途端に電車が大きく揺れる。いつもの路線から緊急時避難用の路線に変更されたのだ。

電車の中にいた人たちも慌ただしくなった。いつもは冷静なはずなのに僕も今日は妙な胸騒ぎがした。

「ねえ、大丈夫……よね？」

愛菜が僕の服を引っ張って言った。するとマナーモードにしておいた僕のケータイが震えた。先程から妙な感じがしていた所に電話が鳴ったのでやけに怖かった。

ポケットから取り出して電話ににでる。掛けてきたのは涼介だった。「どうした？」

僕が呑気にそう聞くと涼介は息を切らして答える。

「どうしたもこうしたもねえさ。ったく、緊急時回線に変更される前につながってよかったぜ」

「で、何の要件だ？MFLが来てるんだろ、逃げなくてもいいのか？」

「そんな事してられつか！自衛軍の新兵器を拝むチャンスなんだぞ？前々から噂になってたけど緊急時にしか使わないって言われてたしな。外見てみるよ、そこら中MFLだらけだぜ」

涼介がそういうので僕は反対側の窓をみた。おかしい。真っ暗だ。光が一切差し込んで居ない。

「……まさか！」

その黒いものが途端に動いた。液体のような物を列車に塗りつけながら。

列車の中はさらにパニックに陥った。満員電車じゃなかったのが幸いだ。

「ねえ大ちゃん……あれってMFL……」

ギロリ。何かが睨んだ。黒い物体から見開かれた赤い眼球が僕らを睨みつける。

「伏せろおおおおオオオッ！」

無理やりに愛菜を床へ倒す。その刹那、何かを切り刻むような音がして電車が大きく揺れた。大きくなってレベルじゃない。転がった。二、三度壁や床に背中を打ち付けるとようやく列車は動きを止める。僕は窓を見た。破られたガラスは血が滲んでいて既にそこにMFLの姿は無かった。

携帯を見る。通話は涼介の方から切れていた。

「……そうだ、愛菜！無事か？」

ハッとして愛菜を探した。良かった。すぐ僕の近くにいた。

「大丈夫か愛菜？」

「うん、ちょっとぶつけたみたいだけど」

白い足には青痣が出来ていた。

「立てるか？」

「うん」

彼女はそう言いながらも僕の手に乗まって腰を上げる。

酷い有様だ。生き残った人たちは必死に連絡を取ろうとしながら壊れた電車から出ていく。車体は真つ二つで一部火が出ている。これは爆発してもおかしくない。

「愛菜、早くシェルターに行こう」

愛菜の手を引っ張ると僕は凹んだ扉を外して外へとでた。

「戦況報告を」

プシュツと音を立て、近未来的な雰囲気的巨大な部屋に男が入った。男は瀬田浩三。VMFLの司令官。

たくさんモニターとランプ、そして人間がひしめきあうその部屋には警報が鳴り響く。

「現在MFLはB7ブロック、D14ブロックより進行中。第七次防衛ラインにて機構中隊が交戦中。戦局は劣勢です」

瀬田が一番上の真ん中の席に座ると肘を突き、考える。

「増援を出せ。これ以上の被害は許すな」

部屋にいたオペレーター達が「了解」と答える。その声が重なり、瀬田の耳に届く。

「ほっ、同時に二体とは異例ですね」

「……鎚木教授か」

白衣を着た男が何時の間にか彼の後ろに立っていた。

「どうするんです、瀬田司令。プロキオンはもう準備出来ておりませんが」

「まだ最終テストが残っている筈だ。出撃は出来ない。それにシリウスの二の舞にしたいくはない」

「今度はそうはさせませんよ」

白衣の男はそう言うのと瀬田の前に立ってニヤリと笑ってみせた。

「どうなつてんだよ……」

僕は言葉を失った。町の一部。B区画と呼ばれる商業施設の立ち並ぶここは火の海になっている。

「大ちゃん、シェルターが……」

崩壊している。崩された娯楽施設によって封鎖されたシェルター。そして前には火の海。前に進むなんて出来ない。でも何処に逃げればいいんだ……

「……そうだ、父さんから貰ったID——」

思い出す。父さんがいざとなったら軍施設に逃げ込めと言っていたこと。そしてその時に僕用にIDカードを作ってくれたこと。僕の記憶が正しければカバンのなかにある財布に入っているはずだが……

「大ちゃん！」

愛菜に名前を呼ばれて考えが吹き飛んだ。それと同時に、僕らの後ろには巨大な生物がいた。犬のような四本足とイソギンチャクのような触手、顔からは唾液があふれ出ていて赤く染まった目で僕らを見つめる。

「愛菜、逃げるぞ！」

手を取って走る。でもあんな化け物からどうやって逃げろって言うんだ。今日は本当にどうかしてる。父さんは何をやってるんだ。

すると目の前、パチンコ店に止められたバイクが目に入った。バイクには鍵が掛かりっぱなしで近くには血溜まりと腕のような物が転

がつている。僕は吐きそうになるのを必死に堪えてバイクに乗った。

「愛菜！早く！！」

「でも、大ちゃん免許なんて——」

「そんな事言ってる場合かよ！」

僕は愛菜が後ろに座った事を確認すると途端にアクセルを全開にした。不安定な前輪が持ち上がって急加速をする。それから少しして車輪は地面へと着く。

しかし、僕らの状況は変わらない。後ろには巨大なMFL。彼らは殺人衝動し駆られた醜い生物。父さんはそう言っていた。けど今の状況で僕にはそれが醜くなんて見えなくて恐ろしく見えてたまらなかった。

「クソッ、なんだアイツ。なんであんなに早いんだよあ！」

諦めるように声を出した。急加速をしても振り切れないし、モノレールのレールにぶつかっても何事も無く襲ってくる。

「自衛軍は何を——」

僕がそう言った途端、交差点を疾走するものがあつた。グレーと白黒の混ざった市街地迷彩に塗装された小柄な戦車。VMFLが正式採用している高機動戦車——と涼介が熱く語っていたつげ。

助かった気分だった。でもそうでもない。標識には『VMFL本部まで1km』と書かれている。もうここまで来ていたのかと半ば呆れてしまう。

「おい坊主！さっさと逃げろ！」

砲手のオジサンがそう言つてMFLに弾丸を撃ち込む。疾走している僕と愛菜も耳を塞ぎなくなるような爆音が轟く。

足に一発。命中した途端に炸裂した弾丸はMFLの足を崩す。

横転したMFLを尻目に僕はもう一度アクセルを強く握る。ヘルメット無しの顔に冷たい風が通り過ぎた。

VMFL基地への看板は途中で途絶えた。勘を頼りに進むけれど確

証はないから不安だった。

ややあつて僕は地下につづくスロープを見つけた。確か前に父さんの職場を見せて貰った時はこんな感じの所から入った気がする。スロープをゆつくりと下る。ここまで来たらMFLが襲ってくる事は無い。

地下駐車上に入る。閑散とした駐車場は人っ子ひとりいない。いや、非常事態にこんな所にいるほうがおかしいのだろう。

僕はバイクを駐車場に止めると愛菜の手を引っ張ってゆつくりと下ろした。愛菜の足はガクガクと震えていた。

「確かこの辺に——」

昔の記憶をたどる。駐車場の入口から奥へ進んだ所に大きめのドアがあつたはずなのだが……

「ねえ、大ちゃん。これじゃない？」

愛菜が指を指す。僕は最初、ただの壁かと思ったがよく見ればスリットが入っていた。僕も恐らくここだろうと思って扉を開けようとする。金属の重厚な扉はそう簡単にはびくともせず、開ける時にはへとへとになった。

ずずず、と引きずった音がして扉がしまっていく。けれども僕は目の前の物を呆然と見ていた。

「これって、涼介の言ってた——」

巨大なロボット。恐らく7mぐらいはあるだろう。

「それではプロキオンの起動実験はこれから——」

声が聞こえた。僕は思わず愛菜の手を引っ張って奥の扉に隠れる。

「——誰がいるのか？」

ガチャリ。聞き慣れない音がした。金属が擦れる独特のこの音。僕は仕方なしに両手を上げてゆつくりと上げて表へ出る。

「その……僕ら逃げ込んで……」

「民間人はここには入れないはずだが？」

白衣姿の男とぴちつとしたウェットスーツのような服を着た男。そのうちの白衣の男が僕に向かって銃を向けた。

「その……これっ！これです！僕、瀬田大佐の息子で——」

「大佐の息子さんか……」

IDカードを見てようやく納得してくれたのか男は銃を降ろす。

「で、そちらのお嬢さんは？」

「居候先の雀野 愛菜さんで、一緒にMFLから逃げていて——」
ボンッ！

途端に耳をつんざくような音がした。それからややあつて熱風が部屋に立ち込める。

「クソッ……博士、早くプロキオンを出さないと」

「ああ。——その君たちは隠れている、死にたくなければな」

白衣の男の言っている通り。僕らはそれに従って奥の壁に身を隠した。

愛菜が小さくなっている。お父さんの事、お母さん事。心配することだっただけでもある。

もう一度爆発が起きた。今度はさっきよりも近い。音がした途端に温度の増した熱風が体を包む。

「……愛菜。僕、ちよつと見てくる」

そう言つて立ち上がる僕を愛菜は止めた。制服を引っ張つて必死に抵抗する。

「ダメだよ、ここから出たら死んじゃう！」

「うん。——でも、僕だつてやれる事があるはずなんだ。僕だつてこれでも男なんだ」

そう言つて僕は無理やりに愛菜の腕をふりほどく。

『男なら誰かの為に何かを試してみる』

父さんが言っていた。その言葉が鮮明に再生される。

隔壁から出ると橋のような所に先程のスーツの男性と白衣の男性が横たわっていた。

「どうしたんですか？」などと聞かなくても原因は分かった。

白いロボットと対を為すように立つMFL。原因はコイツしかないな

い。居るはずがない。

「瀬田大佐の息子さんか……」

スーツを着た男性が僕の方を向いてゆっくりと話す。

「やめて下さい！しゃべらないでください！」

僕が必死に止めても彼は血を吹きながら話す。何が彼をそうさせるんだ。

「いいか、お前はこのプロキオンに乗れ。乗って彼女を助ける！」

「はいっ！」

言われるがまま。僕はロボットの胸にあるコックピットに乗り込んだ。戦い方なんてそんなモノは知らない。でも、誰かの役に立てるのなら――

「……戦え、守るために……」

そう言うと彼は何かのスイッチを押す。その途端、ハッチが締めこ
ンソールが起動する。目の前に表示される球体型のモニターが周り
を鮮明に映す。あの男の人も、白衣の人も、隠れた愛菜も見えた。
さらに目を凝らしてみると白衣の男性はコンピュータのような物を
いじっている。

「行け、少年！彼の意思を引き継いでみせろ！」

橋がゆっくりと動き、MFLとロボットを隔てる物がなくなる。

「プロキオン……そうか、プロキオン」

悲鳴にも似たMFLの鳴き声がこだます。

「プロキオン、行きます！」

レバーを無作為に動かす。それに連動してプロキオンの腕がMFLを殴る。

「いっえ……いっえ……いっえ……いっのおおおオオオ！」

思い切りレバーを押し込んだ。しかし、その重たい一撃は触手に絡み取られ、機体の制御が効かなくなる。

「待て……待ってくれ、どうなって——」

機体がきしむ。触手に締め付けられているのだ。

ギシギシと金属がきしむ。計器が悲鳴を上げ、モニターには砂嵐が

起きる。

「クソッ！僕は結局……結局何も出来ないのかよ！！」

とくん。早かった心臓の鼓動一際強く感じる。今まで何とも思わなかった鼓動が違和感でもあるかのように感じるのだ。

『DE-S』

何の略称かは分からない。でもそのワードが砂嵐をかき消し、画面を覆い尽くす。

機体が金色し光り始める。光を放つと同時に、『DE-S』の文字を振り払われるかのように消え失せる。

「……僕にやれること。僕にしかできないこと……」

ペダルを踏み込む。バーニアが点火するよりも前に機体が目に動き出す。機体を縛っていた触手はあまりの速さに耐えられなくなったのかプロキオンから剥がれ始める。

「ちょっと、プロキオン。何やってるの！」

途端に無線が掛かった。でも僕には使い方が分からないので何も答えることができない。それよりも目の前の敵に対して無我夢中だった。

「——まあいいわ、A20ブロックにてAD隊が待機してるわ。そこにおびき寄せて。いいわね」

通信が切れる。それと同時に、画面には地図と赤い点が表示される。

「ここに行けってことか！」

もう一度ペダルを深く踏み込む、細い通路を火花を散らしながら進む。赤い火花と金色の光が美しい火花のような物を作り出す。

「目標地点まであと……50、40、30……」

光が見えてきた。先程通信をしてきた人はきつとそこにいるんだろう。

「あと……20、10……0！！」

世界が開ける。夕日がモニタ差し込んだ。

それと時を同じくして多数の弾丸がMFLへと発射される。目の前には特殊な武器を装備した者達。足からはバーニアが噴出され、高

度を一定に保っている。

着弾する。その衝撃は僕にも伝わって途端に僕の集中力は切れてしまった。

へなへなと椅子にもたれかかる。先程まで押し出していたMFLはもう黒こげになっている。

終わったんだ。よくわからないうちに戦ってしまったけど僕はこうして生きていて誰かを守ることが出来たのだ。

第二話 戦闘少女

あれからは父さんが全てやってくれた。例え緊急事態だったとしても一般人である僕と愛菜が軍事機密を目にした事に変わりはない。普通なら裁判でもかけられるのかもしれないけど父さんが何とか誤魔化してくれたのだ。

コックピットからだとVMFで採用している戦闘用スーツ、AD アーマドレス を着た人にこっ 酷く叱られたりした。でも僕は目の前で死んだ人がいる、守れた命がある。それだけで手一杯で頭が真っ白だった。

それからややあって僕は愛菜といっしょに軍の人に家まで送ってもらった。愛菜の両親は二人とも無事でおじさんもおばさんも心配してくれた。

朝、ホームルームが始まる直前になって涼介が登校してきた。いつもこんな感じだけど今日はなんだか様子が違った。

「おはよう、何かあった？」

「あつたさ、昨日の騒ぎ覚えてないのか？」

「そりゃ覚えてるけど……」

というかこのクラスの中で一番僕が知っているだろう。今、改めて自分が何をしたのか考えるとゾツとする。

「んで、警戒網をぐぐり抜けて撮ってきた戦利品がこれよ！」

そう言っつて涼介はぺたんこのカバンから写真の束を取り出す。僕は涼介からその束を受け取ると一枚一枚ゆっくりと見始めた。

「これって自衛軍の戦車？」

「ちつつちつつ。二三式特殊機動戦車。普通の戦車と間違えて貰っちゃ困るぜ」

「ふーん」と適当に相槌を打ちながら写真を見ていくとなんと僕と

愛菜が逃げるところが写った写真まであった。

「おっ、その写真は撮るの大変だったんだぜ。なんたって目の前にMFLがいたんだからな。いやぁ〜それに向かって120mm滑空砲を撃つ二三式の勇姿！お前にも見せたかったぜ」

「ああそう……」

というかその二三式をくぐり抜けたバイクが僕なんだが涼介は全く気づいちゃいなかった。

「——これは？」

一枚、空を撮った写真を差し出す。

「あー、これはADを取るために連写した時の奴だ。確か4枚目に

――」

そう言っただけで涼介は僕から写真の束を取ると手馴れた動きで写真を探す。

「あー、あつたあつた。これだよ」

机に差し出された写真を見る。映っていたのは装甲のような物を身に付けた少女だった。足からは眩い光を放つバーニアがあつて、腕にはアサルトライフルを構えている。

「AD隊ってこんな子小さい娘もいるんだな……」

僕がそう呟くと涼介は途端に黙った。さっきまで軍事関係の知識をあれよあれよと披露していたにも関わらず口をポカーンと開け、目を見開く。

「あの……俺何か言っただ？」

「言っただとも……ああ、言っただともさ！お前AD部隊のアイドルにして最強のAD使い、長門 流希さんになんてこといつてんだ！！」

ガシガシと襟首を掴まれ、縦、横、斜めに振り回される。目が回りながらも僕は必死に止めようとするが涼介は何か喋りながら僕を振り回す。

「止めッ、涼介……っし……死ぬう……」

首を締められ、死にそうになった途端、教室にガラガラという音が

響いた。

「こら、西！さっさと席につけ。ホームルーム始めるぞ」

担任の伊藤先生ががに股でガツガツと涼介に近寄り、得意の怪力で強引に席へ座らせる。賑やかだった教室は静まって陰悪ムードになった。

ホームルームが終わり、チャイムが鳴る。昨日の一件で政府からの連絡がたくさんあつてホームルームは結構間延びした。いつもはチャイムがなる前には終わるというのにギリギリだ。

ファイルに挟んだ予定表を見る。一時間目は……古典か。また嫌な授業が朝から来たもんだ。

僕は引き出しから教科書、参考書、ノートを取り出して机に置く。それと同時にチャイムが鳴った。もう授業が始まるのだ。古典の担当である西東先生が既に教卓に立っている。

「起立。」

日直の女子生徒が爽やかに言った。続けて礼に着席と相変わらずな号令を済ませて授業が始まる。

「あー、今日は57ページから——」

パラパラと教科書をめくる。いまだき全く目にしない言葉が並ぶので正直頭が痛い。というか古典つてやる必要があるのかと思う。

僕はパラパラと肩肘を突き、あくびしながら西東先生の指示した57ページを開こうとすると教科書の間からパラリと何かが落ちた。写真だ。

「これって……」

女の子の写真だ。確か長門 流希とか言ってたっけ？そういえば涼介が伊藤先生に強引に連れてかれたので返し忘れたのだった。

にしても可愛い娘だと思った。昨日、プロキオンに乗っていた時は無我夢中で周りが見えていなかったから顔はよく覚えていないけど、こうしてまじまじと見れば可愛いなと思った。

「長門 流希……」

思わずその名を口に出した。

黒髪を二つに縛り、勇ましく戦う姿。一瞬を写したその写真には彼女の全てが収められているような気がして――

「待て、長門 流希……」

何かが引つ掛かった。記憶の片隅。彼女の名前が。

「……………あぁッ!」

声を上げ、机を叩く。椅子をガラガラと足で動かし、僕は立ち上がった。

「……………どうした、瀬田?」

西東先生がポカンとした表情で僕を見る。

「あの……………その……………」

すると西東先生はふうとため息をついて肩をなでおろす。

「じゃあ、この五行目から瀬田」

「えっ? はい、わかりました」

慌てて教科書を持つ。先程立った時に衝撃でページがめくれた教科書は百何ページとかになっている。

「えーつと……………ゴホン、青葉になり行くまで――」

前の席の涼介がまたも笑っている。周りからん羞恥の目から耐えながらも僕は読み切る。先生も少し半笑いだった。

席に着く。僕は隣の席、空席を見る。

長門 流希。

隣の席の所有者。記憶の片隅に残った情報が僕にそう告げた。

今日の掃除当番も終え、あとは帰宅するだけとなっていた。

僕はカバンをとって愛菜の下へ行こうと思った。すると僕のケータイが途端に震え出した。

「こんな時に誰だ……………」

ズボンのポケットを漁る。ミニ掘み取り大会が僕のポケットの中で

開催された後、お目当てのケータイ電話が手元に現れる。

非通知だった。ちよつと嫌な予感がしたけど通話ボタンを押して耳に当てる。

「もしもし……」

「私だ。大輔、元気にしているか？」

その声ですぐに分かった。父さんだ。

「どうしたの？わざわざ非通知でなんて」

「学校が終わったのならV M F Lに来て欲しい。早急にな」

僕は「うん」と答えるや否や父さんは電話を切る。もともと電話は恥ずかしいと言っていたのでやっぱりいつもの父さんだなと思った。

「大ちゃん、その——」

後ろに愛菜が居た。全く気付かなかった。

「ああ、その父さんから電話があつてさ。V M F Lに来てって」

「じゃあ、今日はいつしよに帰れない？」

首をかしげて愛菜はそう言った。

「うん、そうなる——かな？」

「じゃあ、私おいしい料理作って待つてるね！」

愛菜は満面の笑みを浮かべると昇降口へと向かう階段へと掛けていった。

「さて、じゃあ僕も行かないとね」

父さんからの直々の呼び出し。嬉しいけど何か嫌な予感もした。

新長野市は大きく分けてA B C Dの四区画に分かれている。政府機関、軍事機関のそびえるAブロック。商業施設、教育施設が立ち並ぶBブロック。居住区画であるCブロック。そして他国との貿易、つまりは大きな空港が存在するDブロックに分かれる。

もちろんV M F Lは軍事施設のあるA区画に存在する。因みにA区画は僕らが住んでいるC区画とは真逆の方向で、A区画には政府関

係者、軍関係者用に小さな都市が出来ているとかで電車が殆どない。その昔の長野の電車はそれぐらいのインターバルで来るらしいけど僕にとっては不便だった。

電子定期券を財布の中から取り出す。カードのような定期券にタッチするとそこに時刻表が表示される。

「えつと……新長野第三高校駅発、A区画VMFL基地行き列車は……5時ジャスト」

携帯を見る。待受になっているアナログ時計は4時45分を指し示す。そうだ、あと15分しかない。しかもこの列車を逃したら約1時間は帰ってこない。A区画行きの列車はABCDと回っている。時間がかかるのだ。

うかつかしてられない。廊下で涼介に「ゲーセンにいこうぜ!」と誘われたけど「明日な!」と適当に返して駅へと走った。

「間も無くVMFL基地です。軍関係者の方はこちらです。So on you will arrive in VMFL Base. Military personnel who get off here, please」

流石A区画。といった所か。外交だの貿易だのでこの列車は外国の人も利用していてアナウンスも英語が流れる。噂に聞いていたけど実際に聞くのは初めてだった。

警笛が鳴る。金属が擦れる音、即ちブレーキの音が響く。座席に座った僕の体も少しだけ横に倒れる。

「VMFL基地、VFML基地です。Arrived in VMFL Base」

プシュッとドアの開く音がして、乗っていた内のたった数人が降りていく。通勤ラッシュなんて時間でもなければA区画への列車なんてこんなものなんだろう。

すると電車を降りた僕の目に一人の男性が飛び込んだ。奇抜という

か周りのビジネスマン達にそぐわない白衣を着た男性。間違い無い。昨日、僕がプロキオンを動かした時にいた人だ。

「おっ、いたいた」

そう言っただけの人は僕の方へ駆け寄ってきた。すると途端にピースサインをしてはにかみながら「ピース」と言った。何かよくわからないけど取り敢えず僕もピースと返す。

「おお、流石DE-Sを動かした逸材。ノリもいいじゃないか全く！」

「あの……それよりも父さんが呼び出したのって……」

『DE-S』という言葉が引っ掛かったけど、取り敢えず本題であるそれを聞いた。

「ああ、司令から聞いていたか。正確には僕が君に要件があるんだ。昨日のことだね」

すると白衣の人はポケットからなにやら四角い紙切れを取り出す。

「初めまして。ではないけれど相模原遺伝子研究所の鎚木 正晴だ。以後お見知りおきを」

「鎚木さん。ですか」

名刺を受け取る、そこにはしっかりと相模原遺伝子研究所所属 V M F L 技術顧問と書かれている。

「では、自己紹介も終えた所で本題に入ろうか。瀬田 大輔君」

そう言う鎚木さんは白衣をたなびかせ、エスカレーターの方へと歩き出す。僕もそれを追う様にして歩きだした。

駅を出てすぐ、徒歩5分も無い所に巨大な施設が立っていた。ここがV M F L。昨日、僕が戦った場所である。

あれほどの戦いがあったというにも関わらず、すでにV M F Lの付近はきれいさっぱり元通りになっている。

「さあ、こっちだ。プロキオンと君の父上が待っている」

鎚木さんは正面のゲートにはいかず、回り道をするようにフェンス

際を歩いていく。フェンスには有刺鉄線があり、きつと高圧電流でも流れているのだろう。

そんな恐ろしい妄想をしていると大きなドアの前にでた。ドアというよりもシャッターというべきなのだろうか？

「さて、ようこそV M L Fへ」

ドアが自動に開く。シャフトのような物が空気が抜けるような音と共に外れ、ゆっくりとドアが開く。

すこしずつ、光が差し込む。

「さあ、これが昨日きみが使ったものだ」

人一人入れるぐらいに開いたドアの中へと鎬木さんは入っていく。僕もそれを追っかけていくとやはりそこにはプロキオンがいた。

「……プロキオン」

「そうだ、遅かったな大輔」

格納庫のような部屋に鎬木さんでも僕でもない声が響いた。

「父さん！」

「……大輔、大きくなったな」

そう言う父さんはゆっくりと僕らの方へ近づく。

「いいんですか司令？もう戻れませんか？」

鎬木さんが言う。

「ああ、覚悟は出来ているさ」

「えっと、何の話を……」

僕が二人に割り込もうとすると父さんが僕の方を向いた。その目は真剣で優しい父さんというより威厳があるという感じだった。

「大輔、今からお前はプロキオン専属のパイロットとしてV M F Lに配属される」

「……え？」

頭が真っ白になる。確か僕は昨日、成り行きでロボットを動かしてしまつて……

「やっぱり、軍事機密を知ってしまったのがいけなかったの？父さん！どういふことなのか説明してよ！」

僕が父さんの服を引っ張りながらそう聞くと父さんは冷静に頷く。それを見た鎬木さんも頷くと僕と父さんの間に割って入った。

「いいか、大輔君。君に罪はない。これは君に与えられた選択だ。お父さんの言い方はちょっと強引だったかもしれないから僕が説明するよ」

そう言うのと鎬木さんはプロキオンの方をゆっくりと向いた。

「君は東京探査班は知っているかい？」

「ええ、歴史の授業で少し……」

「それなら話は早い」

そう言うのと鎬木さんはプロキオンと僕らを隔てる小さなフェンスに手を掛ける。

「17年前、東京で何かが起きた。それを探るために組織されたのが東京探査班。それぐらいは知っているだろう？でも彼らは何も分からないまま第六回の探査で行方不明になった。でもそれは違うんだ。……ねえ、大輔君。このロボット、誰が作ったと思う？」

半回転して鎬木さんはフェンスによりかかると僕に聞いた。

「えっと、やっぱり戦闘機とかそういうのを作っている——」

「ブッブー！ハズレです」

僕が言い終わる前にそう答えるともう一度プロキオンを見て話を続けた。

「この機体はね、東京探査班のリーダーであつた相模原宗介の設計で作られ、僕のいる相模原遺伝子研究所に保管されていた。それだけじゃない。今軍部が採用しようとしているAD アーマードレスだってそうだ。東京で何かを見つけた相模原教授はそれを使ってこれほどの兵器を作り上げた。そしてそれを見つけた出した僕らは一体教授は何を見つけたのか研究することにしたんだよ」

「……それがDE・S」

「ザッツライ！」

僕の方を指差し、そう言った。

「DE-S。何の略称かは知らないがそれが教授の残した遺産。けれども僕らにはその起動方法がわからなかった。だからプロキオンは兵器としての運用が見送られていた。」

暗い、不安そうな顔をして言う。すると突然明るい顔に戻る。

「でも、君が現れた！昨日のたった一度の運用で君はDE-Sをたった3%だが起動させた。これは快挙だ！機体の運動性能は2倍になった。たった3%で」

カツカツと革靴で金属の床を歩く。一回転して僕の方を向く。

「君は逸材だ。その君にしかない力を是非とも貸して欲しいんだ！」僕は父さんの方を見た。父さんはゆっくりと頷く。

「……考えさせて下さい。ちよつとだけ、ちよつとだけでいいんです。明日には決めます」

「そうか、いい返事を期待してる。その先の道が駅と繋がってる。ゆっくり考えて、君の思いを教えてください」

「……わかりました」

そう言つて僕は自動ドアを抜け、駅への連絡通路をゆっくりと歩きだした。

「軍に入れなんて、そんな事言われても……」

僕にしか出来ないこと。確かに魅力的ではある。でも……

不安なのだ。昨日、僕の前任者であつた男性は僕にあの機体を託し、死んだ。あの人にだって遣した家族が居るんだろう。そう考えると胸が痛くなる。

「どうすればいいのさ……」

駅のホームに電車が入る。でもこの列車はC区画行きではない。次の列車で行ったほうが確か早く着いた気がする。

電子定期券を取り出す。時刻表を呼び出そうとしたら途端に全ての時刻表が文字化けした。

「何だ、何が起きて——」

ドカン。と爆発音が聴こえる。

方向はA区画。すぐ近くだった。僕が時刻表に目を落とすとそこには「緊急事態発生。前線を避難経路に変更します」と表示される。先程の文字化けはこれの前兆だったのだ。

広告用の液晶ディスプレイもすべて避難警報へと変わる。

昨日の、人が死んでいく光景がフラッシュバックする。

「クソ……クッソォ！どうしてこんな——」

ぼくはいてもたってもいられなくなってホームから改札を逆走した。

駅の下階。テラスのようになった所から僕は外を見た。防衛省の隣にあるV M F Lから炎が上がっている。

僕はどうすればいいのか。黙ってプロキオンに乗って戦えと言われるてもそう簡単に頷くことは出来ない。命を簡単に賭けることなんてできないんだ。

僕は臆病者だ。あの時、僕にプロキオンを託してくれたあの人に申し訳ない。

涙が溢れた。目からあふれるそれを拭こうとすると口の中に入ってしまった。しょっぱい味がした。

砲撃の音がここまで聴こえる。目を凝らすと砲塔から赤い光りが放たれるのが見える。そして二三式に対を為すように翼の生えたM F Lがいた。昨日現れたM F Lとは違い触手が無い代わりに巨大な翼が生えている。

その巨体には似合わぬ速度でM F Lは移動する。砲撃に混じって違う爆発音がした。二三式が爆発したのだ。

もう限界だった。理性とか倫理とかそういう難しい言葉で表すものじゃなくってもっと直線的で感情的な物が僕を突き動かす。何時の間にか僕の足はV M F Lへと向かっていたのだ。

道路は封鎖される。逃げ惑う役人達を掻き分け、僕は戦地へと向か

う。鉄の臭い、血の臭い、火薬の臭い。臭いの方へと僕は動く。

爆発の音が大きくなる。近づいているのだ。

何度か「君、何処にいくんだ！危険だぞ！」とか言われたけど僕はそれを無視した。危険なのはわかってるんだ。

人ごみが消えた。

目の前には無骨な戦車。上空には5、6機のヘリ。一部は煙を上げながらも戦っている。

走ったせいか息切れをした僕はフェンス越しにVMFL基地に立ち尽くした。

すると途端に隣にあったスピーカーが鳴り響く。

「AD アーマードレス 隊出撃を開始。カタパルト付近の車両、航空機は直ちに離脱せよ。繰り返す、AD アーマードレス 隊出撃を開始。カタパルト付近の車両、航空機は直ちに離脱せよ。」

警報が鳴った。爆音が響いていてあらゆる音は聞きづらいハズなのに耳を塞ぎたくなるほど警報音は大きい。

僕がスピーカーに目を奪われていると途端に戦闘機でも離陸したような音がした。にしては目の前に飛んだ物は異常に小さい。

AD アーマードレス

戦闘用の特殊装甲として開発されたというそれはウェアラブルコンピュータの発展形として『着る』戦闘機となった。

上空、雲を切り裂くように飛ぶ『彼等』その中に一際目立つカラーリングの機体がある。

真紅の機体は拒否するように空の青から浮いている。

「長門……流希……」

前に涼介が言っていた。真紅のADを操る最強の少女がいる。それが彼女。

急降下した彼女は地面にぶち当たる寸前で足のバーニアを地表に向けて全開にする。滑り込むようにMFLの4本足の中へと入り込むや否や彼女はその手にもったライフルをMFLの腹にめがけて発射した。

言葉には言い表せないような悲鳴をMFLは上げる。

「すごい……」

そうとしか言えなかった。戦車隊が幾ら撃つても倒せなかった相手をたった一回のアプローチでよろけさせたのだ。

彼女はもう一度上昇する。怯んだMFLへの攻撃は他に任せ、次のチャンスを生み出そうとしているのだ。

だが、それはうまくいかなかった。

途端、先程の射撃で怯んだと思っていたMFLが背中 of 大きな翼をはためかせて急上昇した。するとその長く鋭い前足の爪で長門を殴るようにして引っこ抜いた。

あまりに唐突の事で避けようにも避けきれなかった彼女は地面に叩きつけられるとそのまま滑るようにして僕のいる方へと向かってきた。

砂埃が立ち込める。彼女は体中傷つきながらも立ち上がろうとする。

「何よ……あんた何でこんなところにいるのよ!!」

MFLへの憎悪をぶつけるように彼女は僕にそう言いながらライフルを撃った。トリガーを引くと7.56mm弾のリコイルショックが彼女の小さな体へと響く。

「早く逃げなさい!今の貴方は只の一般人よ!たった一度皆を助けたぐらいでいい気にならないで!」

弾が切れる。彼女は急いでリロードしようとするもMFLは待つてはくれない。その強靱な爪が彼女を襲う。

「あああッ!」

甲高い声の悲鳴を上げると彼女は砂埃をまき散らしながら僕の足元に転がり込んだ。

でも、それでも彼女は戦う事を止めない。膝まづいてでも銃を撃つ。

「……クッソおおおおオオ!もう止める!!」

僕はそう叫ぶと長門さんの目の前に立った。まるで立ちふさがるように。

「何やってんのよ!死にたいの!?!」

「死にたくなんかない！でも、他人が死ぬのはもつとイヤなんだよ！！」

そう言うとは僕は携帯電話を取り出す。電話帳から急いで父さんの番号を見つけ出し、それに掛ける。すると父さんは僕から電話が来るのを待っていたかのようにたった一回にコールで電話してた。

「もしもし父さん？僕、決めたよ」

「……いいんだな？」

「うん、僕にしか出来ない事なんかじゃない。今僕に出来ることをやりたい」

「——分かった、今すぐお前の目の前のA27ゲートにプロキオンを向かわせる。……守って見せるよ、大輔」

僕は黙って頷くと電話を切る。ポケットにケータイを入れると目の前の床が割れ始めた。そのせいかMFLはこれ以上僕らの方へは進めない。

でも、僕は違う。

「うおおおおおおおおオオ！！」

無我夢中でその穴の中へと走った。近づく度きゴウンゴウンという機械音が強くなる。

そして僕は飛んだ。その中——プロキオンの中へと。

僕がその中へと入ったと同時に、プロキオンのコックピットハッチは開いた。吸い込まれるようにして僕はコックピットに入る。やはり高低差があるせいかお尻が痛みがした。

目の前のコンソールに明かりが灯る。球体型のモニターが部分ごとを外を映し出す。最初は前から。そして後ろへとほんの数秒で映像として映し出す。

「後戻りはできないぞ、大輔」

モニターに通信た表示される。そのウィンドウの上には「VMFL Base」と表示されている。

「男なら、誰かの為に何かをしなくちゃいけないって。それが僕の

やるべきことなんだって」

ウィンドウが閉じた、元々父さんは人と人話するのは苦手だったので恥ずかしかったんじゃないかなと思った。

「大輔君。今、プロキオンには前の時と違って武器が付いている。わかるな？」

ウィンドウがもう一度勝手に開いて鎬木さんが話した。鎬木さんの言うとおり、モニターの右側を見るとプロキオンの右手があり、そしてライフルを持っていた。

「いいか、照準は全て君の目の動きに併せて動く。そして引き金は腕を動かすメインレバーに付いているはずだ。それを引けばあとはコンピュータが勝手にやってくれる」

僕は目をしばたき、目の前のMFLを見つめた。それから少しして球体型モニターに丸いロックオンサイトが表示された。

敵を凝視する。汗ばんだ手でレバーを握る。

今、僕に出来ること。僕に与えられた事。

「プロキオン、行きます！」

黒かったアイセンサーが真紅に染まった。目の前のコンソールには残弾を始めとする武器の情報、メインの球体型モニターには照準がメインレバーを前に倒すと銃を構えた。僕はそのままMFLを凝視するとトリガーを強く引いた。

途端、銃口が赤く光った。それと同時に、僕の体全体が強く揺れる。

硝烟が立ち込める。空気へと消える煙には目もくれず、ただMFLだけを凝視する。

「……来た！」

羽が広がる。レバーを後ろに引くとガード体制を取る。強靱な爪は腹部にあるコックピットを切り裂こうとするもプロキオンの装甲はそれを許さない。

急いでライフルを構えると零距离で発砲する。さっきよりも強いリコイルショックが体に響いた。その振動で機体が揺れるのがよくわかる。

「大輔君、バヨネットだ！前方の兵装管理用のタッチパネルで銃剣に切り替える！」

後方のスピーカーからノイズ混じりの鎬木さんの声が聴こえる。

「タッチパネルって——これか！」

僕は無理矢理叩くようにパネルを叩いた、すると画面に表示されていたライフルの下。レールの搭載された部分から鋭利な刃物が飛び出る。

その画面と連動し、右手に持ったライフルの先端には刃物が飛び出す。

「これでえッ！」

昨日の様に無我夢中でレバーを動かす。ガンッガンッと殴りつけるような音がレバーから鳴る。

返り血が白いプロキオンの装甲について赤く染まる。

「トドメだああアアッ！！」

槍のように銃剣刺し込む。けど、手応えがなかった。

ばさっばさっという羽音が聴こえる。何時の間にかMFLは僕の遙か上空にいた。敵を切り裂く事しか考えて無くって隙を取られたのだ。

急いでコンソールをタッチしてライフルモードへと切り替え、レバーを押し込む。しかし、それよりも早く何かが僕の後ろから飛び去った。

「いい、アンタはアイツの頭を狙って。そしたら私が空中でアイツを刺し殺す。分かった？分かったなら後退して精々照準でも頑張って付けてなさい！」

ボロボロのADを着た長門さんだった。戦闘機……とまではいえないが恐らくプロキオン以上の空戦性能を持つAD。そして何より長門さんが僕よりも戦闘経験があるということを考えれば妥当な判断だ。

「分かった。出来るだけ頑張る。でも……」

「でも何よ？」

「——死ぬなよ」

「誰に言ってるのよ」

長門さんはそう言うのと足のバーニアを地面スレスレで蒸かし、急上昇する。

「いい、3カウントで行くわよ。少しでも間違えたらアンタが死ぬと思いなさい」

「分かった」

敵の頭部。羽ばたくMFLはゆっくりと空中を上下する。なかなか狙いが定まらない。

「3！」

カウントが始まった。

「2！」

長門さんは上昇をやめ、下へと反転を始める。狙いはまだ定まらない。

「1！」

下降する姿勢を整える。

「0！」

電子音が耳元で鳴った。それと同時に、ロックオンサイトが赤く染まり、僕は引き金を引く。

ダダダッ！と音と共に反動がして僕は仰け反る。その刹那、羽を持ったMFLが気を失い、地面目掛けて落下を開始する。

「よくやったわ、トドメは私が！！」

バーニアの光りが青い弧を描いてADは降下する。その一秒とない間に長門さんは腰に備えたブレードを引き抜くと切っ先をMFLに向け突撃する。

ブスッという音が鳴った。MFLは血が溢れ出し、完全に活動を停止する。

「……やった。長門さんやつ——」

何か。何かが引つ掛かった。何かが足りない………

「——バーニアの光が無い！？」

僕はペダルを強く踏むと背中と足のバーニアに火が点き前方に向け加速する。よく見れば長門さんは剣を引き抜こうとするも上手く抜けず、脱出を出来ないままMFLと落ちている。きつと、前にMFLに引つ掻かれた時にシステムに異常が起きたのだろう。

「長門さん!!」

僕はそう言つとコンソールを叩いて武器を離す。ペダルを踏んでバーニアを蒸すとレバーを押し込んで右手を差し出した。

「アンタ……何やってんのよ……」

プロキオンの掌。グレーの機械的な手の上に長門さんはちょこんと乗っていた。空中でホバリングし、ゆっくりと降りる。眼下には血で染まった巨大な怪物。羽の生えた奇形の犬が横たわっている。

「何って、最初に言っただろ？他の人が死ぬのは嫌だって」

僕がそう言つと長門さんは顔は動かさずに目を閉じ、大きくため息をついた。

「とんだ阿保ね」

「どこがだよ」

間髪いれずに僕は問う。しかしながら長門さんは余裕の笑みを浮かべながらやれやれと両手を上げる。

「あの時、確かに私はエンジントラブルが起きていたわ。でもね、こつちにだって脱出用のパラシュートぐらいあるのよ。アンタが突っ込んで来なけりゃペイルアウトしてたつてのに……」

「あの……それはつまり——」

「邪魔だつたてこと!」

ガシャン。と機械音がしてプロキオンはふんわりと着陸する。

「それはその……ごめん」

取り敢えず誤つておく。助けてあげたというのに怒られたのでこうして謝るのはいささか不本意ではある。

マニピュレータを地面へと降ろす。柵代わりになっていた指がゆっ

くりと地に着く。

「まあいいわ。今後は邪魔しないでよね」

彼女はそう言って不機嫌そうにプロキオンの掌から降りるとわざわざメインカメラに向かって「べえ〜！」とやった。

「こりゃ相当嫌われてるな……」

僕の方がやれやれと言いたい気分だった。

「……彼がいなければ死んでたわね」

夜遅く。一人の私は格納庫にいた。私はボロボロになったAD アイマードレス を撫でるように触れ、「ごめんね？」と言った。

「あの時、私のADは完璧にコードを受け付けなかった。ウェアラブルコンピュータ事態にバグが起こってた……つまりあの状態で手でパラシュートを引くなんてこと——」

なんだかむず痒い気分になった。

私は気をまぎらさず為にADに触れる。抱きしめるように。

「……お父さん」

これが私の存在意義。戦わなくちゃいけないんじゃないじゃなくて戦うしかないのだ。

「瀬田 大輔……か」

彼の名前の口に出す。すると勝手に私の口は動いて「とんだ阿保ね」と言っていた。

本当に阿保だ。

本当に……

朝。C区画とB区画を繋ぐ列車に乗って僕は愛菜と登校する。通勤

ラッシュを避けて学校に向かうと大体始業20分前に到着する。

「ねみい」

あくびをしながら廊下を歩く。昨日、一昨日とあんな事をしてればそれはそれは疲れるもので体は悲鳴を上げる。

「寝足りない」「もっと休ませろ」

僕の体の節々はそう語っている。

すると朝から教室の前に妙な人ばかりができていた。その中には涼介もしっかりと混ざっている。彼奴にしては珍しく早い。

「おはよう涼介、今日は随分と早いなあ」

「早いも何も、お前メールみたか？」

「はあ？」

しぶしぶと僕は眠い顔をこすりながら携帯を取り出す。どうやらサイレントマナーになっていた。

メールが一件。涼介からだ。

『長門 流希がウチの高校にいるぞ！』

「あー、長門 流希って……おい待て、何であの女がここにいる。

つか、この人だかりは長門さん目当てなのか？」

「お前……当たり前だろうが！俺達は長門流希親衛隊。長門嬢をMFLから守るのが俺たちの勤め！！」

涼介がそう高らかに言い放つと後ろにいた連中をうんうんと頷く。

「あっそ、きつとアイツはお前等が思ってるような女じゃないぞ？」

「なっ……大輔、お前長門さんと親交が——」

涼介は取り敢えず無視する。人だかりを掻き分けようとするとまるでモーゼのように道が出来る。なんだ？と思ったら俺の目の前には

……

「長門……流希……」

「昨日ぶりですね。瀬田君。いや、瀬田特技兵」

雰囲気が全然違っていた。昨日の勇ましい、髪の毛を縛った彼女の姿な無く、長い黒髪を垂らし、メガネを掛けた大人しそうというか優等生のような雰囲気を醸し出している。

「改めて。よろしく願いします、瀬田 大輔特技兵。」

彼女がそう言ったや否や僕は押しつぶされる。そう、例の親衛隊に。「貴様！長門様とどういった関係だ！！」とか「この無視が！長門様の露払いは我々が！！」とか「長門様は俺の嫁！！」とか言いながら。

親衛隊に押しつぶされる僕を見ると長門さんはニヤリと不敵な笑みを浮かべ、教室へと戻っていく。

その後、担任の西東先生にきっちり絞られたのは言うまでもない。

第三話 約束の放課後

チャイムが鳴った。スピーカーから流れるその音を聞いて教壇に立つ先生は「それじゃあ今日はここまで」と言って教科書をパタリと閉じる。

「起立」

日直の生徒が言った。その号令に合わせ、私は立ち上がる。

礼をして座る。何気ない動作の間にも私の頭は不安で消えなかった。昨日、幼馴染で私の家に居候している大ちゃんは8時過ぎに戻ってきた。黒い制服には砂埃がたっぷりついていて、さらには軍部の車で送ってもらってきた。確かに大ちゃんのお父さんは軍人さんだ。それでも……

「次のニュースです。昨日、午後6時頃、AブロックVMF基地周辺にてMFLが出現しました。なお、今回のMFL出現による死亡者はゼロで、3名程が軽いケガを負った模様です」

誰かのケータイから聞こえたニュース。この報道は昨日既に聞いた。一昨日、大ちゃんはあのロボットに乗り、戦った。そして昨日はお父さんのいるAブロックVMF基地。つまりは事件現場に向かい、ボロボロになって帰ってきた。

もう、考えられることはひとつしかない。

私は物思いにふけりながらカバンからお弁当箱をとりだす。薄い肌色をした楕円形の蓋を開ける。

お弁当はいつも私がつくる。両親は共働きで忙しいので私の分も大ちゃんの分も朝、早く起きて作っている。

ボーツとしながらも箸でお弁当をつつく。すると途端、口に甘さが広がった。

急いで箸を見ると細い木製の箸は簡単に作った野菜炒めを摘んでいた。

お塩とお砂糖間違えた……

余りにも初歩的で致命的なミス。いつもどおりじゃない自分に失望した。

「うへっ、なんじゃこりゃ」

涼介と昼食を食っていると途端に変な物に出くわした。

「ん？どうした大輔」

「いや、なんでもないよ」

適当に誤魔化すとその根源たる物を見定めた。ふりかけご飯の隣にある野菜炒めか。

しかし、野菜炒めがこんなに甘いはずはない。考えられる要因は一つ。塩と砂糖を間違えた。

いやいやいや、まさか愛菜がそんなミスを犯すなんて……

そういえば昨日から愛菜の様子がおかしかったような気がする。まあ、あんなボロボロで帰ってきたし無理もないのか。

余計な心配かけちゃってるな。と僕は責任を感じる。

今朝、僕は正式に父さんからV M F Lへの入隊を言い渡された。階級は特技兵とかいつているが僕にはよく分からない。目の前で惣菜パンをガツガツ食ってる軍事オタクに聞けば一発だろうがそれもそれで気が引ける。というか余計な詮索はされたくない。

いや、そもその原因は――

僕は窓側を見やった、昨日までは誰もいなかったその席には女の子が座っている。背筋をピンと伸ばしてちよつとずつお弁当を食べる姿からは昨日の様子は想像できない。

とにもかくにも僕はもう後戻りは出来なくなった。父さんにも言われた。『お前は自衛軍という機械の中の一部になった』と。

最後の一粒をつまんで口に運び、ペットボトルのお茶を一口飲む。渴ききつた喉が濡れた。

今日は掃除当番はサボった。いや、怪我の關係がなんとかと言って保健室で休んだ。

あたたかな陽の差し込む硬いベッドに寝転がる。薄いタオルケットが太陽でちょうど良い温度に温められ、さらに僕の眠気助長させる。途端、眠気を吹き飛ばすような音が響いた、ガラガラっ！とカーテンを開ける音。それも思いつきり。

人様が気持ちよく眠ろうとしている間になんだと思い、僕はゆっくりと体を起こす。目を擦ってゆっくりと焦点を合わせる。始めはただの人影にしか見えなかった物がだんだんくつきりと見えてくる。

「なんだ涼介か」

「なんだとはなんだよ」

はぁーっとため息をついて僕はベッドの横にかけておいた制服の上着を取り、袖に腕を通す。

「で、一体なんなのさ？」

「あ？お前昨日ゲーセン行くつつてただろ」

そういえばそうだった。確か昨日、父さんに呼び出されて急いで電車に乗ろうとしたときに涼介を適当にあしらって……

「……行くの？」

「行くの！」

仁王立ちで涼介は言った。やれやれと僕は肩をなでおろすとまだ眠い目を擦ってカバンを肩に掛けた。

B区画は教育機関と商業施設で成り立っている。そしてブロックの大半は商業施設で埋めつくされている。新長野市にある高校はたった3校。いや、正確には4校だったか。

それはつまり学校の外に出ればお店が立ち並んでいるという事で僕ら行きつけのゲーセンも徒歩数分の所にある。

店内は学校帰りの高校生でひしめき合っている。因みに小中学生は親の承諾がないと出入りが出来ない。専用のカードを作らないと警報が鳴ってA区画の教育委員会に連絡されるというシステムだ。

「おー、今日は久々にあいてんじゃん！」

涼介が結構大きめのゲームを指さす。

『ADシュミレータ』

ADのようなスーツを来て、バーチャル空間で戦うというゲームである。もともとVMFLが新兵育成用として開発していたがADの正式採用見送りによって御蔵入りとなった。

シュミレータとはいっても流石は軍用、リアリティは他のこの手のゲームとは比にならない。さらにVMFLが制作の赤字を補填する為に一回のプレイ料金が結構割高になっている。

「またこれ？」

「またこれ」

僕の事はスルーして涼介はADシュミレータを装着、お金を投入する。

正直このゲームは飽きるほど涼介とやった。半ば強制的に。御陰でその頃のお小遣いは凄まじい勢いで飛んでいったのを覚えている。

「仕方ないなあ……じゃあ記録更新を狙って」

お金を投入する。協力プレイのランキング、そのトップにはR&mp;Dと書かれている。無論僕らR 涼介 & D 大輔 だ。

『Ready?』

ヘルメットに搭載されたヘッドマウントディスプレイ。3D映像の映し出されるそれにはそう表示される。

それから数秒、『Go!』と文字を変えた途端、僕は足を蹴るように動かす。何とも言えない浮遊感が唐突に僕を襲った。

ADシュミレータはJAXAの協力もあつたとかで張りばてのADには無重力の訓練装置がついており、空を飛ぶ感覚を擬似的に味わ

うことができる。

しかしながら元々『訓練用』に開発されたものであり、『遊び』には決して適さない。これを好んでプレイしているのは僕の隣の奴ぐらいだろう。

「大輔、2時の方向から敵3。7時の方向に2。俺は前を受け持つ。お前は背中を」

「はいはい」

生返事をするとは僕は思い切り足をぶん回してバーニアが点火されたまま回転する。とはいえってもその映像はヘッドマウントディスプレイが映し出す3D映像。本当に火が出ているなんて阿呆な事は起きではない。しかし、流星は軍用シュミレータ。バーニア噴出時に足に掛かる負荷は完璧に再現されているらしく、機械自体がわざと渋くなる。無理矢理動かしてやっと方向転換出来るというほどだ。

「レディ」

涼介が言った。僕はガンコントローラを前に突き出すとバーチャルに映し出される照準器を元に狙いを定める。

トリガーを引く。ADを伝って擬似的な衝撃が腕から体へと響いていく。

しかし、そう簡単に着弾しない。他のシューティングゲームと違って当たり判定がかなりシビアなのだ。それがマニアックなファンを有無要因なわけだが……

「クソッ、フォックス2！フォックス2！」

「分かってる！」

敵から飛んでくるミサイルをブレアを使ってかわす。それと同時に、ライフルを撃つ。

「何やってんだ！ファーストステージは残弾残すために3バーストだつて言っただろ？」

さつきから隣の軍事オタクがうるさい。所詮はゲームなのだから……と思ってしまうが何時の間にか僕らは1stステージをクリアしていた。

リザルト画面が表示される。撃墜数、ダメージ、命中室、残弾数。あらゆるデータが表示されるのはやはり元が軍のシュミレータだからだろうか。

「おし、それじゃ記録更新目指して」

「わかつてるって」

コントローラのトリガーを引き、リザルト画面をスキップする。

『2nd Stage・Ready?』

恐らくネイティブスピーカーと思われる流暢な英語。それがさらに興奮を助長させる。

『Go!!』

それと同時に、涼介が作戦を叫ぶ。

「散開して敵を挟む。俺が先行する!」

バシユツとブースト音を僕の隣で響かせて加速する。

「了解、ちゃっちゃとファイナルステージまで行こう!」

僕も足を突き出すようにして、機体を加速させた。擬似的なGが僕を包み込んだ。

あれから結構長いことやっていたが結局ハイスコア更新はならなかった。それよりも前に僕の財布がすっからかんになるところだ。

「なあ、涼介。僕はもうこれで終わりにするけど」

僕がそう言つと涼介は「えー!」と一人でブーイングを始める。

そんなブーイングは無視して僕は最後のコインを投入する。

これはもう本を買うの控えようかな。とか、金銭的な事を考えているとボーッとしていた僕の頭に女性の声が響いた。シュミレータのシステム音声だ。

何だと思つてまじまじとディスプレイを見つめると『challenge you!』と表示されている。

誰だ?と思ひながら挑戦者の詳細を開く。

『Luccchini 戦闘回数0 勝利数0 敗北数0』

何だ初心者か。僕はそう思っただけで勝手に考えた。隣の涼介が協力プレイがやりたいとか言ってるけどそれでまたラスボスまでやるのはちょっと精神的にも肉体的にも疲れる。それだったら対戦の方がいいかなと思ったのだ。

「あの、よろしくお願いします」

ゲーム機に設置されたボイスチャットで僕は言った。けれども向こうから応答は無く「ふっ」と鼻で嘲笑ったような声がただけだ。マナーのない奴だなあ。と思っているとゲームが開始する。

「……おい、なんだこいつ」

涼介が言った。戦いの模様はゲーム機の並ぶ場所の目の前にある巨大なディスプレイに映し出される。そこに写っているのは勿論僕の姿だった。

「大輔、気をつける！コイツ只者じゃねえ！！」

涼介がそう叫んだ時には遅かった。既に敵は僕の真上、ステージのギリギリまで上昇している。

「でも、それじゃいいだよ！」

トリガーを引いた。バーチャルに火花が映し出され、CGで描かれた弾道が見えた。

「おい、大輔。そいつは罠だ！」

「罠？一体ど——」

僕が言い終わる前に衝撃が襲った。画面にはエラーウィンドウが乱立し、dangerだのwarningだのと表示される。

「終わりよ」

女の声がした。それと時を同じくして近接戦闘用のブレードが僕を切り裂いた。

「ブーツブーツ」と警告音を鳴らしながらADを取り外す。僕はさっきの敵が何者だったのか気になっていた。

あの戦い方、どこかでみたことがある。急上昇、急降下。余りにも大胆でそれゆえに乗り手の技術を問われる戦闘スタイル。

すると奥の方にあつた筐体がプシュツとエアロックの外れる音がして、その後に警告音と共にA Dが解除された。

まさかとは思つた。アイツなんじゃないかと薄々感づいてはいた。するとそれに気づいた涼介急いで姿勢を正す。

「はうあつ！ なつ、なつ 長門様でありましたか！」

長門さんは黒い髪をさあつと左右へ振ると甘い香りをまき散らして僕らの方へ歩いてきた。

「うん、二人とも筋は悪くなかつたわ。もしかしたら将来はA Dに乘れるかもね？」

ニコリ、と笑つて彼女は小首をかしげる。それに感激したのか涼介は涙を流しながら「ありがとうございます！ ありがとうございます！」と感謝の言葉を連呼している。

流石にそれに長門さんも引いたのかちよつと身じろぎする。

「あの、それで何か御用でも？」

「ええ、そうよ」

ニコリ、ともう一度微笑む。

僕はこの笑顔に意味を知っている。ゾクリと背筋が凍るような感じがすると彼女が途端に僕の腕を取り、その顔を僕の耳元に近づける。

「……今からV M F Lと一緒に来なさい。」

「えっ、でも時間的に――」

「いいから来なさい！」

もう耳を近づけなくても聴こえるような声を出す。ちよつぴり耳がジーンとする。

「じゃあ涼介君、私彼に用事があるから。ちよつと借りるわよ？」

「ハイッ、喜んで！」

敬礼をし、背筋を伸ばす。まるで本物の軍人のように涼介はそう言う。と何のお咎めも無しに僕が無理に連れて行かれるのを見ていた。

僕は長門さんに半ば強引に電車へと連れて行かれた。一体何の用事があるのか。そんなものは一切教えずじまいで丁度よく停車していた列車に押入れられた。

日が大分暮れている。結構長いことゲーセンにいたんだなと思った。

「……ねえ」

「はいっ!？」

途端、長門さんから声が掛かった。思わず声がひっくり返ってしまった僕を見て長門さんは苦笑している。

僕が少し眉間にシワを寄せ、嫌な目で長門さんを見つめると「ごめんごめん」といって必死に腹を抑えて笑いをこらえる。

「でさ、さつきから気になってただけだよ。『長門さん』って何よ?」

「はあ?」

まさかの質問に声が漏れる。

「何って、長門さんは長門さんでしょ?」

「……あのね、私には流希って名前があるんだけど?」

「えっと……それじゃあ流希さん?」

「少尉を付けなさい!上官侮辱罪で軍法会議に掛けるわよ?」

ガタン。電車が大きく揺れた。僕は「申し訳ありません流希少尉。」と改まって誤ると流希は満足した表情で目線を外へ移した。

エアブレーキが起動し、キイと音を立てながら電車が停車した。

「Bブロック、国立自衛軍特別教育学院前です。」

アナウンスがそう告げた。国立自衛軍教育学院。通称『攻専』

日本中のエリートというエリートが集められ、自衛軍の特殊攻撃部隊への人員を生み出すという教育施設。この新長野市に存在する学校、いや。日本一のエリート校であり正直な所この駅の前を通るのは気が引ける。

軍服を元に作られた攻専の制服を着た生徒たちが列車に入ってくる。

その姿から発せられるプレッシャーのようなものが何だか彼らが僕とは住む世界が違うような雰囲気醸し出す。

「私ね、第三に来る前は攻専にいたの」

流希が言った。

「へえ、それ程優秀だったのに何で第三なんか」

第三という中堅校だ。攻専のレベルに関しては置いておくとして市内トップは第一高校で第三はその次、そして第二と続いている。

「私ね、サボリぐせがあったのよ。なんか学校に行くことに意義を見いだせないっていうか。私の居場所はここなんかじゃない。私は戦いの中にいるんだって」

「……そんな悲しい事言うなよ」

僕がそう言うのと流希は深くため息を着く。

「私のお父さんはね、東京探査班のメンバーだった。お母さんは反対したのにお父さんは私たちを裏切り、その挙句行方不明。そしてさ、気になっちゃたんだよ。最愛の妻と子供を捨ててまでお父さんは何がしたかったんだろうって。だから攻専まで行ったの。そしてその先にあったのは巨大な化物。笑うしかなかったわよ。でもお父さんに近づけた気がしてさ……」

僕には流希の目が潤んでいるように見えた。手を、声をかけて上げたかったけど僕にはそれができなかった。そんな資格は無かった。

彼女の心にズケズケと踏み入れるなんて真似は僕には出来ない。

「ごめんね、こんな話してさ。とんだ阿呆ね」

そう言うのと流希はあくびをして目を擦る。

「さあ、もう鍋木顧問がホームにいるらしいわ。早く行きましょう？」

「うん」

僕がそういった直後、アナウンスはVMFL基地への到着を告げた。

昨日、僕がプロキオンに乗ると決めた日。その人同様、鍋木さんは

駅で僕らを待っていた。

それからして徒歩数分の基地に行き、エレベーターで何回かあがった後、小さな会議室に案内された。本来は小隊のブリーフィングルームらしく、V M F Lにはこの手の部屋が5、6個あるらしい。

中に入るや否や僕は鎬木さんからプリントを渡される。部屋の中にはもう何人か人がいた。恐らくA D隊の人たちだろう。

「さて、今回君たちを呼んだのは無論、緊急事態だからだ。」

パチンとスイッチを押し、鎬木さんは電気を消す。リモコンのような物を使うと目の前にあったプロジェクターから青白い光が放たれ、白いスクリーンに映し出された。

「この写真は5時間前、ロシア西部の森林地帯を写したものだ。見ればわかるように森の中にポツカリと穴があいている。今から6時間前、日本時間の正午過ぎにその森林地帯で爆発が起きた。範囲は半径10 k m、幸いにも死傷者は無し。まあ、ロシアが核実験でもしたんじゃないかと思うが先程現地軍の偵察機から面白い情報が出てきた。プリントをめくってくれ」

左上をホチキスでとめられたそれを僕は捲った。そこには難しい数値だの記号だの書かれていて僕にはわからなかった。

「いいか、この一番上のA E値。これは微弱な放射性物質だ。この物質は今まで東京とM F Lでしか確認されていない。しかしながら今回、ロシアではそれが観測された。つまりこれは東京で起きた『何か』が再び起きようとしている」

寒気がした。僕は資料でしか読んだことはないけれど実際に東京の『何か』を体験した父さん曰く「地獄絵図」と言っていた。核兵器だとかそういう物に並ぶ。いや、それ以上の禁忌だと。

「そこでだ、明後日の明朝、我々はロシアへと調査に向かう事に決定した。しかし現地ではM F Lの発生も示唆されている。そこで今回はA D、並びにプロキオンにも同行してもらう。万が一のために。私はプロキオンに同乗し、爆発の調査を行う。異論のある者はいるか？」

鎬木さんが辺りを見回した。僕はそーつとを上げる。

「どうした、大輔君？」

「あのお、学校とか家族とかの了解は……」

「無論、学校側には言いつけてある。それに君の父上はここに司令官だろう？何の心配はない。それとも怖気づいたか？」

「いや、そういうわけじゃ……」

すると鎬木さんは前を向く。

「それでは作戦開始は明後日、明朝。三。時だ。時間には遅れるなよ。以上、解散」

あれから僕は雀野家へと戻った。玄関に現れるや否や愛菜がげっそりとした顔で僕を心配してくるので僕の方が心配になってしまった。それにしてもこの家の人たちに僕は作戦について話さなければならぬ。きっと怒られるんだろう。もともと愛菜のお父さんは厳格な人だ。

僕が実際に会うのは食事の時ぐらいでそれ以外はいつも仕事に励んでいる、何というかストイックというか。僕の父さんといい皆不器用なんだなと思ってしまう。

「はい、いっぱい食べなさいよ」

木製のテーブルに愛菜のお母さんが食事を置く。今日はカレーか。

「いただきます」

食事が出揃い、家族の声が合わさった。

スプーンのカツカツという音が響く。そこに時計の針の音まで響いてくる。

「あの……」

僕が思い切って声を出すと家族全員が一斉に僕の方を向いた。

「お話があるんです。聞いて貰えますか？」

「これでよかったですか司令？」

摘木はニヤけながら白衣のポケットに手をつ込み、壁へと寄りかかる。

「いいんだ、私たちの目的。いや、使命がそれだ」

休憩室。喫煙所と化しているそこで私はタバコを蒸かしながら言った。

「それもそうですけど息子さんのことですよ」

「まずは第二の東京 セカンドシティ の出現を止めるのが先決だ。それに、大輔なら自分で答えを見つけられるさ」

「それは生き残りとしての勘。ですか？」

「さてな」

私は東京都民の生き残りの一人だ。あの地獄を見てきた者の一人。今では東京出身というやつは煙たがられる傾向にある。放射能だとかウィルスだとかと一緒に。所謂風評被害という奴で『何か』をくぐり抜けた人間は差別された。今では『東京』というワード自体が差別用語の様に扱われている。

「分からないが、親子だとかそういうのとは違う確定的な信頼があるんだ。説明は出来ないけどな」

吸っていたタバコを灰皿へと捨てる。火が消えたのを確認すると私は休憩室から出る。自動ドアが開く。

「――息子を預かってくれ」

「了解しました」

摘木がそう言ったのを聞き、私は司令執務室へと歩きだした。

「どうして黙っていたの？愛菜も知ってたのならお母さんに教えなさいよ」

愛菜のお母さんは僕の話聞いた途端、声を荒らげた。成り行きとはいえ子供にこんなことをさせるなんて馬鹿げている、と。

「そんなの死に行くようなものよ。大輔君、悪いことは言わない

わ。今すぐお父さんに連絡をとって」

「母さん」

先程まで沈黙を保っていた愛菜のお父さんが割り込む。

「いい、そんなこと大輔君がする義理は無いの。今すぐやめなさい」

「母さん！」

愛菜のお父さんが声を荒らげた。その細い目は威厳と風格に溢れていてじつと僕を見つめる。

「愛菜、母さん。悪いが二人で話させてくれ」

「でもお父さん——」

「聞こえなかったか？二人で話させてくれ」

愛菜のお父さんがそう言うとお母さんは少し渋って出るのをためらうが愛菜に連れられてリビングを出る。

「ごめんな大輔君。妻は女だからね、こういう男の世界の話ってのは男にしか分からないもんだろ？」

僕はコクリと頷いた、愛菜のお父さんはそれを確認すると缶ビールのプルタブを開ける。

プシュツと音がして泡の立つ音を響かせるそれを飲むと愛菜の父さんは話を続けた。

「俺は君のお父さんと高校時代同級生でね、彼奴は凄いい奴だったさ。彼奴は前々から軍に入りたがってた。成績優秀なのに敢えてな。それで俺は彼奴に聞いたのさ、何で軍に行くんだって。お前ならもつといい大学行けるだろってな。そしてらなんて帰ってきたと思う？」

「……男なら誰かの為に何かをしてみろ」

僕がそう言うとお父さんは驚いたような顔をした。

「流石は親子ってところか。彼奴はそう言って今は俺の手の届かないところまで行っちゃった。その時の彼奴の目に今の君がそっくりでさ。」

彼ははにかむとビールを飲む。コトン、と机の上にビールを置くとさらに話を続ける。

「では、最後にこれだけ聴きたい。『それは君がやりたいこと』な

のか？」

「……分かりません。でも、——少なくとも僕は僕の出来る事をやりたい。やれるのに黙って見過ごすなんてマネは出来ない。それだけです」

「そうか……わかった、母さんと愛菜には私が説明する。でもこれだけは守ってくれ」

そう言うとき愛菜のお父さんは大きな手を僕の前に差し出す。

「生きてまたカレーを食いに来いよ」

「はい！」

僕はそう言って手を握った。大きく、硬いその手はとても暖かった。

どうやらあれから僕を抜いての家族会議が始まった。僕は寝室兼勉強部屋である元倉庫の自室ひ入るとベッドに寝転んだ。

明日にはここにはいない。再び何かと戦うことになる。上手くできるのだろうか？ いや、なんとかするしかない。

愛菜のお父さんだつて僕を信じてくれたんだ。それを裏切る真似なんて出来る訳がない。

「さてとつと！」

体を跳ね上げて立ち上がる。机に掛けたカバンを取るとファスナーを開けた。中には教科書類とプリント類。我ながら無機質なカバンだ。

僕はその中から数学の参考書とノート、問題集を取り出すとそれを机においた。明後日には学校どころか日本にすらいらないのだ。今のうちに来ることはやっておかなくちゃならない。

僕が鉛筆立てからシャーペンを一本取り出そうとすると「コンコン」とドアをノックする音が聞こえた。控えめな音から察するに恐らく愛菜だろう。

「どうぞ」

僕がそう言つとギィツと音を立ててドアが開いた。

「あの……勉強中だった？ごめん」

「いや、いいよ。まだ始めてないし」

僕はそう言つて問題集を閉じると椅子から立つ。

「それで、何か用事？」

「うん……その……」

愛菜は何か言いたげな表情をするも「あの……」とか「その……」
と言っただけで一向に何も話さない。

そろそろ僕もうんざりしてきたときに愛菜が言った。

「その——生きて帰つて来てね、大ちゃんが死ぬなんて嫌だから」
「うん」

そう僕が答えると愛菜はゆっくりと深呼吸する。息を整え、微妙に
赤みがかつたその方を必死に抑えながら。

「よしっ！」

愛菜がそう言うや否や僕の視界が奪われた。それと同時に、何かが唇
にあたつた。

初めは理解できなかった。一体愛菜が何をしたのかを。ややあつて
僕は状況を把握する。唇を奪われたのだと。

柔らかい感触が唇に触れる。弾力があつて暖かい。僕はもつとその
温もりを感じていたかつたけど愛菜は唇離した。

しばしの間の接吻。顔を真つ赤に染めた愛菜は僕の顔を見ないまま
「これは約束のキスなんだから……」といった。

「帰つて来るつて約束なんだから……」

そう言つと彼女は真つ赤に染め上げた頬をさらに赤くして部屋を一
目散に出ていく。

僕は自分の手を唇に当ててみる。僅かな感触が唇に残っていた。

第四話 深紅の欠片

朝、ケータイのアラームで目が覚めた。即ちそれは作戦決行が翌日に迫ったということ。

布団に潜っていたという日常と明日にはこの街はおるかこの国にいないという現実の狭間。僕は現実に淘汰され、渋谷と羽毛布団を畳む。

一回の台所からは愛菜と彼女のお母さんが朝食を作っている。階段を降りる際に漂うその香り。鼻腔をくすぐるそれで明日という現実を騙す。

朝陽が窓から照りつける。目を擦りながら僕はリビングへと足早に降りた。

「おはようっす」

ポン、と僕の肩を誰かが叩いた。恐らく涼介だろうと僕は思っ振り返るとやっぱり涼介だった。

そもそも僕に声を掛けるのは涼介や愛菜、流希ぐらいで他の人は事務的な事や僕から話しかけなければ話すことはない。

その理由は明白で僕が東京出身だからだ。『何か』が起きた直後に生まれた僕は軍部の生き残りであった父さんと共に長野に来た。母さんは僕を生む際に死んだという。

東京差別。今でも続いている事だ。東京で起きた『何か』をウィルスのようなものとして捉え、東京出身者を病原菌のように扱う。

今では『東京』というワードを言っではならないという暗黙の了解があるため。そして僕の父さんがV M F Lの司令官ということもあってか表立って差別されることはない。

あるとしたらこれ以上の深い関係を作らせてくれない。という壁を作られている事だ。

僕は窓の方を見た。隣の流希が教科書をまとめながら「明日は遅れないですよ」と小さく呟いた。

「わかってるよ」

僕はそう答えるとカバンから教科書を取り出す。

何とも言えない圧迫感のような物を感じる。嫌な気分はない。でもいい気分はしない。

周りのクラスメートは東京で起きた何かが再び起ころうとしていると分かっているのだろうか。

ギョツと締め付けられるような苦しみを感じた。

ついに放課後となった。傾きかける日が廊下を照らしている。

「なあ、大輔？」

「うん？」

僕がカバンに教科書をつっ込んでいると涼介が振り向く。薄っぺらいカバンを振り回して僕の机の上に置いた。

「お前知ってるか？自営軍の新型兵器。昨日、A区画での戦闘で使われたって話だけ残念なことにADシュミレータに夢中でさ、警戒区域に侵入するタイミングを間違えちゃってさ」

てへへと笑いながら涼介言う。さらっとこんなことを言っているが一応「新長野市条例違反」である。

「まあ……知ってるというか知らないというか——」

「おい、知ってるのか！？あれだけは幾ら長門様に聞いても答えてくれないんだよ」

いや、答えられないのは仕方ないだろう。彼女だって軍人だ。そう簡単に機密は——

不意に目を時計にやった。

まずい、A区画行きの電車が来る。

「なあ、涼介。今日はこれくらいにして帰ろうよ。な？」

僕がそう言つと涼介は「ええー！」とブーイングをしながらも教室

から出る僕を追いかける。

「今日は随分といそいでるんだな？」

「まあね」

適当に返す。ここで軍事機密をバラしたら流希になんと言われることか。

下駄箱に出る。靴をはきかえると校門前の駅に走った。

入口のエスカレーターは右側を通り、駆け上がる。隣でぺちゃくちゃ喋ってる生徒なんて気にせず。

僕にはそれよりもやらなければならない事がある。ここの人たちを守らなくちゃいけないんだ。

電子定期券をタッチしてA区画行きのホームに向かう。

「おいおい、C区画行きはこっちだぜ？」

後ろから涼介が言った。

「いいんだ、今日は父さんに用があるんだ。A区画方面に行く」

「ほう、奇遇だな」

「は？」

「俺、今日はちょっとD区画に行かねばならなくなてな。そういうこと」

「はあ……」

D区画。というと国際空港が面積の3分の1を占める新長野市最小のブロック。なんでそんな所に涼介が。旅行に行くにしても明日は学校だ。僕は公欠扱いだけど涼介は違う筈だが……

そう言っている間に列車が到着した。僕らはアナウンスの後、その中へと足を踏み入れた。

ややあつて、列車はA区画V M F L前に到着した。これから二駅先にいった所がDブロック新長野国際空港駅となっている。

ホームへと降りたものの今日は鍋木さんの姿は無かった。きっと明日の作戦で皆忙しいのだろう。そう考えると僕もこんなところでト

ボトボ歩いているのが失礼に思えて足が自然と早くなった。

基地へと入った頃には既に日が沈んでいた。中の兵隊さんたちは皆僕を見ている。やはり目立つのだろう。自衛軍の新型兵器を土壇場で動かし、二度も戦闘に介入した司令官の息子。

一部からは「七光り」だとか言われそうだけどそういった陰口には昔から慣れていた。東京差別の規制前と比べたらよっぽどマシだ。

「瀬田軍曹！」

「ハイッ！」

唐突に呼ばれて思わず声が裏返った。すると僕を呼んだ張本人が後ろでくすくす笑っている。

「……流希、笑わないでよ」

「少尉を付けなさい。——さて、どうせ案内が居なくて心細かったんでしょ？ ほら、付いてきなさい。アンタの部屋はこっち」

そう言うとき流希は僕の手を握り、歩き出す。柔らかいその小さな手が僕を引っ張る。

こんな小さな女の子が戦つてると考えると——

いや、彼女はお父さんに近づきたかったんだっただけ。僕は思い出すと余計を考えるのをやめにする。

視線を感じる。賑やかというより騒がしいというような基地の中、僕と流希は歩いていった。

「ここがアンタの部屋よ。一応たった一人のDE-S起動者ってだけあって結構な待遇なんだから」

「ありがとう」

「礼なら司令と嫡木顧問に言つて。私は別に何もしてない」
そう言うとき流希はそっぽを向いて足を動かし始める。

「あっちよと！」

僕が呼びかける。それと同時に、彼女は足を止める。

「――明日、頑張りなさいよ」

再び足を動かし始める。さっきよりも足早に彼女は歩いていく。僕は声をかけようにも出来なかった。

今日、大ちゃんが帰って来ないのは分かっていた。それでも私はいくばくかの期待があったのだろう。何時の間にか私は四人分の夕食を作っていた。

あれからまだ一週間も経っていない。それなのにこんなにも遠くに行ってしまった。

一緒に学校に行つて、一緒に学校から帰つて、道草して、一緒にご飯食べて――

「私にも出来ることないのかな」

ふと思った。でも私にそんな事は出来ない。

私に出来ること。

私はこうしてお料理したり洗濯したり。それしかできない。

でも大ちゃんは何時の間にかこの街の――国の人を守る立場になっていた。大ちゃんのお父さんは軍人さんだし前々からそうなることは分かっていた。

でも、あまりに唐突だった。

現実を受け止めきれてないのだ。

つくりすぎた料理を見てお父さんが「どうかしたか？」と聞いた。

私は潤んだ瞳から涙が溢れるのをこらえ、笑みを浮かべると「なんでもないよ」と返した。

ケータイが小刻みに震えた。三畳程のベッドしかない部屋で僕は寝転がっていた。

電気のついた部屋の中、僕はケータイを手に取る。メールが一件届いていた。愛菜からだ。

『こんばんわ。もうご飯は食べましたか？明日はついに作戦が始まりますね。絶対に生きて帰って下さいね。私は大ちゃんを待っています。』

愛菜らしいな。僕はそう思うと携帯を閉じる。

ベッドから体を起こす。いい加減適当にシャワーでも浴びないと気持ちが悪かった。

あれからシャワー室を探すのに一苦労し、さらに汗をかいた僕はそれを洗い流した。

使っているのは筋肉質なおじさん。もとい、お兄さんばかりで最初は気まずかったものの皆いい人ばかりで直ぐに打ち解けてしまった。支給品のタオルで水滴を拭くと用意されたスウェットのような寝巻きに着替える。

今度は案内もあつてか簡単に部屋に帰ることができ、僕は一日精神的に疲れた体をベッドに委ねた。

アラームを一時にセットする。作戦開始は三時。いつもはテレビでも見ているような時間だが今の僕には時間が惜しかった。

深夜。作戦開始まであと数分となったV M F L。その中枢に位置する巨大な司令室、つまりはV M F Lの『脳』となる部分に私、瀬田浩三は居た。

まだ夜も開けておらず、窓からの光は一切差し込んでいない。人工の光のみが部屋を照らしている。

司令席から私は見下ろすようにオペレーター達が忙しく動くのを見た。高速で動くその手がキーボードを叩き、軍部はそれによって連携をとり、動く。

視線を自分の手前に戻した。机の上には大量の書類が残っている。深夜からこんな事をやっている自分をアホらしく思いながら渋々とペンと印鑑を握る。

こんな物、会計にやらせておけばいいものを。そう思ってしまうのも仕方ない。V M F L自体急場凌ぎの独立愚連隊のような物で実際にV M F Lの母胎となっているのは自衛軍でなく、東京探査班で有名な相模原遺伝子研究所だ。だからこそA Dやプロキオンのようなものが扱える訳だが。

ふと、一枚の書類が目に入った。「シリウス 整備費削減に関するレポート」書類にはそう書かれている。

東京探査班の遺産の一つ、『シリウス』これはプロキオンよりも後に作られたものだと思われ、当初はシリウスの起動実験を優先して行われていたが機体の動力部に未知のテクノロジが使われており、それを統括するシステムが何らかの生涯を起こしたことで実験は中止となった。

そんなこともあって未だに整備の続けられているシリウスだが動かない兵器を大事に取っておくことに対し不満を抱くのは無理もないしかし、それも今回の調査が成功すれば変わるだろう。相模原教授が見たもの。それさえ分かればシリウスは――

「ロシア探査部隊、離陸を開始」

オペレーターの一人がそう言ったのをきっかけに私は目をモニターへ戻した。巨大な薄型モニターには大きな輸送機が滑走路を飛び立

つ姿が映っている。

「……答えは見つかったか」

私がそう言うとは一番近くにいたオペレーターの女性が首をかしげる。私は「なんでもない」というとシリウスの整備費削減のレポートをゴミ箱へと投げ捨てた。

巨大な輸送艦に乗って僕らはロシアへと飛び立った。

小さな窓から僕は空を眺める。雲を突き抜けてゆく輸送艦からはほのかに陽の光が見える。

「アンタ、何やってんのよ？」

不意に流希が僕の後ろから声を掛けた。びっくりと肩を震わせて振り返る。

「ほら、デッキはこつちよ。自分の機体を把握しておくのはパイロットの仕事。さっさと行きなさい！」

流希はそう言うとその小さな体で僕の体を押す。

「ったく、男ならはやくしなさいよ！」

すると途端にグイグイと僕を押していた手を離れたかと思うとその手で僕の手を握った。

「ほら、同級生でもここでは私が先輩、上官。言うこと聞きなさい」そう言っ流希は僕の手を力強く引っ張って行った。

それから少ししてAD、そしてプロキオンの格納庫へとついた。灰色に包まれた格納庫はたくさんの電球にまみれ、壁がそれを反射する。

「はい、プロキオンはあっち。キャットウォーク伝ってそのまま真っ直ぐ」

流希は顎を使って前方を指す。その先にはADとは違う巨大な白亜

の機体があつた。

プロキオン。僕はアレに乗って二回も戦った。その周りには鍋木さんを始めとする整備班の人たちが忙しく動いている。

「……アンタはさ、何で戦う事にしたのよ」

僕がプロキオンの方へ歩き出そうとした途端、流希がそう言った。僕が足を止めようとすると言った流希は「歩きながらでいい」と言った。「どうしてって……やらなきゃいけない気がしたからかな？」

「ハア？」

流希は顔にシワを寄せて言う。

「いや、そんな事聞かれてもさ。僕だって何時の間にかこうなつてたんだし……」

「ADの操作とプロキオンの操作は似てるって聞いたけどシュミレーターを極めた如きじゃそう簡単に——」

流希は何かを言おうとしたが口を抑えた。それから少しして渋った顔をするともう一度口を開く。

「アンタの前任者——小宮山中尉。いや、今は二階級特進で少佐だったわね。あの人は私たちの中のエースだったの。それも私なんか比にならないほどのね？そしたらある日、ADと同じ相模原の遺産のテストをやるとかでAD隊を除隊してテストパイロットになったの。」

そう言うと流希は僕の方を見る。

「アンタはあの人の命も背負ってるの、半端な真似したら後ろから撃つから」

流希は右手を銃の形にすると僕の方に向け「バンッ」とやった。

途端、機内の無線にロシア語の声が聞こえた。鍋木は急いで操縦席へと向かう。

「どうした、何があつた？」

鍋木がそう問うとパイロットの男二人は急いで振り返り「ロシア空

軍が警告を発してきました！」という。

「なぜだ、ロシア政府にすっかり許可は取っておいたはずだ。もう一回連絡を取ってみろ」

パイロットの男はインカムを握るしめるようにすると流暢なロシア語で敵航空機に向かって問いただす。「こちらは日本のVMFL、探査部隊だ。許可は取っておいたはずだ」と。

男の額をいやな汗が伝った。

「……どうだ」

鎗木が問う。副機長の男もじつとロシア語を話す男を見つめる。

「……駄目です！撃ってきますす！！」

彼がそう言った途端、操縦室をはじめ、機内に取り付けられたミサイルアラートがけたたましく鳴った。

「クソッ、早く回避運動をとれ。探査ポイントまではあと少しなんだぞ！」

「了解です鎗木顧問」

そういつて男はライダーコントロールスイッチを操作する。大きく機体が揺れる。鎗木は何とか座席の背もたれに捕まってやり過ごす。

今頃格納ブロックの連中はてんでこ舞いだらう。

「……第二波きます。フォックス2！フォックス2！」

機長がそう言うのと鎗木は口元を押さえ、考え込む。そうして機体が大きく旋回する前に言った。

「……仕方ないか、時間稼ぎを頼んだ」

「頼んだって、鎗木顧問はどこへ？」

「プロキオンとAD隊をここで降下させる。撃墜されるよりはマシだ」

鎗木はそう言うのと壁に設けられたドアのコントロールパネルを使い、操縦室へのドアを開く。そして格納庫の方面へと歩き出した。

鎚木さんが格納庫に戻るや否や大声で「予定を早めるぞ！各員戦闘配置！」と叫んだ。AD隊の人たちは急いで体に装甲を取り付け始める。グレーの鎧のようなものを足から順にロボットアームが取り付けていく。プロキオンの隣であつた流希は真っ赤な鎧をつけていた。

「大輔くん、予定通り僕等はプロキオンで目標地点まで接近して調査する。いいね？」

コックピットに仮設シートを取り付けながら鎚木さんは言う。

「あの……さつき大きくゆれましたけど何かあつたんですか？」

僕がそう問うと鎚木さんは物思いにふけたような顔をした後、「なんでもない、気にするな」といった。

「そう……ですか」

レバーをつかむ。支給された軍服に専用のインカムを付けただけ。そんな簡素な装備のまま僕はメインコンソールをタッチしてプロキオンを起動させる。

低い重低音を轟かせながらエンジンは動き始める。コックピットを小さく小刻みに振動させながら。

「鎚木顧問、もう限界です！早く脱出を！」

途端、球体型モニターに通信ウィンドウが自動で開き、音声だけを伝えた。発信場所はこの輸送艦の操縦室。

「わかった、今すぐ降下させる。——大輔くん、今から前でのハッチが開く。そこから降りるんだ」

「分かりました」

僕はそう言うのとフットペダルをゆっくりと踏んだ。プロキオンは少しづつカタパルトへと近づく。

「いいか大輔くん。今のプロキオンは飛行用のExternal Flight system、つまりは無理やり飛べるように改造してある。操作はADと一緒にだが……いけるか？」

「やってみせます」

ペダルから足を離す。ガチャンと金属音がしてカタパルトへの接続

が完了した。グレーの装甲板がゆつくりと開き、まだ朝日が出たばかりのロシアの空が姿を表した。

僕のみている方向からはちょうどよく太陽がまっすぐに見えた。つまりはほぼ真東を向いているわけだ。

装甲板が完全に開ききった。風がなだれ込む。発進用のランプが赤い灯りを点けた。次に隣のランプそしてもう一つ隣の3つ目のランプに明かりが灯る。その次に全てが青く染まってプロキオンのモニターには『B e c o m e a b i r d . 』と表示された。

「プロキオン、行きます！」

ペダルを強く押し込んだ。後方のスラスタが青い光を放ち、カタパルトによって押し出された機体は虚空へと飛びたって行く。

光は膜となり、機体の後ろへと広がる。その姿は彗星のようだった。

「こちらクリムゾン1、プロキオン聞こえる？」

モニターの左側、赤いウィンドウが開く。クリムゾン1というのは流希のコールサインだ。

「こちらプロキオン、どうかした？」

「どうかしたのなにもないわよ。先刻の緊急降下でAD隊が分断された。私は隊員の生存確認とロシア軍を何とかする。アンタは早く目標ポイントまで行きなさい。鎚木顧問を頼んだわよ」

流希がそう言うウィンドウが勝手に閉じて通信終了の文字が表示される。リーダーを確認するとプロキオンとは逆方向に飛翔する機体があった。AD隊、クリムゾン1のIFF 敵味方識別装置、流希だ。

「あの、鎚木さん、さっきロシアがなんとかって……」

「いいから君は操縦に集中しろ。心配するな、僕には作戦立案の責任者として君たちを生きてVMFLに送り届ける義務がある。今は君のやるべき事に集中するんだ」

わかりました。と僕は小声で言う。と画面の奥、探査ポイントである

爆心地を見る。土を抉られたような穴が見えた。ここからポイントまではおよそ5、6kmその距離にも関わらず結構な大きさに見える。けれどそれでも東京で起きた『何か』には到底及ばないらしい。そう考えると寒気がした。

真っ赤なAD アーマードレス を着た私は仲間を探してロシアの空を飛んでいた。太陽は雲に隠れ、寒さが世界を支配する。

どこにもいない。反応がない。音の鳴らないレーダー。その全てが私を恐怖へ陥らせる。

「クソッ、どうなってんのよ」

吐き捨てるように言う。ライフルを持った右手の感覚が寒さと重さでだんだんなくなっていく。

この極寒の地で、金属を体中に取り付けて。

フェイスマスクに搭載されたヘッドマウントディスプレイは仄かに白い針葉樹林を映すだけだ。

途端、耳元にセットされた骨伝導タイプのヘッドホンが『Warning! Warning!』とシステム音声を鳴らす。

レーダーを見る。どこから湧いて出たのか熱源が高速で接近している。私は急いで脚部のスラスターを吹かして上空へと舞い上がる。

眼下は先程の急上昇でできた煙ともやで視界を遮っている。その中を何かの影がうごめいているのがうつすら見えた。

ライフルを構えた。左手はグリップではなく念のためにアンダーバレルグレネードを持つ。

AR方式のマルチサイトを見る。音声コントロールで私は「サーモスコープ」と言うディスプレイにはAR技術による擬似的なサーモスコープがライフルのマウントに表示される。

赤い動体が見えた。その姿はなんというべきか。ロシアの戦闘機などではない。まるで花のような形だった。

探査ポイントは目に見えていた。あと数秒でそこに離陸できる。そうして探査が終了すれば僕の仕事は殆ど終わったことになる。

大きなクレーターのようなものが見えた。ドーム型にきれいにぽっかり開いた穴は土だけを残し、円の中に木は一切なかった。にも関わらず円の外に出るやいなや樹木が荒らされた形跡はない。

まるでピラミッドだとか地上絵だとかそういうものを見ている気分だった。

「よし、それでは僕は調査を始める。大輔くんは……そうだな、まずはあの円の中心に離陸してくれ」

「わかりました」

ペダルから足をゆっくりと離す。ラダーコントロールスイッチを押し、徐々に機体を下へ向ける。

しかし、僕はそこで何かに気づいた。慌てたバーニアを噴射して急上昇する。

「……ッ！何をしてる！？言われた通りにするんだ！」

「鎚木さん、待ってください！あの球の中に何かあります！……嫌な予感がするんです」

僕がそう言つと鎚木さんはシートから身を乗り出し、旋回するプロキオンから下を見る。

「あれは……」

鎚木さんがぼやく。

見えたもの。それは花だ。真つ赤な大きな花。

「薔薇……なんであんなものが……」

妖艶に輝くそれは僕ら吸い込むように円の中心に佇んでいた。

第五話 光り輝く者 シリウス

四時限目、数学の授業の最中に警報が鳴り響いた。

お昼を食べた直後、暖かな陽の光が誘う眠りに耐えながら受けていた授業はとたんに終わりを告げた。

学校のスピーカーから警報が鳴り響き、その直後、みんなの携帯が一斉にブザーを響かせた。無論、私の携帯もポケットの内でブルブルと震えている。

「新長野市より市民の方々へ緊急避難要請です。市民の皆様は落着いて避難を行なってください。」

廊下にあつた電光掲示板は瞬く間に赤や黄色といった威圧的な色へ代わり、明朝体で書かれた避難誘導灯へ変わる。

教室にいた生徒を始め、先生たちが途端に逃げ出し始めた。私はそれを呆然と見ていた。

「愛菜！なにやってんのよ！」

誰かが呼んだ。でもそれを聞いても私は何も思わなかった。それよりも大ちゃんがない状況、あのロボットがないという状況を考えていた。確か大ちゃんの話ではADも出払つてるとか言っていた。だとすれば今の新長野市は危険なんじゃないか？と。

何故か私はいつにもまして冷静だった。

「雀野！」

また誰かが呼んだ。それは廊下の方向からではなかった。真逆の校庭の方からだった。

私は急いで窓を開けて外を見た。自転車がひとつ、砂埃の中に佇んでいる。

「雀野！早く来い！」

西君だ。でも確か今日は風邪でお休みだったはずじゃ……

すると私がそう考えている間に西君のクラスの伊藤先生がすごい形相で彼を追っかけている。

何か胸騒ぎがする。この街で何かが起きようとしているんだと。

私はその直感し従い、窓際にあつた非常用縄はしごを降ろすとそれを伝つて一気に下へと降りる。するとそれに合わせるかのように西君は自転車を使って西東先生をかわし、はしごの下につける。

「早く！」

西君が叫んだ。食いしばった歯をさらに強く食いしばってはしごから飛び降りる。転びそうになりながらも私は手を引かれて自転車の後ろに乗せられる。

「雀野、事情は後だ。……大輔の為に何かしたいんだろう？」

「……うん」

私はそう言つて頷くと西君は自転車のペダルを勢い良く漕いだ。砂埃を立ち上らせ、自転車は避難者のかき分けながら疾走した。

「西君！なんでまたこんなこと！」

疾走する自転車に乗り、強い風を受けながら私は言った。

「言われたんだよ！長門様に！」

怒鳴るように西君は言う。

「長門様つて、ADのパイロットつて噂の……」

「そう！俺は今朝、極秘作戦に飛び立つ新兵器をこいつに収めるために軍に潜入した」

西君は片手に持ったカメラを持ち上げて私に見せながらそういった。

「その時に長門様に見つかつてさ、もしここで何かが起きたら俺がなんとかしろつて言われたんだ」

「それがなんで私を呼ぶことに……」

「俺聞いたんだ、大輔があの新兵器のパイロットだつてこと。長門さんに。それで、もし私たちのいない間に何かあつたら彼の大切なものを守つてあげてつて」

「それで……私を？」

私が恐る恐るそう聞くと西君は首を大きく立てに振った。

「俺、アホだからさ。アイツの大切な物なんて全然わかんなくてさ。そしたらアイツの大事な物って友だちなんじゃないか。俺達なんじやないかって」

「大ちゃんの大切な物……………って、じゃあどこに向かつてるのよ！？」

「えっ？どって言われてもな……………」

それからして西君は笑みを浮かべ、後ろを振り向くと当然のようにこういった。

「V M F L 基地だ」と。

深紅の薔薇はクレーターの中心に一輪咲いていた。しかしそのサイズは普通の花を逸脱したものであり、世界最大のラフレシアでさえ凌駕していた。もはやそれは花の形をした全く別の物だ。

隣でパソコンのキーボードを叩く鍋木さんの目はいつになく真剣であり、焦ったような表情だった。彼のパソコンからは様々なエラー音が鳴り響き、それがプロキオンの警告音と共鳴している。

「なんだこいつは…………… M F L の 1 0 0 倍近い A E 値を示している…………… 大輔くん、アイツがどうやら元凶のようだ」

「あれが…………… 東京を壊滅させた……………」

破壊された緑の中に咲く一輪の花。それが破壊の元凶。妖艶にして暗く、陰湿。

僕がその花を凝視すると僕の網膜に反応したロックオンカーソルがズームを始める。

雲が晴れ、光が少しだけだが差し込み始めた。深紅の薔薇その光を反射し、僕の眼へと向かわせる。

思わず僕は眼を瞑った。その途端、爆発音が聞こえた。その音で叩き起こされるように僕は光の焼きついた眼をこすりながら開ける。目の前に広がっていたのは太陽に花を向ける向日葵の如くプロキオ

ンに花を向けた薔薇だった。その薔薇の中心からは仄かに赤い粒子が舞っている。

「あの薔薇……一体――」

鎬木がそう言うのと再び爆発音が響いた。薔薇とプロキオンの真ん中で炎が上がる。上空をロシア軍の戦闘機が飛んでいた。

「まさか長門くんが抜かれたのか!？」

「流希が抜かれたってどういうことですか? 一体何が!？」

「いいから君は操縦に集中するんだ。早く戦闘機を撃ち落として調査を始めるぞ」

「撃ち落とすって……」

背筋が凍った。戦闘機を、人を殺せというのか?

「できませんよ! 僕に人殺しをしろっていつんですか!」

「……そうだ」

「嫌です! 誰かが死ぬのは嫌だって……誰かが傷つくのは嫌だって

……」

すると鎬木さんはパソコンを折りたたみ、蹴り飛ばすようにシートを外すと右手で僕の襟首を掴む。

「じゃあ君は、MFLなら、動物なら殺しても構わないと言いたいのか! どれも命あるものなのに人が相手なら手のひら返しかな? 君のすべきことはそんな薄っぺらいものかな?」

「それは……」

「答えられないならそれまでだ。君はやるべきことをやるしかない。たとえそれが状況に飲まれているだけだとしてもな」

鎬木さんはそう言うのとズボンのポケットから何かを取り出す。宝石のような真っ黒い六角形状の物。けれどもそれはほとんど光沢はなく、黒いただの石のようだ。

「いいか、これにはまだ僕らも解析できてないプロキオンのブラックボックス関することが詰まっている。君のこれを託す」

「そんな……僕に渡しても……」

「僕は意味があるから渡している。さあ、早くハッチをあける」

「何をする気です！？ここでハッチを開けたら敵の的じゃ——」
「いいから開ける！」

怒鳴りつけるように言った。僕はうつむいたままハッチを開ける。
エアロックが外れ、ゆっくりと開く。

「僕はこれから調査に行く。君は囷となつて調査を手伝ってくれ」

「そんな！死ににいくようなものじゃないですか！」

「ああ、だから君が必要なんだ。……男なら誰かのために何かをしてみせろ」

ハッチが閉じた。楠木さんはニツコリと笑ってピースサインをした。
僕もそれに応える為に必死に涙をこらえてピースサインをした。

眼下の熱源反応はIFFに反応することは無かった。サーマルスコープでみるそれは花卉のように美しく舞っている。

「こちらクリムゾン1、誰か生きてたら応答しなさい！」

私は叫ぶようにして無線機に言つて返答を待った。しかし、ノイズが聞こえるばかりで何か音声が届くことはない。

舌打ちをしてもう一度スコープの中を覗いた。あの熱源はこちらには気づいていない。だとすれば私は一旦退避するのが妥当だ。下手に突っ込んで撃墜されるなんて新兵のやることだ。

以前、応答はない。ただでさえ寒いロシアの朝だというのに妙な寒気が私を襲う。

不意に耳を劈くような爆発音が聞こえた。サーマルスコープはその爆発を無慈悲に真つ赤な色でデータとして表示する。

その赤の中にもう一つの赤があった。人の形をした赤色が。

私はIFFを確認する。クリムゾン02、二番機が炎に飲まれている。

「クソッ、なにやってんのよ……クリムゾン02！応答しなさい！」
「……隊ッ……長……こいつはただの敵じゃ……」

「待つてなさい、今助けに行く！」

足を天に向けた。日の差し込み始めたその空へ。

背景の灰色が一気に山の緑へと移り変わった。体感速度はすでに800kmは超えている。

猛烈なスピードで着る戦闘機をまとった私は飛んでいく。

落下していく最中、一点の赤が見えた。それは花弁、巨大な花弁。蹴り飛ばすように足を下げる。バーニアの噴出される足をむりやりに動かし、急減速する。

ADの軋む音と共に、林にバーニアの青い炎をまき散らして花弁の方へと進んでいく。

「早く捕まりなさい！」

私は目の前にいるクリムゾン02に向かって叫んだ。被弾して操縦不能になった彼のADへと私は機械に覆われた手を伸ばす。

あと、数メートル……

ドカン、と爆発が私の目の前で起きた。差し伸ばした手のひらの上で炎が上がるかのように。

あと少しで味方を助けられる。そう思った矢先に、その花弁から放たれた光弾がクリムゾン02を貫き、燃料に引火した。

私は推進剤を止め、転げ落ちるように地面に落ちた。不思議と痛みは感じなかった。でも、胸の奥に何かポツカリと空いた感じはした。目の前で、助けられた命がなくなるといふのはこんなことなんだと『他人が死ぬのは嫌なんだよ！』

不意に彼の言葉が再生された。まるでその言葉はここで私の頭で流されるのを待つていたかのように。

「そうね、そういうことね」

私は砂に汚れたADを手で振り払う。わずかに砂埃が立つ。

「とんだ馬鹿ね」

私はそう言つと右手に持ったアサルトライフルのマルチサイトをダットサイトに切り替え、目の前に敵へと向かった。

プロキオンの球体型モニターにはしっかりと人影が映っていた。あの『何か』を起こした元凶だという花に向かって走る鎬木さんの姿が。

鎬木さんは僕に言った。何かをしてみせろと。それが僕に今やるべきことなんだと。

「……行きます！」

怒鳴りつけるように叫んだ僕はフットペダルを押し込んで脚部スラストから推進剤を噴出させた。体を締め付けるようなGが襲った後、なんとも言えない浮遊感と共にその『薔薇』へと向かう。

花卉がゆつくりと回転しながらまわり始めた。中からは抑え切れないほどの光が溢れた。これから行う攻撃の強力さを指し示すように。

花の中心を注視する。網膜に連動してプロキオンは花の中心へとガンレティクルを合わせると僕は夢中になってトリガーを引き、鉛を浴びせる。

体全体を襲う反動がコックピットを揺らし、恐怖と振動とでレバーを震わせる。

それでも僕は恐怖ではないと無理矢理に言い聞かせる。これは武者震いだ、と。

被弾した薔薇はゆつくりと砂埃を上げて倒れ、そのまま光弾を発射した。眩い光が空気を揺らし、草木を焼き尽くす。その振動でプロキオンも怯えるかのように震える。

「良い感じだ大輔くん、そのままアイツの眼を奪っていきな。解析はあと数分で済む」

自動で開いた『音声限定』と表示されたウィンドウと共に鎬木さんが無線でそういった。僕は「分かりました」と受け答えるとすぐさ

ま補助スラスターを点火して姿勢制御モードへと入る。

目の前の花は再び光を放つ。メインエンジンをフル稼働させて左へ薔薇と点対称に動きながらライフルを発射する。バーニアとリコイルショックの2つの衝撃に耐えながら僕は必死でプロキオンを操縦した。

そして、薔薇は黄色い閃光を再び放つ。今度は空に向かって。上空に居たロシアの戦闘機が塵になっていくのが見えて怖くなる。

「大輔くん、あと少し。あと少し踏ん張ってくれ」

「わかってます、今やってます！」

トリガーを引きながらそういった。腕にジーンと衝撃が残る。体がカチコチに固まったようだ。

「あと何%ですか!？」

「7%だ！」

僕が怒鳴りつけるように問うと楠木さんも負けじと大声を張り上げ、キーボードを叩く音をひびかせながら言った。

三度、薔薇が輝き始めた。

ガンレティクルを表示させ、両手でライフルを構えるとプロキオンは自動でスコープの倍率を上げる。

ど真ん中に薔薇を捉える。これで終わりだ。僕のやるべき事は終わる。

途端、激しいノイズが耳元に響く。砂嵐でも襲ったかのように。そしてプロキオンの画面も砂嵐の如く映像が乱れ始める。

「待って、どうなってるんだ。一体何が——」

僕が言いかけた時、何かが聞こえた。人の声にも似た何か。この声は聞き覚えがある。

悲鳴のようなその声。男の声。

まさか。と僕は思った。不安が脳内を埋め尽くし、目の前の状況が絶望へと導く。

そして、砂嵐が消えた。

そこに広がっていたのはなんでもない、ただの更地だった。

「待つてよ……どうなってんだよこれ……」

消えている。ただ何も無い。林は燃え盛ることもなく綺麗になくなっている。それと共に鎬木さんも、ロシア軍の戦闘機の姿すらない。あるのは目の前にいる薔薇のみ。まるで嘲笑するかのように花弁を大きく開き、僕の方を向く。

唇を噛んだ。口の中にじんわりと鉄の味が広がる。塩の味もした。泣いていたのだ。

汗ばんだ手は不思議と軽かった。体が勝手に動くかのように。途端、胸元のポケットが光り始めた。僕は急いでポケットからそれを取り出す。先ほど鎬木さんからもらった宝石のようなもの。漆黑であつたそれは仄かに黄色く光始める。

僕がそれをまじまじと見ていると急に画面が真っ赤に染まった。

『DE-S』

初めてプロキオンに乗った時と同じ現象が起き始める。真っ赤に染まった『DE-S』の文字で埋め尽くされる球体型モニターはすぐさま何も見えなくなった。

文字で埋め尽くされ、前は見えず、あらゆることが未開の部分へ僕とプロキオンは踏み入れる。

『DE-S』の文字が吹き飛ばされるように消える。だが、あの時とは何かが違う。

プロキオンの頭部、頬の部分に取り付けられた装甲からフィンが展開する。本来は放熱に使うそれがゆっくりと伸び、その合間から黄金の粒子が放たれる。

後頭部の装甲がリフトアップし、排熱部がむき出しになると装甲がアイセンサーに押し出され、ゴーグルのようなプロキオンの眼は双眼へと変わる。

プロキオンは光をまとった。それはまさに星の如く。

僕は感じていた。これがプロキオンに残された『何か』の遺産。プロキオンの真の姿であり、17年前の何かを止める力、目の前の薔薇を止める力なんだと。

フットペダルをゆっくりと倒した。先ほどとは違い、機動性は比にならない物になっている。

光を撒き散らし、更地に光の種をまくようにプロキオンは薔薇を翻弄する。

ライフルを手放す。砂埃を上げて落下したその代わりに僕はサブウェポンのナイフを取り出す。エアロックが外れ、中に閉じ込められた温かい空気が周りの寒気晒されて白い水蒸気となる。その白いもやの中を切り裂くように現れるナイフを受け止めて僕はそれを流れるように構えた。

加速する。凄まじいGがかかっているにも関わらず、興奮状態に陥った僕はアドレナリンという麻薬で不要な感覚が鈍り、必要な感覚が尖る。

「うおおおおおおッ！」

己の体を動かすようにプロキオンを操る。僕とプロキオンが一体化したような感覚に陥る。

右手に持ったナイフの感触が伝わる。僕はそれを薔薇の真ん中へと向ける。

光を帯び始める花。そんなのどうでもよかった。今の僕は根拠のない希望に満ち溢れその感情のままに動いていた。

金色の粒子をまとった白亜の機体は鉄の刃も持って深紅の薔薇へと加速した。

僅かな推進剤をセーブしながらADを加速させる。花卉の放つ花粉のような粉は地に落ちた途端、草木を辛し、辺り一帯を無へと変える。

こんな敵見たこと無かった。MFLでもなんでもない、巨大な花。美しいその風貌と裏腹にそこから放たれるおぞましい力は私の恐怖にさらに加速させる。

亜寒帯、ロシアの寒さと恐怖によって震える足がバーニアのコントロールを鈍らせる。

凍えきつた指を、今にも引きちぎれそうな指でトリガーを引く。全身が痛かった。心が痛かった。

「うおおおおおおお！！！！」

仲間の弔い。なんてかつこつけたマネは私にはできない。でも、やれることをやらなくちゃならない。だって、アイツも今そうしてるんだから……

途端、脚部の補助スラスタの炎が弱まった。コントロールを失い、落下する。私は攻撃の手を緩めない。芯まで凍えきつた指でトリガーを引いて暴れ馬と化したライフルを片手で必死に抑えて、もう一つの手で空気を掴む。

「メインバーニア出力最大！」

私が叫ぶと音声認識システムが起動してヘッドマウントディスプレイに推進剤の残量が大きく表示される。こっちの残量もあと少ししかない。

バーニアの起動後、手動で消火する。俯せの状態で落下する。そのまま私片手で撃っていたライフルをリロードすると両手で持ち直し、アンダーバレルグレネードに手をかける。

狙えるのは一度きりだと考える。自分に言い聞かせる。

コンピュータは『ストール』だの『トリムアップ』などと私に強要するがそれは全て無視する。

ARマルチサイトに映し出された紅点が赤い花卉へと落ちていく。あと……あと少しだ。これが通じなければどうにも手段はない。でも、やってみる価値はあるはずだ。

支援コンピュータが電子音を鳴らす。紅点が深紅と重なりあう。私ははちきれんばかりの思いをその一発に込め、指が引きちぎれそ

うになるほどトリガーを引いた。

「竈木からのデータは？」

指令本部へと続く自動ドアを通りながら私はオペレーターに問う。

本部には巨大なスクリーンパネルと無数のコンピュータ。MFLに、新長野市に関する事のほとんどがここで管理、運営されている。

「現在、送られてきたデータを元にDE-S起動プログラムを構築。完成後にシリウスヘインポートします」

「竈木からの通信は？」

本部を見下ろす位置にある司令席へ座る。目の前にある資料に目を通しながら私は問う。

「それが……」

オペレーターの一人がうつむき加減に言うともう一人が割って入る。

「先程から電波障害が発生してます。通信はほぼ不可能かと……」

「では、衛生で動きをトレースしろ。モニターに映像をだせ」

私がそう言つと事務椅子を回転させながら「了解」と何人物オペレーターが答え、キーボードを叩く音が響く。

「大輔……」

息子の名前をつぶやく。いつもいつしよにいけない分、心配性な自分が生まれる。

もうアイツも一人前の男だ。それに俺の子なんだ。私はそう言い聞かせて心を沈める。

「司令！」

途端、部下の一人が本部へ息を切らしながら入ってきた。その様子から何か深刻な事態が起きたのだと推測できる。

「……子供が……子供がVMFLに……！」

「どういうことだ、今はAブロックは閉鎖中のはず——」

私がそう言いかけた最中、警報がなった。自動でスクリーンパネル

に赤字で『警告、MFL侵入』と表示される。

こんなときに限って……

唇を噛む。生唾を飲み干すと私は司令席に戻り、戦車隊への直通無線を開いた。

確か、確かここだった。

私と西君は人気のないA区画に居た。VMFLの周りは慌ただしさを感じられない。戦車はもう出払っていて他のブロックに現れたMFLの遊撃にあたっているのだろう。

分厚い鉄製の扉。私と大ちゃんが全てに巻き込まれた原因の生まれた場所。この先にあのロボットはいた。

「本当にここから入れるのか？」

「うん……多分ね」

つい数日前なのにずいぶんと前の事のように思える。この先であったこと。急に現れたMFLと戦ったあの時のこと。

西君はこの新長野市の事情に詳しかった。日頃軍部のすきを突いて警戒網をぐぐり抜けているだけのことはある。それでもトップクラスの軍事組織、特殊機関であるVMFLの地理情報はない。今朝、長門さんと出会ったのはDブロックの空港。そこから大ちゃんもロシアへと飛び立った。

「じゃあ、開けるぞ」

西君が小声でそうつぶやくと私は小さく頷く。彼はそれを確認すると首を縦に振って扉を押し始める。堅牢なその扉は体全体で押してようやく動き始める。

ズズズ、と金属が擦れる重厚な音がしてわずかに開く。

私は西君の方を見た。彼は無言で顎を扉の奥をさして「行け！」と示す。私はそれに首を立てに振って応えようと体を横にして隙間を通る。それからして片手で扉をむりやりに抑えながら西君が入っていく。

る。

この奥、この先にロボットがあつてV M F Lの建物へ続く道があつた。しかし、その前にあるはずのないものがそこにあつた。

細長い尖った獣の顔。三角形の耳を携え、明かりの灯っていないグレーの目で私を見つめる『それ』は犬のようなロボットだった。

大ちゃんの乗ったロボットが居た場所に、全く同じ所にグレーの巨大な犬が佇んでいた。

巨大なスクリーンに格納ブロックの映像が映った。D - 3 格納庫。前にプロキオンが格納され、現在はシリウスの改修の為に使われている場所。

なんでまたそんなところに？ そう思いながら私は映像に目を通す。

「ん？」

何か見たことのある気がした。

「映像を拡大できるか？」

私がそう聞くとオペレーターは「はい、拡大します」と言つて顔の部分へと映像が迫つていく。一瞬、曇つたようにピントの合っていない映像はそれから少しして彼らの顔をはつきりと映しだす。

大輔の、息子の友人。私の友人の娘だった。

よりもよつて……。頭を抱えながら顔を伏せる。世界は狭いものだと思う。

「今すぐ彼らの保護を出せ、今すぐだ」

顔を伏せながら言う。しかし、黒いスーツを着た部下の一人が「しかし、現在M F Lの迎撃で全兵力を使い果たしています。プロキオンとA D 隊さえいけばこつはならないはずですが……」と言つた。私はその言葉に怒りを覚えた。子供一人守れないで何が軍隊だと。座席から立ち上がる。すると黒服の男は「どこへ行かれるのですか？」と聞いてくる。

「彼らの保護へ向かう」

ただそれだけ私は答えた。

今、自分の息子は辺境の土地で自らのやるべき事をしている。だとすれば私のするべきことはなんだ？ 決まっているアイツの帰る場所を守ることに。それが俺が誰かの——息子の為にしてやれる『何か』なんだと。

「待つてください、この区画にMFLが来るかもしれないのです。わざわざ司令自ら行かなくても——」

「じゃあ、お前も来るか？」

私は冗談半分に聞いた。苦笑いしながら私は彼の方を向く。プシュツという音がして自動ドアが開いた。

「ええ、お供します」

彼はそう言つとネクタイを直して私の後ろに続いた。

爆煙が空を染め上げた。深紅の花弁はどこにも見えない。舞っているのは赤い破片。

補助スラスターをゆつくりと、少しずつ吹かしながら着陸すると、手でバイザーを持ち上げた。

硝煙の香りがあたりに立ち込めている。

体中が痛い。自分の下に広がる赤い破片が血のように思えるほど痛い。

ライフルのストックを地面に突き立てる。杖のように持って少しだけ休息を取る。

煙が晴れない。もはや煙と呼ぶべきなのか水滴と呼ぶべきなのか私にはよくわからない。

突き立てたライフルを右手に戻す。体の節々がバキボキと音をならす。

途端、何か衝撃のようなものが私を襲った。空気が振動する。煙がそれをよくわからせてくれた。波のように煙が揺れていく。地震ではない、空震だ。

急いでヘッドギアを降ろし、スリープ状態のディスプレイを再起動させる。

12方位で風向きが表示される。東から、この強い空震は来ている。私は首だけ東へ向ける。

確かそっちは探査ポイントがあつたはずだ。だとすればアイツが危ないとでも言うのか？

「行かなくちゃ……！」

空震が強くなる。立てないほどの振動、必死に地面にしがみついて私は姿勢を立て直す。

光が見えた。アイツのいる方向、黄金の光が見えた。

残された推進剤。まだだ、まだアイツを助けることぐらい私にはできる。それぐらい余裕だ。

右手に激痛が走る。銃を持ち上げただけでこれだけ痛む。無謀なんだろう。でもそうは思わない、思いたくない。

両手でライフルを持つ。足を肩幅に開く。

歯を食いしばる。そして走りだす。一步、二歩……

そしてスピードのついてきた所で私は思い切りジャンプしてバーニアを一気に点火させる。

尋常ではない痛みが体にのしかかる。

余裕だ。そう言い聞かせる。アイツの手助けなんて余裕なんだって。

私は呆然と立ち尽くした。その犬の目の前で。

今、西君はVMFLへの入り口を探している。私があつたと思っていた通路は警戒状態のせいか鍵がかかっていて向こうから開けてもらわなければはいることができない。

緑色の手すりに手をついて巨大な犬を見つめた釣り上がったグレーの目はどこか寂しげだった。この目もおそらく輝くことができるんだろ。でも、今は出来ない。なぜかは分からないけどそう感じるのだ。

それからして西君が私の方へ歩いてくる。私は「どうだった？」と問うと西君は黙って首を横に振る。

「そっか……」

それでもここはまだ安全なんだろう。私は携帯電話をポケットから出してニユースを確認しようとする。しかし、そもそもインターネツトに接続できず、何もわからずじまいだった。

クラスのみんなは大丈夫なのだろうか？本当に私たちはここに来てよかったのだろうか？

そう考えると不思議と涙が出てきた。それを見た西君は彼なりに気を効かせたのか黙って後ろを向くとどこかへ行ってしまう。

私は声を上げて泣いた。理由はない。ただ泣けてきた。感情が溢れ出した。

すると、私の後方から何かが光った。思わず声を止め、後ろを振り向く。

巨大な犬。ロボットの瞳が金色に光っている。私は手で涙を拭うとその手で瞳に触れる。

吸い込まれそうなその美しい瞳。機械なのにどこか生き物のような瞳。

すると、途端に犬は首をゆっくりと下ろす。そして首の付け根の部分のハッチが開く。

「乗れっていうの？」

私は問う。機械が喋れないことぐらい知ってる。でも、不思議と私にはこの犬の、彼の声が聞こえた。

『乗ってくれ、俺の力を使ってくれ』という声。

私はあふれる涙を必死で拭うと手すりを飛び越え、首元のコックピットへと入る。

「そう、あなた、シリウスって言うのね」

幻聴なのか、それとも真実なのか。区別がつかなくなっていた。

シートに座ると勝手に回りの球体型のモニターに映像が付き始めた。奥で西君が必死で読んでいるのが見える。

私は直感的に今の状況が危ないと思った。西君も、私も。

無理矢理に橋を壊してシリウスを格納庫から出す。

目の前のモニターに赤い点がいっぱい表示される。MFLなのだろう。

「いきます！」

私がそう言つて無我夢中でレバーを倒すとシリウスは四肢を動かし、その体をしなやかに伸ばして走り始めた。

すでに私が来たときには遅かった。目の前にあったのは破壊された格納庫。そして影にうずくまった少年だった。

私は彼に駆け寄ると「何があつたんだ？」と、問う。

すると彼は「急にあのロボットが動き出したんだ。雀野はそれに乗って——」と答える。

「シリウスの起動はできたのか？」

私が黒服の男に問うと彼は「おそらく無理かと」と言う。

確かにまだ鎢木のデータを元にプログラムを構築していた最中だ。

たとえ急ピッチでやっていてもここまで早く起動できるようになるのはおかしいだろう。

では、彼女が大輔と同じDE-Sを起動できた人間だとも言うのだろうか？

すると耳に装着したイヤホンに音が聞こえる。

「司令！AブロックでMFLの出現が確認されました！」

それを聞いて私は舌打ちをすると黒服の男に「彼をシェルターへ届

ける」と言って連絡通路へと歩き出す。
最悪の状況が重なりあう。シリウス《光り輝く者》僅かな可能性にかけるしか無かった。

シリウス。犬の姿をしたロボットに乗って私はレーダーに表されたポイントへ向かっていた。

MFL、この街を犯す存在。それから街を、大ちゃんの帰る場所を守るのなら。そう思うと胸が熱くなった。

私にはどうやってロボットを操作するかなんてよくわからない。前に、大ちゃんたちで行ったADシミュレーターだけが唯一の知識。と入っても私自身やったことはなく、二人がやっているのを見ているだけ。見様見真似でシリウスを動かす。

細い通路を四本の足で疾走する。煙を上げてガシャンガシャンと金属音をかき鳴らしながら。

明かりが見える。外へ出るのだ。レーダーの反応が強くなる。この先に敵がいるんだ。

私は唇を噛み締める。レバーをギュツと握り締めて体に力が入る。方に力が入って硬くなる。

前方、龍のような黒い細長いものが空を舞っていた。あれが敵、この街を犯す存在。

「あつ、どうすれば……」

いざ、敵が目の前に現れ、動揺してしまう。武器は、シリウスはどうやってアレに立ち向かえばいいのか。

すると途端、球体型のモニターに勝手にウィンドウが開いて『V M F L Base』と表示される。

「誰が乗っているかは知らないが今のシリウスに射撃兵装は装備されていない。ナイフを使え、前足に装備されている」

低い男の声だった。聞いたことのある温かい声。大ちゃんのお父さ

んだ。

「分かりました」

私はそう答えると右手側のスイッチを操作してナイフを取り出す。不思議と動かし方は分かった。

エアロツクが外れ、プシュツと音を立てて飛び出したナイフはそのままシリウスの口元へと向かう。

それを加えるとペダルを踏んで加速する。地鳴りを起こして四脚で地面をかける。

上空を飛ぶ龍。襲い掛かるようにそれへ飛び込む。

鋼の刃が龍を切り裂く。しかし、切り裂いたと思ったそれは途端に分散し、そして再結集する。そして龍の形を再び取った。

「どうなってるのよ……通じてないじゃない……」

焦りと不安が私を飲み込む。龍が私の方へ向かう。真っ黒な龍が口を開けてシリウスへと向かう。

私は結局大ちゃんの力になれ無かった。ここまで着たというのに……絶望が襲いかかる。

途端、画面を黒く染め上げた龍は消え、画面は真っ青に染まった。

『DE-S』

青いその文字で染まったコックピットは何も見えなくなった。精神を安定させる色と聞く青だが今の私は全く落ち着かなかった。

コックピットが揺れる。四脚で立っていたシリウスは途端に二足で立ち上がる。私の体がぐんと伸びるような感覚がする。装甲がリフトアップし、拡張していく。前足が変形し腕となり、犬の顔の下にもう一つ、人の顔が姿を表す。

グレーのシリウスは金色の光を放つ。目を始め、拡張した装甲の合間を通るエネルギーラインも金色に瞬く。

犬のカタチから人へと姿を変えたシリウス。口に加えたナイフは手にある。

龍は光に照らされ、その動きを止める。まるで蛇に睨まれた蛙。フットペダルを踏むとシリウスはゆっくりと龍へ歩み寄る。

一歩ずつ、地面を揺らして進む。ナイフを構える。右手に持った鋼の刃は金色に輝いている。

その輝く刃を龍へと挿し込む。言葉に形容できない叫びがこだまし、黒い血液のようなものがドクドクと溢れ出る。

さらにレバーを押し込んでナイフを挿し込む。あふれる黒は更に増えていく。金色に照らされて影のような黒は消える。

ゆっくり、ゆっくりと龍はその姿を縮こませていった。

私とその地についたときにはそこには何も『無かった』
本当に何も『無いのだ』

プロキオンもロシアの戦闘機さえも何一つその姿は無かった。
それからややあつてIFF 敵味方識別装置 に何かが反応した。
ほんの僅かな期待に私はかけるがそこにいたのはAD隊の面々だった。

彼らが生きていた。それは本当に嬉しい。でも、アイツがどこにもいない。

推進剤の切れたADを付けたまま私は徒歩で探し始めた。
それでも、それでもそこにはアイツがいなかった。

第六話 穴の開いた日常

目が覚めた。体の節々が悲鳴を上げている。

ここはどこだ？僕はまだ覚醒しきっていない目をむりやりに見開いてあたりを見渡す。

薄暗い、コンクリートの壁。おかしい、僕は先刻までプロキオンに乗ってあの薔薇と戦っていたはずだ。

ぼやけた視界がだんだんと明瞭になっていく。薄いシートのかぶせてある診察台のようなベッド。僕はその上から降りると目をこすりながら歩き出す。

何か宛があるわけではない。むしろ何がなんだか分からない。記憶も何も無い。ここはどこだ？

すると途端、この部屋の奥で「ギイツ」と、扉の開く音が聞こえた。カーテンに仕切られた向こう側。僕はまだ寝ぼけている体をたたき起こして物陰へと隠れる。

向こう側で誰かが声を出した。その声は一体何の言語なのか分からない。英語なら中高とある程度は習っているので理解はできる。だとすればそれ以外の言語。くぐもった感じのその言葉はだんだんと僕の方へ近づいていく。

「まずい」と、脳が勝手に判断する。そうしてまるで反射のように僕の体は固いベッドへと入る。

薄いシートを被せて。寝たふりをする。

カーテンを開く音がした。ガラツ、と力強く、無理矢理に開けた音。僕はその音を聞き、思わず身構えてしまう。

すると誰かが僕の背中をポンポンと叩き、理解のできない言語で話しかける。その声は別に怒っているようにには聞こえない。それでも聞いたことのない言葉というのはどうにも身構えてしまう。

そうして僕が体を縮こませていると男はむりやりにシートをはがして僕を仰向けにした。彼と目が合う。反射的に『これはまずい』と

判断するも僕の体は蛇に睨まれた蛙の如く動かない。

大柄のその男が僕を睨む。思わず僕は冷や汗を流し、苦笑いをする。彼も笑みを浮かべるとそれも束の間、無表情へと戻る。

これはやばい。僕は一体なんなのかさえわからず殺されるのではないか。死を覚悟して目を瞑る。正確にはそんな覚悟は毛頭ないのだが。

しかし、痛みは感じなかった。目を開くともう一人の細身の長髪の男が彼の腕を持ち、睨みをきかせている。それから長髪の男は男の耳元で何かをボソボソと言うと男はカーテンを閉め、部屋から出ていく。

「すまなかった。彼は客人の歓迎の仕方というのを知らなくてね」流暢な日本語だった。銀髪のその美しい髪と整った顔立ち、到底日本人には見えないその顔から発せられる綺麗な日本語。奇妙な光景だった。

「さて、君が瀬田 大輔くんか？」

彼は僕の隣、ベッドの脇にある椅子に腰掛ける。僕は彼の問いに対して無言でうなずいて答えた。

「——結構。まあ、楽にしてくれ。私は君の敵ではない」

「じゃあ、一体何なんですか？僕はプロキオンに乗って戦っていたはずなのに……」

「そうか、あのロボットはプロキオンというのか」

しまったと思って口を抑える。しかしもう遅い。

「別に慌てることはない。君の身柄も、プロキオンも大事に、そしてこの世界の為に使わせてもらう。——DE-Sもな」

『DE-S』そのワードを聞いて僕の体は勝手に動いた。ピクリ、と。

「我々は第二の東京^{セカンド・シティ}の発生を止める為に集まったNGO団体、ズヴエズダ。君の力を貸して欲しい」

あれから三日が経った。私、長門流希はVMFLの司令室へ呼び出されている。私の隣にはアイツの幼なじみだという少女、『雀野愛菜』がいる。彼女がずっと動かなかったシリウスを動かしたということと呼び出されたらしい。

信じがたい。そうとしか言い様がない。私は横目で彼女の顔を見た。邪気の無い顔。到底戦う者には見えないその幼さの残った顔。そうか、私は彼女の大切な人を守ってやれなかったのか。

MIA (Missing in action)、つまりは戦死だという判断にはなっていない。しかし、この状況では生きている確率の方が低いだろう。

あの時私が見た爆発、それによってプロキオンも、敵も、そしてアイツも――

止そう、これ以上は私を苦しめるだけだ。現実逃避と言われても構わない。今の私は逃げ出したかった。

けれども現実はその簡単に逃がしてくれなかった。私と彼女のいる司令室へ軍服をまとった男が入ってくる。アイツの父親にしてこの司令官。

「君が雀野愛菜ちゃんか。いつも大輔が世話になってる」

彼の第一声はそれだった。そう言っ上つ面の会話の後、二人は握手をかわすと司令は自分の席へと座り込む。

「さて、君たちもわかっている通り。私の息子……瀬田大輔が行方不明となった。そして君たちはそれぞれに重要な因子を持っている。長門少尉、VMFLの一員としてではなく大輔を知る者として聞いて欲しい。そして雀野愛菜さん。大輔の幼なじみとして、そして文民の一人と自覚して聞いて欲しい」

そう言っ司令は重い頭を抱えながら言う。

「我々はこれより軍部の命令なしで独断でプロキオン、並びにそのパイロットの救出作戦を試みる。協力してもらえるか？」

驚いた。私たちV M F LはM F Lに対する軍事機関ではある。しかしその本体は相模原で実際は防衛省管轄の特殊行政法人といったほうがいい。そんなM F Lが軍部の命令を無視し、独断専行で作戦を実行する。当たり前かもしれないが司令は己と引き換えに息子を助けだすつもりなんだと。

しかしどうやってアイツを助けると言うのだ。アイツがどこに言ったのかは検討すらついていない。プロキオンのI F Fを探しても見つからない。この状況で彼はどのように言うのか。

すると、司令室へとつながる自動ドアが開いた。そこからは黒いスーツを着た男が一人。こんな兵士、V M F Lにいただろうか？私がつく考えると男は不意に胸ポケットに手を入れ、何かをとりだす。黒い長方形の物。それは手帳だ。彼はそれをおもむろに開く。桜の代紋の描かれたそれを司令へと突きつけると彼は言う。

「警視庁特務課の佐渡です。話は聞かせてもらいました。この事件、私達も協力させてもらいます」

そう言った彼を見て司令は「そういうことか……」と俯いたままつぶやくと「何か知っているのか？」と問う。

「ええ、おそらくこの事件、我々が追っている国際テロ組織ズヴェズダの可能性が高いと見ます」

国際テロ組織とはまた随分と……私は少し達観した目で見ていた。それは現実逃避によるものなんだろうと思う。すると私の隣の少女、雀野愛菜がその小さな体から小さな声を振り絞る。

「あの……私は大ちゃんを助けだすこと……手伝えるんですか？」

彼女がそう言うとき警視庁の特務課を名乗った佐渡とか言う男は「ああ、もちろんです」と答える。

そうして視線は自然と私へ向けられる。

仕方ない。助けてやろう。上っ面の理由はそうなんだろう。本当は心配している自分がいる。でも、素直になれない自分が強くって私は「いいわ、給料分はね」と言った。

ズヴェズダ。そう名乗った彼は足組をして僕の隣に座っている。

「その、あなた達は何なんですか？ズヴェズダって、あなたは何者何ですか？」

「何者……ねえ。私はウラジミール・ロマノフ、正義の味方——とでも言うておこうか」

「その正義に味方が何の用でこんなところに日本人をとらえてるんですか？」

「それは無論、君がDE・Sを起動した者だからだ」

大方予想はついていた。というかそれ以外に僕を捕まえる理由なんて無いだろう。この人はさっき、DE・Sを世界の為に使うと言った。世界の為ってなんだ？MFLを倒すことか？

「君は知っているか？VMFLの本当の目的を？」

「本当の目的？」

オウム返しの如く、僕は聞き返す。

「そうだ、彼らはDE・S、並びに相模原の遺産を独占している。

それは国家の中だけとは限らず、アメリカに対してもだ。おかしいと思わないか？あれほど世界中に世話になった日本がどうしてこれほどの技術を持っていながらそれを独占することができるか、とね。」

「それは……それがMFLに対抗できる手段であって——」

「それと同時に、敵国に対する脅威でもある」

ロマノフは僕が言うのを遮るようにつぶやく。確かにそうだ、そうだけ……。青臭い幻想というやつか、と僕は落胆した。世界はそれほど簡単じゃない。

「だから我々考えた。VMFLには裏があるんじゃないかと、アメリカという強国をも黙らせるものを持っているんじゃないか、と。その結果に導き出される答えは余計な考えをしなくても君にだって

わかるだろう？」

「……17年前の何か、と言いたいんですか？」

僕がボソツとそういうとロマノフは笑顔で「ああ、その通りだ」と言って首を縦に振る。

「プロキオン、シリウス。何かもう一つ欠けているとは思わんか？何かを促すように。僕を穴へと引きこむようなその話術。

「オリオン座……ベテルギウス……」

こいぬ座のプロキオン。おいぬ座のシリウス。そしてオリオン座のベテルギウス。冬の大三角形を織りなす3つの星。その星の名を持つロボット。では、ベテルギウスとはなんだ？まだプロキオンのような兵器があるというのか？

そう考え更ける途端、視界がブラックアウトした。コンセントを抜かれたテレビのように一気に消える視界。ロマノフが僕を呼ぶ声が聞こえたが僕の体は凍ったように動かなかった。その代わりというのが暗転した視界に何かがうつすら見えた。それは現実なのか幻想なのかはわからない。しかし見えたのだ。禍々しく紅く光る戦士の姿、《オリオン》が。

「で、そのズヴェズダってのは一体なんなの？」

私、長門流希は警察を名乗る男、佐渡に聞いた。すると佐渡は額に皺を寄せて神秘的な面持ちになる。

「それが、よくわかっていないんだ。目的、構成員、そのた全て。全くもって謎。わかっているのは17年前、彼らは東京探査班に協力していたということ。それがどのようなカタチであつたかはわからないけどね」

「じゃあ、つまりは何もわかってないってことじゃない。それでどうやって捕まえるつもりだったの？」

腕組みをして、壁に寄りかかる。私よりも遙に背の高い佐渡を見下すように、皮肉るように私は言った。

「いえ、私達もどうにもお手上げでして。それで瀬田司令がご決断する機会を狙っていたわけです。相模原遺伝子研究所を母体としたVMFLなら何らかの情報を持っているのではないかと、」

「悪いがそのような有益な情報は持ち合わせていないな」

司令が割り込んでそう言った。もしわかっていたらこう言い風に私たちを呼び出すこともないだろう。私には上官として命令を下せば良い話だ。まあ、彼女は違っただろうが。

横目で件の彼女、雀野愛菜を見た。あたふたとしたその表情。同い年なのに私とは違った生き方をしてきた。私とは違った責任を持っているんだと思った。

「じゃあ、どうやってアイツ——瀬田特務兵を救助するのですか？」私は寄りかかった背中を起こし、髪を手ですいた後そう聞いた。だって普通に考えてみる。相手が何者なのか、相手は一体何が目的なのか。全てが分からないというのである。

私の中ではそもそも『ズヴェズダ』という組織の存在と、この佐渡とかいう男の信頼がなくなりつつあった。いや、おそらく最初からそんなものはなく、敵意という先入観で私はそれを見ていたのだろう。それはきつと今の司令に対する態度にも言えることだ。

「それは……」

佐渡は口をすぼめるとその皺の寄った顔を下に向けた。情けない、大人が高校生に言いくるめられるなど。

「では、私たちはこの地球上の至る所を探し尽くせというのですか？」

皮肉たつぷりに私は見下すように言った。まるで自分に酔ってでもいるかのよう。

「長門少尉」

司令が私を止めに入る。でも私はやめなかった。

「手がかりは名前だけ。日本の警察は何をやってるんですか？」

「長門さん……その……」

隣で見ていた雀野も止めに入る。それでも私はだんまりを決め込む佐渡に対して詰め寄る。アイツが消えたというのに、プロキオンが消えたというのに手がかりが無いだって？信じられない、そんなこと。信じられるはずがない。

「長門少尉！」

途端、司令が声を荒らげた。その声で私はようやく我に帰る。感情に身を任せていた醜い自分に、人にあたっていた自分に気づくいたとんだ阿呆だ、私は。感情に任せた行動は己を殺す。ずっと前に小宮山少佐が言っていた。それなのにそれを破ってしまった。アイツはそれほどの存在なのか？

「少尉、雀野さん。二人には大輔が失踪したロシア西部の森林地帯を搜索してもらう。いいか」

「……サー、イエッサー」

つぶやくように返事をする。すると司令が「声が小さいぞ少尉」というので私は怒りも悲しみも全て感情を込めて返事をしてやった。

目が覚めると僕は違うベッドにいた。無論、そこがどこかなんて分からない。まえに目を覚ました時と全く同じ。自覚ある既視感が頭の中でひしめく。

「どうだ、楽になったか？」

誰かが声をかけた。僕はその声に驚いて思わず体をピクンと跳ねさせる。

「そう驚くな、私はお前の味方だ」

長い銀髪の二十歳ぐらいの男。先ほど僕が起きているときに『ウラジミール・ロマノフ』と名乗った彼がそこに居た。

「ここ、どこなんですか？」

僕は俯き、横目で彼を見ながら言う。

「だからそういう敵意の眼差しで私を見るな。それでは己の視界が狭まるだけだ」

「そんなこと聞いてません、僕の味方ならここがどこなのかぐらい教えたらどうですか？」

僕がそう言うのとロマノフは頭を掻いた。長い銀髪がさらりと舞う。

「ここは……そうだな——」

ロマノフは僕の後ろを見やる。まるでそれは言い訳でも考える人の典型的パターン。その昔、嘘をつく時、人間はうつむくとか聞いたけど今のロマノフはまさにそれだった。彼への不信任は更に高まる。

「いまは、上海……かな？」

「は？」

僕は思わずその突飛でもない回答に口をあけ、呆然としてしまった。何を言ってるんだこいつは？ 呆れた僕はタオルケットを持って振替える。

しかし、その途端、僕にはひとつの風景が見えた。窓だ。そしてそれが映す街並みだ。

発達した都市。高層ビルを見下ろすような風景。太陽に照らされたビルのガラスが光を反射している。

「あの……ここって本当に……」

「ああ、上海だ。どうだ、これで味方と認めてくれるか？」

「待ってくださいよ！ じゃあここはこれは何なんですか！？」

ドンドン、と僕は床を足で叩いて見せる。

「何でもない、ただの輸送機だ」

ロマノフは涼し気な顔でそう言った。

「……じゃあ、これから何をする気なんですか？」

「何って、日本に向かうに決まってるだろ」

「えっ？」

またも僕は呆気にとられ、口を開けてロマノフを見た。

それからしてロマノフは立ち上がり、その長身を惜しげもなく披露

する。

「君の父上——瀬田大佐の下へ行く」

彼はそう言い放ち、はにかんだ。

「それでそうするんです？ 一体何をする気なんです？」

「簡単だ。聞きに行く、全てを」

全てを。全てとはなんだ？ 17年前の『何か』、オリオン。あらゆるものが交錯する。

「君は神話でオリオンがどのように描かれているか知っているか？」
急な問いに対し、僕は首を横に振って答える。

「結構。ギリシャではオリオンは海の神、ポセイドンの子供だ。強大な力を持つ彼はそれと同時に、乱暴者だった。だから殺された」
殺された。そのワードだけが僕の耳もとで話されたかのように強烈に響いた。

僕はそもそも神話だとかそういうものに興味はない。ましてや星座だとか宇宙に興味を持ったこともない。そんなこと初耳だった。

「殺されたって、誰にですか？」

「大地母神ガイア。正確には手を下したのはサソリだがな」

それは聞いたことがあった。確か中学の林間学校の時、理科の先生がそう言っていたのを思い出す。

あの時の美しい夜空が脳裏に蘇った。それに比べて今の情景はどうだろう。コンクリートジャングル、もやのかかった都市群。美しいとは言えない。言えたとしてもその方向性は真逆であろう。

「また、神話ではおいぬ座とこいぬ座はオリオンの猟犬とも言われている」

「それがなんだって言うんです？」

僕はそっけなく、そう返す。するとロマノフは、「ロマンがないなあ」と言って首を傾げる。

「もし、オリオンと呼ばれるものが17年前の何かを引き起こした物だしたら君たちは太刀打ちできるか？ そういうことだ」

「そんなの、夢物語です。現実と神話は違う。僕らはMFLを倒す為に戦ってる。それだけです」

ロマノフが鼻で笑う。それはまるで全てを知っているかのように。

「そうでもないぞ？君は空想と神話を履き違えている」

僕は理解できなかった。空想と神話を履き違える。何を言っているんだ？

そもそも神話とは人間が産み出した偶像劇。今更彼は何を――

「現実には君を凌駕している……」

途端にロマノフは小さな声でつぶやく。すると何事も無かったかのようにドアの方へ歩いていく。

「日本についたら起こしに来る。それまで君は寝ている」

ボタン、と強く扉を締める。鉄製の重たい扉が風を起こし、ほこりを撒き散らす。

咳払い一つ、僕はタオルケットを掴んでベッドへと横たわった。

その日の夜、私はうまく寝付けなかった。

V M F Lの寄宿舎、多くの兵士達が居住するその片隅に女性専用の区画がある。その女性専用区画の108号室が私の部屋だった。

ルームメイトである整備班の伍長は、今は産休だとかでない。そもそもこのV M F Lで私は最年少の女性パイロットだ。私と気が合うやつってのはそうそういない。ここに来る若者の多くは攻専からきたエリートばかり。楽しいものではない。そういう意味でアイツは私にいい刺激となったのだろう。

布団を頭までかぶる。支給品のスウェットにヘアバンドでまとめた髪。その全体を覆うように。

明日からはまた学校がある。休もうかな？そう考えるも自分のなかのもう一人の長門流希がそれを止める。おかしい、つい最近までは

余裕でサボっていたというのに。

何が私をそうさせているのか？答えは明白だ。

「……」

でも、それを口に出せない。

「とんだ馬鹿ね」

いつもの口癖を小さくつぶやき、私はゆっくりとまぶたを閉じた。

翌日の朝、私は授業が始まる20分ぐらい前に教室についていた。他の生徒といえば部活に出ていて朝から汗をかいているのだろう。窓から見た校庭は忙しく動く生徒が見えた。野球にサッカー、テニスなど……。正直部活になんて見向きもしなかった私は、この学校にどんな部活があるかなんて知らない。

窓際の自分の席に座って教科書を取り出す。攻専ではとくに習ったようなことばかりの授業。退屈だ。それでもアイツがいたときはそれほど退屈じゃなかった。

そもそも私の中でのアイツの存在は何なんだ？戦友、級友。でも、それだけじゃ足りない気がする。言葉には表せない何か。いや、それを現す言葉を知らないだけで、きっとあるのだろう。

私の隣の席、行方不明のアイツの席には花が手向けられているなんてことはない。まだ戦死判定は受けてないからだ。きっとVMFLと政府から何も言わないよう命令されているのだろう。

カバンの中から私は音楽プレイヤーをとり出した。イヤホンを耳につけて、お気に入りの曲を聴く。それでも私の心に空いた空洞が満たされることは無かった。

「えー、つまりこの公式で先程出したXを解いて……教科書のやり方は少々悪い例ですね」

教壇の上に立つ白衣の数学教師。私はそれを耳から耳へと通り過ぎさせていく。

シャーペンを持った右手で頬杖をついて窓の外を眺める。この窓は西側、即ちこの先には数日前に私たちが戦った地、ロシアが広がっている。

スピーカーからチャイムが鳴った。鐘ではなく電子音のチャイムが響いた後、「それじゃ、今日はここまで。しっかり復習してくるよ」に」と教師が言った。

「起立」

日直の生徒が言っ、て、椅子を引きずる音が響く。私はそれに紛れるようにしてゆっくり椅子から立ち上がる。

「礼、着席」

なんてことのない日常。私は席に着くとカバンから弁当を取り出す。もうお昼なのだ。

緑色のケースに入った弁当。いや、レーションと言ったほうがいいのだろうか。もともと私は料理が得意なわけではないし、訓練やMFLとの戦いで必然的にそのような物に使う余暇は消えてしまう。

休日にはもっぱら寝てしまっているからだ。

すると途端、女子生徒の一人が私に声をかけた。

「どうかした？」と私が問うと彼女は無言で教室の片隅を指さす。

その方向を見ると一人の少女が立っていた。茶色の長い髪を垂らし、小さなお弁当箱を手に持った少女。雀野愛菜。

私は教えてくれた生徒の「ありがとう」とはにかんで礼を言う。それを見た一部の男子生徒達がわめいているがそれは無視して彼女の下へ向かう。

「どうしたのかしら？」

「いや、ちょっとお話がしたくて。……お忙しかったですか？」

「いや、別に」と私は返す。すると彼女はニツコリと笑って「それじゃ、屋上に来ていただけますか？」と言った。

屋上に着くや否や、私は彼女に一つ質問した。「彼がいなくなったけど貴方はどう思ってるの?」と。

すると彼女は「大ちゃんのことですか?」と首をかしげたので私は「そうよ」と言っただけで弁当を広げた。

弁当と言っても軍の栄養供給用スティックだ。カロリーメイトのようなブロックだが、この中にはかなりの栄養素が入っている。これひとつで一日分の脂質、タンパク質、その他もろもろを摂取できるとかで私はこれをほんの少しだけかじった。

「私は心配してないです。約束したんです、大ちゃんは生きて帰ってくる。そしてまた一緒にカレーを食べるって」

その話を聞いて私は少しだけ笑ってしまった。すると彼女は「笑わないでください!」と頬をふくらませていった。

「そうね、それならアイツもかえってくるわよね」

私はそう言っただけでレシーション片手にフェンスへと近づいた。屋上は高いフェンスで囲われていて、そこから出られないようになっていた。まあ、当たり前前の光景だろう。

「あの……長門さんはどうなんですか?」

今度は彼女が問うた。私は「流希でいいわ」と言っただけで話を続ける。

「ただの仲間よ。戦う仲間、戦友ってやつね」

「戦友……ですか?」

彼女は確認を取るように聞いたので私は大きく首を縦に振った。

「これは、私に言うことじゃないんだけどね、私たちは貴方とアイツを巻き込んでしまった責任がある。それに私たちもプロキオンが無くっちゃ街を守るのに支障を来してしまう。だから、アイツは必ず見つけ出す。そして助ける」

決意。硬いその決意を彼女へ向かい、宣言した私は彼女をみた。すると彼女は「私も協力します。大ちゃんの帰る場所を守るのが私の努めですから」と言った。

帰る場所を守る。幼馴染みと戦友。私には私に与えられた任務があ

る。それを全うするだけ。

レーションをかじる。栄養摂取だけを考えられたそれは到底おいしいとは言えない。私は口直しにペットボトルのお茶を飲むと「今度、手料理をご馳走させてよね」と言った。

「解析はどうだ？」

V M F L 本部二号塔、ここは軍事施設ではなく研究施設だ。私、瀬田浩三はシリウスについてのレポートを受け取りに行っていた。

「正直芳しくありませんね」

白衣を着た研究員が言う。「そうか」と返し、私はテーブルの上の資料を手に取ると壁に背をもたれた。

「竊木顧問の集めたデータを元に解析してみました、わかったのは D E - S の起動条件。どうやら遺伝子配列を鍵にしているようです」

「というところ？」

私がそう問うと白衣の研究員は、小さく頷き、パソコンのキーボードを叩く。

「ある特定の遺伝子配列パターンを解析、それがプロキオン、またはシリウスと合致した時、D E - S は起動条件を満たすそうです。それでも今まで D E - S の起動が観測されたのは4回だけですからね、詳しい事を調べるにはまだサンプルが足りないとしたか……」

それを聞き、私は「ふう」と息を吐いた後、腰をあげる。彼の話聞きながら資料の内容を目で追っていたがやはりそれほど解析は進んでいないらしい。土壇場でシリウスが起動したのはまさに奇跡といえるだろう。

「それで、ロシアにいたあの薔薇に関する情報は？」

「ええ、ちょっと待ってください」

研究員は再びキーボードを操作する。カタカタと小気味良い音が小

さな研究室に木霊す。

「これですね」

カタン、とエンターキーを押し、一つのウィンドウが開かれる。私はその表示された画面を覗き込むように見た。

「竊木顧問のデータと衛星からの映像解析、^{アイマードレス}ADの記録を調べた結果ですが、これは東京の――すみません、第一級封鎖区画で謎の現象が発生した時と地場形成パターンが酷似してます。『何か』の原因に似ているというより『何か』の原因そのものに近いですね。現段階ではなんとも言えませんが長門少尉の^{アイマードレス}ADに付着したサンプルを元に急ピッチで解析中です」

左手で口元を抑えながら、私はその解析データを見る。17年前、私が実際に体験したあの地獄を創りだした張本人。これほど奇妙で美しい。妖艶な姿は私の殺意を掻き立てる。

「司令？」

「ああ、すまない。できるだけ、早く頼む。早急にな」

私はそう言っただけで研究室を後にする。真っ白な自動ドアが開き、グレイの廊下へと出る。すると途端、警報と共にアナウンスが流れた。

『VMFL軍部に所属する全員に通達、コードエラーを発令。直ちに持ち場についてください』

何かがあれば自動で流れるようにプリセットされた警報だった。私は誤作動と思いつつも本部へと向かう。そうして歩き出す途端、胸ポケットにしまった携帯電話が鳴る。急いでそれを取り、耳へと当てる。

「私だ」

そう言うや否や、電話の主、オペレーターが焦り気味に言った。

「司令、早く本部に戻ってください！ズヴェズダがコンタクトをとって来ました！」

その言葉を聞き、私は一瞬冷静さを失った。

昼食中、途端にマナーモードにしておいた私に携帯が震えた。制服のスカートのポケットからそれを取り出す。画面には『V M F L』と表示されていた。

「はい、長門です」

「長門少尉ですか？今すぐ本部に戻ってください、緊急事態です！通信司令部のオペレーターの声だった。私はなんで呼ばれているのか理解できなかった。警報が鳴っていない事から察するにM F Lが現れたということではないだろうし。一体何が起きたというのだ。私はそれを電話越しに問うた。

「はい、今回現れたのはM F Lではありません。ズヴェズダです」
「ズヴェズダ……」

驚いた。本当に居たのだ。だとしたらアイツもそこにいるというのか。

今まで信じていなかったことが現実となり、確信へと近づく。

私はふいに隣の彼女、雀野愛菜を見やった。彼女を巻き込むのはいささか気が引けるが彼女もそれを望んでいるのだろう。

「あの、今私シリウスの起動者といえるんだけど、連れてくるべきかしら？」

するとオペレーターは「出来ればぜひ」と答えた。

携帯を耳から離し、マイクを手で抑えると私は彼女を見た。

「どうする？アイツを見つける手がかりが見つかったわよ。一緒にくる？」

首をかしげ、顔色を変えずに私はそう問うと、彼女は深く頷いた。

第七話 第一級封鎖区画

司令室の巨大モニターに「SOUND ONLY」と表示された。ズヴェズダがコンタクトをとってきた、このタイミングでということは何か考えがあるほかない。

私が下方のオペレーターを見ると、その一人が深く頷く。そうして私はモニターへと目を移し、「私がVMFLの司令官、瀬田浩三だ。そちらはズヴェズダのリーダーと捉えて構わないか？」と、マイクに向かって言い放つ。

それからややあつてボイスチェンジャーが何かで音声が不安定になつている声が司令室に響いた。

「構いません、それではお話を始めましょうか」

流暢な日本語だった。それはもう相手はロシアの組織ではなく、日本の組織なのではないかと思うほどだ。

「今、我々はDE-S搭載の二足歩行型兵器、並びにそのパイロットを保護しています。そこで交渉と行きましょう」

「ああ、いいだろう」

私がそう言つと、司令室のドアが開く。警視庁の佐渡、ひよろつとした彼が入ってくる。そうして入ってくるなり彼は私の隣へと来た。「私たちの要求はただひとつです、我々ズヴェズダを第一級封鎖区画へ通すこと。それだけです」

「そうすればプロキオンとパイロットは返還していただけるかな？」

「いえ、彼とプロキオンは我々の作戦に重要な因子ファクターです。作戦が終わり次第、そちらに返還させて頂く次第です」

私は頭を掻き、頼杖を突く。そもそも何故連中はDE-Sの存在を知り、それを利用しようとしているのか。連中が東京探査班と関わりがあつたからか？では、なぜいまさらになつて――

すると途端、佐渡が私とマイクの間へと入りこむ。そうしてマイクを奪い取ると「お互いカードを見せるのがフェアな交渉だろう？我

々はいつだって諸君らを撃ち殺すことができる」と言った。

ズヴェズダは今、日本海上空にすることがわっている。しかし、向こうがプロキオンを持つている可能性がある限り迂闊に攻撃できないのがこちらの立場だ。私は佐渡に対して幾許かの苛立ちを抱きながらそれを眺めていた。

「いいでしょう、今から映像を送ります」

ボイスチェンジャーによって高くなった声が響き、メインモニターに表示された文字が消える。それから数秒後、白亜の機体が映し出された。それは紛れもない、プロキオンだった。

「どうです？これでフェアでしょう？」

生唾を飲み、唇を噛む。プロキオン——息子を守るのか、それとも自国の領土を守るのか。決断は迫られていた。

緊急の呼び出しを喰らい、私は焦っていた。お弁当を入れておいたカバンの中から大きな工具箱のようなものを運びだし、私はそれを蹴りつける。するとその箱の中から黒光りした者が溢れ出す。

「長門さん、こんな物騒な物……」

後ろで愛菜があわてふためいているが私はそれを気にせず、愛用のライフルを手にする。そうしてアンダーマウントレールに取り付けられたバヨネット（銃剣）でフェンスをむりやりに切り開いた。

「行くわよ、そのケース持って私に捕まって」

「行くつてどこに……」

ため息をつく。そして私は「もちろん、VMFLよ」と言うてはにかんだ。

そうして私は彼女からカバンを受け取るとそのまま引き千切られたフェンスへと走る。

「絶対ケースから手を放さないでよね！」

と、私。そして駆けていった私は大きくジャンプして屋上から飛び出す。愛菜の悲鳴が聞こえる。その間私はケースに取り付けられたスイッチを押す。

途端、真つ赤な工具箱のようなそのケースはカタチを変えた。ガシヤガシヤと音を立てて変形するそれはだんだんと私の体に纏わり付き、本当の姿を現す。

簡易型アーモードレス。フライングドレス 通称FDと呼ばれるそれはADの開発過程で生まれた試作品。それをみにつけた私は瞬時にコンソールの起動を確認する。

フライングドレス FDはADのように戦闘用では無いため、ヘッドマウントディスプレイなどといった装備は施されていない。ただ、頭を守るためのヘルメットが私の顔を包む。

目視で彼女を確認する。

「クソッ、ちゃんと捕まってるって言ったのに！」

誰に言ったわけでもないその愚痴を吐き捨て、バーニアを上空へと向ける。急降下したFDは一直線、彼女の下へと向かう。

蹴り飛ばすようにしてバーニアの噴出方向を切り替える。そうして彼女の落下コース上へと入った私はホバリングしたまま彼女をキャッチする。

「さあ、あとはひとつ飛びね」

私は一瞬彼女を抱き抱えたことを忘れ、アフターバーナーを使おうとしたが、体が瞬時にそれを中止する。

「ちよつと、これって普通に電車待った方が良かったんじゃない——」

「A区画への列車は少ないの！」

そう言っただけは仄かなバーニア光を瞬かせながら巨大なビルの立ち並ぶ方、A区画、VMFLへと飛翔した。

あれからどれくらい眠っていたのだろうか。中国から日本なのだから

らそれほど長時間は寝ていないとはわかる。

あのあと、ロマノフは僕を輸送機の中を連れ回した。輸送機の中は結構な広さで、長く細い廊下を通じてから僕は比較的大きめの部屋に入れられた。

そこで待っていたのは、紛れもなく《プロキオン》だった。その白亜の機体には例の薔薇との戦いでついた泥やすが付いている。そしてもう一つ気になったのはライフルに取り付けられた銃剣が変わっていたことである。

本来、ナイフのような短刀がついていたプロキオンのライフルには眺めの槍のような物が取り付けられている。

「あの、武装変わってますよね？」

僕は隣のロマノフへと尋ねる。

「ああ、バヨネットか。ロゼッタネビュラとの戦いで激しく損傷しててね。こっちで交換させてもらった。一体君はどんな戦い方をしたんだ？」

僕は黙っていた。ロゼッタネビュラと聞いて最初は何のことかわからなかったが、『ロゼッタ』とは薔薇とかの意味ではなかったかと思いだし、それがロシアで戦ったあの薔薇だと理解した。

僕は彼を警戒していた。DE-Sについて詳しく話すわけにはいかない。いや、そもそもDE-S自体僕にはしっかり把握できていなかった。

軍服のポケット、鎚木さんからもらった黒い石のようなものを確認する。これも絶対に渡してはいけない気がした。そうするとロマノフは僕を察したのか、「余り敵意の眼差しで見ないでくれるかな？」と言った。

僕は、はっとしてポケットから手を取り出す。

「君にはこれからプロキオンに乗ってもらう。それでそのまま父上の下へ戻りたまえ」

「えっ？」

言葉が出なかった。プロキオンを、DE-Sを利用すると言ってい

たというのになぜ急に、と。

ロマノフは笑っている。その笑顔に僕は何も答えられぬまま、じつとプロキオンを見つめていた。

「えーっ、東京ですか？」

格納庫で誰かが言った。それからして誰かが「シート、声が大きいぞ」と言う。

アイマードレス

A D 隊に第一級封鎖区画への出撃命令が下されたのだ。そのせいか隊員は皆ざわついていた。

東京差別。風評被害にも似たその差別行為は消えたわけでは無いのだ。

私はそんな事どうでもよかった。ピッチリとしたインナースーツを着て、専用機の前へと私は立つ。

アイツも今、東京に向かっているという。『ズヴェズダ』存在をも信じていなかったその組織からのコンタクトがあったのは今から一時間前もない。

彼らの目的は第一級封鎖区画へ行くこと。そしてそこでプロキオンを使い、彼らの目標を達成するという。

無論、その目標がなんなのかは分からないし、それを見過ごすわけにも行かない。

私たち V M F L は M F L からみんなを守る義務がある。そして、それを守るための武器、プロキオンを悪用させるわけにもいかない。今度こそアイツを守る。固く決意した私はタラップを一段昇り、壁へと背中を押し当てる。隣には真紅の装甲。ロボットアームがそれを動かし、私の体をカメラが認識して A D を取り付けていく。先ほどまで F D を使っていた私にはそれがとても重く思えた。

上からヘッドギアが降りてくる。自動で装着されたそれはメインシステムが起動して各部パーツとのエネルギーリンクを開始する。

「長門少尉、第一級封鎖区画は未だに調査が進まれています。万が一に備えて通信は常時開いておいてください」

起動が完了した途端、オペレーターがそういった。私は「わかってるわ」と答え、ヘッドマウントディスプレイの位置を調整する。

集音マイクで拾われた様々な音が骨伝導タイプのイヤホンを通じ、私の耳へと響いてくる。

床がゆつくりと移動し始める。ベルトコンベアの如く移動するそれと同じく、私は移動し、カタパルトデッキへと向かう。

そうして、カタパルトは私の足をがっちりと掴む。

「こちらクリムゾン01、エンジン良好。各部補助スラスター起動を確認。」

背中から噴煙を巻きあげて火が上がる。それを鉄板が抑える。

「各部マニピュレーター、リンク確認」

「了解、発進を許可します。ご武運を」

オペレーターが言う。

「……クリムゾン01、出撃するわ」

体中に重みがのしかかる。カタパルトが電撃のような火花がはじけ飛び、それが私を押し出していく。

「大輔君、まもなく射出するぞ！」

無線越し、ロマノフの声が響いた。球体型のオールビューモニターに表示される無線ウィンドウが彼の声を拾い、そしてスピーカーへと流す。

「いいか、これから君は長野へ迎え。我々は君に後続する」

「はい」と僕は答える。そうして自然肩へと力が入る。

パージ、と白人のロシア系の男が叫び、プロキオンに備え付けられたカタパルトが火花を立てて外れる。

モニターに映し出された灰が一瞬にして空と海の青へと変わる。途

端、空中に投げ出されたプロキオンの脇を何かが通りすぎていった。自衛軍のF・35、IFFにしっかりと認知されたそれはプロキオンが射出されたのを確認し、飛び去っていく。

フットペダルを押し込む。姿勢制御バーニアを吹かしてバランスを取ろうとする。しかし、その時僕はプロキオンに何か異変を感じた。バーニアが吹き出す音、けたたましいブースト音が聞こえない。そうして僕が戸惑っているといつの間にかオールビュースモニターは文字で埋め尽くされていた。

そう、『DE・S』という文字に。

「ちよつと、どうなってるんだよ!？」

僕は装着したインカムのマイクに向かって叫ぶ。それから僕はもう一つの異変に気づく。

おかしい、いつもは振り払われるかのように消えていく『DE・S』の文字が点滅し始めている。まるでそれは電波の悪いラジオのよう。不規則に点滅する赤い文字が僕の不安を更に助長する。

「それでいいんだ」

ロモノフが言った。

「それでいい、そのまま第一級封鎖区画へ向かえ」

「待て、今なんて——」

僕が言いかけると、プロキオンは勝手に加速を始める。決して僕はペダルを踏んでもいなければ、レバーを引いてもいない。触ってすらない。

「どうなってるんだよ!？父さんのところへ行くんじゃないのかよ!？」

迫り来るGという重圧に耐え、僕は叫ぶ。体が締め付けられるように痛い。

「こうでもしなければ君はプロキオンに乗らなかつただろう?我々の目的は第一級封鎖区画——いや、東京にある」

あまりのGに顔を打ち付ける。こんな速度出したことがない。DE・Sを起動したプロキオンはコレほどの性能を秘めているというの

か？

悲鳴を上げる体に耳を傾ける暇もなく、僕は必死に重力に抗う。でも、それは無謀なことなんだと数秒後にわかる。体は再度、シートへと打ち付けられる。

「さあ、ガイアよ。お前の力を見せてみる」

ロマノフが言う。その時、僕には一瞬だけ見えた。

飛翔するプロキオンの後方、巨大な、それでいて美しい流線的な姿の輸送艦。先ほどまで僕が乗っていた物が。

「こちらクリムゾン01、まもなく第一級封鎖区画に入るわ」

私はマイクに向かってそう告げるとディスプレイに映し出される光景を凝視した。廃墟が乱立するそれは東京から数十kmというここからでもわかる。

高層ビル群はツタによって縛り付けられ、地面はボロボロに剥がれ落ちたガラスや、コンクリートといったものが散らばっている。

「こちらVMFL、了解しました。そのまま回線を開き、直進してください」

「了解、クリムゾン隊、このまま直進します」

私はそう告げると、すうつと息を吸い、気持ちを落ち着かせる。

「隊長、本当に行くんですか？」

隊員の一人が尋ねた。

「任務を放棄するつもりはないわ。それに、プロキオンが奪取された責任は私達にある」

「それだけじゃないんじゃないですかい？」

クリムゾン05、部隊の中でも古参の彼がそう言う。

「どういうこと？」と、私。

「いや、作戦中に女の話をするとか撃墜されるって話は聞いたことがあります、逆はどうなんだろうと思ひましてね」

私はため息を着く。

「そんなこと、今はどうでもいいわ。今は目の前の任務に集中する。いいわね？」

そう、私が尋ねた途端。イヤホンから警報が響いた。ヘッドマウン
トディスプレイに『ALER T』と表示される。まるで件のジンク
スが本当だとも言つかのように。

「クソッ、ブレアを使って。全員第一級封鎖区画で会いましょう」
足を振り上げる。バーニアは上空を向いて私は下降、そしてそのま
ま一回転。背中からブレアをまき散らして私は例の熱源を回避する。
ミサイルだった。煙が目の前を通り過ぎ、爆散する。

「ブレイク！」

私がそう叫ぶと各機、各々の方向へと飛翔した。そして私は方位も
確認しないままアフターバーナーを使う。

足から放たれる閃光が眩い弧を描き、真紅のADは飛翔した。
アイマードレス

オールビューモニターに表示される風景は次々と変わっていった。
時間が遅く感じるとはこういうことを言うのだろうか？僕は時間と
いう感覚がなくなりつつあった。

それはどうしてかというたとてつもない速度で飛翔している。並び
に僕のコントロール下ではないプロキオンに乗っているという事。
体感速度が増すたびに僕には時間が引き伸ばされるように感じられ、
不安がさらにそれを長く感じさせる。

感覚が麻痺しているのだ。今、コントロール、即ちプロキオンに指
令を与える脳である僕はいくらバーヤ、ペダル。電子信号に例え
ておこつ。それを送った所でプロキオンは動く気配を見せない。

いや、正確には動いている。正しく言えば”僕の思った通りに動か
ない”だろう。

とにかく、僕にとってその現象は気味の悪いものの他ならなかった。

「どうして……どうして動かないんだ……」

焦って出た言葉。レバーを仕切りに動かすガチャガチャという音にそれはかき消される。

途端、風景に何かが見えた。日本列島。方角から察するに新潟県ではないだろうか？しかし、そんな風に考える束の間、圧倒的な速度で飛翔するプロキオンは国土の上空へと入る。

もう、後戻りは出来ない。ロマノフが言っていた通りプロキオンは第一級封鎖区画、即ち東京へと向かうのだろう。

17年前、何かが起きた土地。混沌が始まった土地。そこへと行くこととしているのだ。

急に胸がしめつけられるような痛みがした。本当に縄が何かで、いや、鉄線で体を引き千切るようなその痛み。

その痛みに悶える中、モニターにウィンドウが開いた。通信ウィンドウには「GAEA」と名前が表示される。

GAEA……ガイア？一体誰だ？悶え苦しみ、胸を抑えつつ僕は考える。

「さて、覚悟は決めたか？」

聞き覚えのある声。いや、この声はきつと忘れないだろう。

「ロマノフ……東京で何をするきだ……ッ！」

「何をするか？言ったはずだ、我々は世界の為に使う。その力はV.M.F.L.のような組織が持つていていいような代物ではない！」

いつも穏やかだったロマノフが途端に語気を強めて言った。

「だから、世界のために何をするかって……そう聞いているんだよッ！」

対する僕も痛みには耐えながら必死に応える。もはや操縦桿は握っていない。勝手に動くレバーが勝手にプロキオンを東京へと導く。その勝手に動くレバーを掴み、僕はなんとか姿勢を正す。

「決まってる、『何か』の根底を絶つ。東京探査班はすでに見つけていたんだよ、全ての元凶を。オリオンをな！」

ミサイルは放たれた。それでも熱源はどこか全くわからなかった。ただひとつわかるとすればそれはこのゴースタウンと化した第一級封鎖区画にあるということ。これほど薄気味悪い場所が日本の首都だったとはにわかには信じ難い。

私は年齢通り何かが起きた17年前に長野で生まれた。だから私に首都であった頃の東京の記憶はない。あるとすればテレビや本、授業などで教えられた知識だけ。実物を見たのはこれが始めてだった。「パイロットに警告。放射線濃度、通常値を超えました。」

「わかってんのよ、それぐらい」

そうばやいて私は周りを見渡した。脚部バーニアを下へ向け、ゆっくりと下降する。ビル影に着陸するとライフルの確認をした。残弾や弾詰まり（ジャム）、ARサイトの起動確認など。

それをひと通り終えてから、私は影から外を覗きみた。敵と思われるようなものは見当たらない。遠くにクリムゾン04のIFF（敵味方識別装置）がAR（拡張現実）で見えただけだった。

ライフルの撃鉄を起こす。薬莢がチャンバーから一つ、キーンと甲高い音をさせて落ちる。

「こちらクリムゾン01、VMFL、聞こえる？」

「申し訳……ノイズ……っいて……状況を………さい。」

ひどいノイズだ。一応ノイズのクリアを試してみるがさほど効果はない。やはり、この東京と言う場所がよほど異質なのだろう。空を仰ぎ見て、そう思いふける。

「……アレって」

光が見えた。赤い光りだ。IFF（敵味方識別装置）が表示されない事から察するにおそらくADではない。^{アイマドレ}では、アレはなんだ？

「可変倍率スコープ、あの光にピントを合わせて」

私がそういうや否やコンピュータはその声を聞き分け、さながら戦闘機のHUDのような高度、角度が表示されていた画面が切り替わる。スコープ、というより望遠モード。

勝手にコンピュータがズームを開始する。その光りへ、どんどんと近づき、ゆっくりとピントが合わさっていく。

「嘘、もう来た……」

思わず言葉を発した。そう、それは紛れもなくプロキオン（こいぬ座）だった。

「クリムゾン01よりクリムゾン各機へ、プロキオンを発見した。座標を送る」

私がそう告げるとウェアラブルコンピュータが座標を解析を開始する。マップウィンドウが自動に表示され、上空のプロキオンを赤い点で現す。同時にその情報が各ADに届いたはずである。
アイマドレス

しかし、応答が一切ない。通信障害が発生している、先ほどの司令部との通信から察するにそうとしか思えない。そしてこの東京の中でさえ障害が発生しているということは原因はここにあるという事。

だとしたら、独断で行くしかないじゃいか。私は唇を噛んだ。いつも軽く振り回している対MFライフルが酷く重たく感じる。

「プロキオンのトレースを継続。予想ポイント割り出し」

私はそう言つと脚部の補助バーニアを噴かす。ホバーのように僅かに足が宙に浮かんだ後、メインスラスタが火を噴き、空へと上がる。

未だに空にはプロキオンが巻き起こした飛行機雲が見えた。もともとプロキオンはADのように空中戦を想定して作られていない。だから今、プロキオンが背中につけているExternal Flight systemは、まんま飛行機を背中にくっつけたようなものだ。子供が見るロボットアニメのようなかわいものではない。

ジェットエンジンから放たれた水蒸気、それとコンピュータがトレースしたものを頼りにしてプロキオンを追う。一刻も早くアイツを助けださなければならぬ。それが、雀野愛菜と約束したこと。そ

して、アイツに返すべき借り。

飛行機雲に混じって煌く物が見えた。私はそれを前にも見たことがあった。それはアイツが始めてプロキオンに乗った時、そしてアイツがロシアで消える直前。

間違いない、プロキオンはDE-Sを起動している。通りでADごときじゃ追いつかないのだと落胆する。

「——待て、何あれ」

その煌きよりも異質な物が目に飛び込んだ。それも私は前に見たことがあった。

鮮血のような鮮やかな赤。

美しく、それでいて妖しい妖艶な赤。

赤、赤、赤——

倒壊しているビル群の中、そこだけ神聖な物に見える。

赤ので埋め尽くされた絨毯のようなものは血溜まりのようにも見える。

そして、その真ん中に鎮座する巨体。ツタにまみれているが私にはそれが上空からでもはっきりと分かった。それは、巨大は戦士。

コンピュータが勝手に計測を始める。そしてコンピュータは僅かな間に計測を終了し、その結果を現す。全長はプロキオンを軽く超す

30m——

私は恐怖を覚えた。その巨体の周りにある”赤”はどこからどう見ても私がロシアで戦った『薔薇』なのだ。

背筋が凍る。アレほどの敵が敷き詰められるように存在している。

これが東京、第一級封鎖区画。消え去った首都の姿。

第八話 東京で散る花

私は流希さんにV M F Lに連れてこられた後、大ちゃんのお父さんに案内され、とある部屋へと呼び出された。

その部屋には私には何がなんだかさっぱり分からない機械がひしめいていて、様々な色のランプを光らせていた。

「それでは良いですか、雀野愛菜さん？」

白衣を着た人が私に問う。その隣には軍服を着た大ちゃんのお父さんが立っている。

「あの……私は何をすれば？」

「そこにあるベッドに寝転んでいただければ結構です。別に痛くも何ともないので怖がらないんでくださいね」

微笑みながら白衣の人はそういう。私はそれでも幾許かの不安を抱えながら寝台へと近づく。ベッドというよりも病院にある検査用のものに近い。いや、近いというよりもまさにそれだ。

寝台の上は硬かった。円柱のようなものが寝台を覆い尽くす。枕のようなものもあったがそれも結構な硬さだった。

ゆっくり、円柱が私を包んでいく。機械音だけが室内に響く。窓ガラスに隔てられ、無効側にいる白衣の人と、大ちゃんのお父さんが何を言っているかはもう聞こえない。

眠りへと落ちる。眠ろうとしているのではなく、まるでそこで眠るのが必然かのように眠りへ落ちる。つまり、意識のない眠り。

そう考える間にも、私は眠りへ落ちる。ゆっくり、ゆっくりと――

「で、どうなんだ？」

私は研究員へと尋ねた。彼女を検査すればD E - Sの起動条件についてもっと詳しく分かると彼が言ったからだ、

「現段階でわかっているのは遺伝子の配列パターンが司令のご子息と同じで特異ということですね。でも、きっと彼女の場合後天的なものなんだと思うんです」

「と、いうと？」

私は尋ねる。彼はその問いかけに対して頷くとキーボードを操作しだして言う。

「彼女の場合、遺伝情報に普通の遺伝子の配列パターンの染色体があるんです。いや、正確には残っているというべきでしょう。その染色体から察するに彼女は後天的に遺伝子の配列を変えられた。司令のご子息はそのような痕跡は見当たりませんでした。おそらく生まれた時からあのパターンなのだ」と

「では、どうやってそのように改変されたというのだ。遺伝子の配列なんてそう簡単に変わるものじゃないだろう？」

「いや、そうでもないんです。東京探査班、相模原の遺産の一つにこういうものがあるんです」

カタン、とエンターキーを叩く音が響く。PCの画面は瞬時に変わり、ひとつの文書ファイルを呼び出す。

《ダークエネルギーによる遺伝子配列の改変に関するレポート》

「なんだ……なんだこのレポートは……こんな物私は知らないぞ！」

「ええ、実は自分もつい二、三日前に見つけたもので。内容もさっぱりなんです」

ダークエネルギー。なんだその妙なエネルギーは……

そのレポートの内容は余りにぶっ飛んでいた。レポートとかそういった次元を超えている。

そこに紡ぎだされている言葉のそもそもが理解出来ない。

「このダークエネルギーというのは宇宙空間に存在する道のエネルギーです。真空エネルギーが有力と言われてますが、この論文ではそうではない、人間の遺伝子を再構築、改変する力を持つエネルギー

「だと書かれています」

「……そんなものがあるというのか」

「正確にはわかりません。ただ、わかっているのは……」

「このエネルギーはウィルスのようなものと考えられています。そしてその感染経路は――」

ゴクリ、と生唾を飲む。嫌な汗が頬を伝っていく。

「――体液感染型だと予測されるいまして、考えられるとすれば唾液、血液、精液……つまり司令のご子息は、そちらの雀野さんと……その、生殖行動を行うか何かを――」

それを聞き、私は肩を下ろした。その様子を見て、彼はポカンとした表情を浮かべる。

「別に私は、そこまで息子を過保護にするつもりはないし。そのお嬢さんは私の親友の娘だ。どんな関係であっても構わないさ」

そう言うのと彼は更にポカンとした表情を浮かべた。

私には一つ、疑問があった。それは何かというと『なぜプロキオンがIFFに反応しないか』だ。

プロキオンはもともとVMFLの機体だ。アイツの識別が返ってくるのが必然。だがしかし、プロキオンは何の反応もせずに東京の中心、即ち私の眼下に広がる禍々しい花畑へと降り立った。

血のような赤の絨毯。それに囲まれる巨人。東京に行くという時点である程度の覚悟はできていたつもりだった。けれどもこれほどに大きな物を目にすると思わず足が竦んでしまう。

「瀬田特技兵！ねえ、アンタ！聞こえてんでしょ！？」

無線に怒鳴りつける。でも、応答はない。ノイズだけが返り、私の耳をつんざく。

「隊………キオン………DE-Sを………」

クリムゾン04が言った。

「わかってる、今のプロキオンにADじゃ太刀打ちはできない……」
唇を噛み締める。強くかみすぎたかじんわりと鉄の味が口の中へと
広がる。

ロシアで私を苦しめた薔薇。それが無数に広がり、それに覆われる
ように佇む巨人。そしてプロキオン。

プロキオンはDE-Sによる発光現象がすでに始まっていた。しか
し、それはいつもと違うことが見て取れる。

光が”黄金”であった筈のDE-Sは、”真紅”の光を放っている
のだ。それはアノ薔薇とよく似た色で、その色がまた私に恐怖をフ
ラッシュバックさせる。

あの赤い光はなんだ？ 謎だけが私を埋め尽くす。

「おい、瀬田特技兵！ 早く応答しろ！」

ゆっくり降下しながら私は言う。ライフルを足で挟むようにして抑
えつけ、狙いは薔薇の中心へ。

それでも応答は無い。部隊の仲間からの連絡もない。通信障害がひ
どいのだ。上からは回線を常時開いておけと言われたが、ノイズが
酷くて切りたくなってくる。

イライラしていた。その思いの丈を半ば八つ当たりのように私は言
葉に込める。

「瀬田、それに乗ってるのは瀬田なんでしょう！？ ねえ、応答しな
さいよ！ 大輔！！」

飛翔するプロキオンの中、僕はじっと痛みに耐えていた。
頭がガンガンする。

激しい頭痛に耐えながら、降り注ぐGにも耐える。
体中が痛く、気持ち悪い。

「なんで……こんなことに……！」

途端、ロマノフの輸送艦に乗っていた時と同じような現象が起きかける。視界が暗闇になりかけたのだ。

ブラックアウトしそうなその視界を、なんとかしようと無理矢理にまぶたを開ける。眠いとかそういうのとは違う、気絶に近い。とは言ってもあんまり気絶したことはないのでよくわからないが。

オールビューモニターに映し出される景色を何とか見ようとする。頭を押さえる手をレバーへと戻し、姿勢を正そうとする。

しかし、立眩みのような気持ち悪さと頭痛は止むことはない。

途端、視界に何かがとびこんだ。

真っ赤な花。薔薇だ。しかもただの薔薇ではない、巨大な薔薇が絨毯のように立ち並び、その中に飛び込むようにプロキオンは着陸する。着陸の衝撃が更に頭痛の激しさを助長させる。

「この薔薇って……」

間違いない、ロシアで戦った敵。17年前の『何か』起こした物。

恐怖が一気に高まり、前進に悪寒が走る。

なんとかしてここを抜けださなければならぬ。その一心で言うことに聞かない体を無理矢理に動かす。

レバーを引く音が微かに響く。それでもプロキオンは動かない。

「おい……なんで動かないんだよ……プロキオン……」

絶望、という言葉がお似合いだろう。間違いない。

「瀬田、それに乗ってるのは瀬田なんでしょう！？ねえ、応答しなさいよ！大輔！！」

途端、ノイズ混じりの無線が聞こえた。

「流希の声……なんでアイツがここに！？」

視界に飛び込んだのは薔薇と同じ色のADアーマドレス

ドクン、と胸が弾けそうになった。彼女の声が聞こえた途端、妙な安心感を感じたのだ。

しかし、その安心感はすぐに消え失せる。

「また……か」

視界が暗くなっていく。なんとか持ち直そうとするも今回はどうに

もいきそうがない。

「流……希……」

モニターの前面へ手を伸ばす。届きそうで届かない。彼女の2つに縛った美しい髪がここからでもくつきりと見える。それでも、届かない。

そうだ、そろそろ眠りへ落ちるようだ。ごめん、流希。

僕は胸の中でそういうと、目の前が真っ暗になった。

着陸したプロキオンは、薔薇の園を押しつぶすようだった。私は、それをただ見ているしか無かった。いくら呼びかけても、アイツは反応しない。どうすればいいというのだ？

私はもう嫌になって、無線を切ることにした。

「クリムゾン01よりV M F Lへ、悪いけど一時回線を切るわ。オ―バー」

それは、一種の決意でもあった。

私がこうして話している間にも薔薇の園は、きっと私を狙っている。いつ私は撃ち落とされてもおかしくない。

それでも、それでも何とかしてアイツを助けなくちゃならない。言葉に形容し難い何かが、私を突き動かすのだ。

「応援は……望めないわよね」

自分を嘲笑うように私は言う。

「でも、やるしかない！」

バーニアに火が灯る。緊急降下に対し、A Dは何度も”トリムアップ”と警告を発してくるが、私はそれを無視する。

足の操作がイマイチうまくいかない。恐怖が私を無意識下に蝕んでいるのだ。

しかし、わたしは、それでも――と言い続ける。

近づいていく白亜の巨体。真っ赤な薔薇に囲まれたそれは、一際目

立っている。私はその機体に、取り付き、首元へと向かう。

「瀬田！早くハッチを開けなさい！」

応答は無い。無理矢理に開けるしか無いのか――

そう思った矢先だった。幸いなことに動いていなかったプロキオンと薔薇。それに油断したのだろうか。

途端、背中から熱気がこみ上げた。

プロキオンの白い装甲にその様子が、赤い閃光が反射している。

まずい、と思った。いや、思う暇などあったのだろうか。

私は、光に包まれた。

「――生きてる……？」

微かに、感覚があった。真っ暗な視界は、ゆっくりと戻っていく。そうして回復する視界の中、真っ先に映ったのは、プロキオンだった。

「瀬田……？守ってくれたの？」

無論、回答は無い。

でも、相変わらず様子がおかしい。アイツなら通信が出来ないにしても何か言ってくる筈だ。コックピットから降りてきてでも言うだろう。いや、それは期待のしすぎだろうか。

私はアイツに何を求めているんだ？たまにそれがわからなくなる。

途端、爆発音にも似た破裂音がした。そうして私は横を見ると、そこには巨大な弾痕と地鳴りを起こして落ちた薬莢があった。プロキオンの持つアサルトライフルからは微かに煙が立っている。

「瀬田？アンタ何して――」

言いかけて、再びプロキオンは発砲した。

今度三発、私の体すれすれを通った。

硝煙が立ち込めて、ガンパウダーの匂いが鼻腔を突く。

「ちょっとアンタ！フレンドリー・ファイアよ！？」

それでもやはり応答はない。アイツはどうしたというのだ？
嫌な予感がした私は、脚部メインバーニアを着火させて、飛び上がる。

薔薇の園はすでに発射態勢を整え始めている。八方塞がりとはこの事か、と私は苦笑いした。

そうして私は空中で宙返りをして、プロキオンの頭上を飛び越える。しかし、私の後方には巨大な草まみれのロボットがひざまづいている。幸いなのは、その巨人が動いていないことだろう。

「瀬田、なにしてんの！？早く状況を教えて！」

いくら問いかけても無駄だった。

プロキオンは私に銃を向けたまま直進する。

「やめて……お願いよ……」

潰れかけた喉から必死に声をだそうとする。それでも声は小さく、震えていた。

怖いのだ、隔絶された『東京』という場所。そして何より『仲間』に『大切な人』に裏切られたかのようなこの感覚。

プロキオンはブーストを始める。青白い光がプロキオンを包み込み、そうして銃剣を突き立てる。

「そっか。私、こいつの事が好きだったんだ」

そうして今度こそ、私の視界は光に包まれ、そして真っ暗になった。

第九話 僕の決意

熱い。

眩しい。

体がジリジリと焼かれるような感覚がする。

僕は目を開けてそれが何かを確認しようとした。しかしながら、重く垂れ下がった僕のまぶたは、僕の意思に反して開かない。

ただただ、熱だけを感じる。

それから少しして聴覚が戻ってきた。微かに音が聞こえる。

悲鳴だ。泣き叫ぶ声が聞こえる。

それを聞いて一気に背筋が凍った。先程から感じる熱気を吹き飛ばすような寒気が。

なにが起きているのだろうか。

僕は、逃げるべきなのだろうか。

足を動かそうとする。でも、動かない。いや、動かし方がわからない。

体って、どうやって動かしたんだっけ？

当たり前のことが分からない。

それからして、視覚が戻ってきた。まぶたが軽くなってきたのだ。ゆっくり、目を開ける。

ピントが合わない。世界がぼやけて見える。でも、うつすらとだが何かが見えた。

それは、赤と橙、そして黒を混ぜたような色。その色からは恐怖しか感じない。

そうしてピントをあわせていくと、途端に目の前に閃光が走った。

真っ赤な閃光が視界を奪ったや否や、あたりが真っ暗になる。

一体何が起きてるんだ？

助けを請おうと声を出す。でも、出ない。出し方がわからないのだ。喉が痛かった。足が痛かった。腕が痛かった。胸が痛かった。頭が

痛かった――

全身が熱い。溶けそうだ。

溶けていく、体が地面へと。

溶けていく。

溶けていく――

再び目を覚ます。

今度は不思議と自然に視界が戻り、体の動かし方も分かった。いや、この方が自然なのだろうが。

目の前は廃墟だった。

コンクリートが崩れ落ち、ガラス片が散乱し、死体が転がる。

僕は吐き気を必死に堪えて立ち上がる。

ここはどこだ？

僕は、ロマノフに騙された。

プロキオンのコントロールを失い。激しい頭痛に見舞われた。プロキオンのコントロールが効かなくなったのはおそらくロマノフのせいだろう。

彼は、僕の――プロキオンを第一級封鎖区画へつれていくといった。コントロールを失ったのはその為なのだろう。

じゃあ、ここはどこなんだ？

また、ロマノフが何かをしたのか？

いや、それは無いだろう。僕はさっきまでプロキオンに乗っていた。そうして、気を失って――

待て、気を失っている内に全てが終わってしまったのではないだろうか？

だとしたらここは東京――第一級封鎖区画か？

途端、体中に電撃が走った。その刺激によって僕の体は小さく跳ねる。

何かが、僕を呼んでいる。

何がだ？

いや、それは行けばわかるはずだ。

僕は、不確かな直感に従って歩き始める。誰かが呼んでるなんて気のせいだ。

それでも僕の頭の中で、不確かな判断材料が”それは違う”と抗議した。

一歩進む度、瓦礫が崩れていく。コンクリート片が坂を転がり、ガラスに衝突する。割れた音が遠くから微かに響く。

永遠に灰色の空間が続く。

所々に外壁が崩れただけのビル、鉄骨だけの建物がある。それで視界は遮られるが少なくとも僕の視える範囲では永遠に瓦礫が埋め尽くしていた。

人はいない。皆死んでしまっている。

何が起こったのだろうか？まさか17年前と同じ事が起きたというのだろうか？

すると途端、僕の視界に異質なものが入り込んだ。

大きい。それでいて緻密。

巨大な人、ロボットがひざまづいていた。

見覚えがあるような気がしたが思い出せない。こいつはなんだ？

巨大なロボット。おそらく30m以上はある。

「何だよ……何が起きてるんだよ……」

声が震える。

プロキオンは？

父さんは？

流希は？

愛菜は？

皆、どこに行ったんだろうか。

不安だけが僕を支配した。

その途端、僕の一気に炎が覆った。再び熱気が僕を包む。それと同時に、巨人が光り輝き始める。僕はまさかとは思ったが、本当にそのまさかだった。

動き出したのだ。

全身灰色の無機質な巨人はゆっくりとその体を起こすと、手のひらを広げる。

何がなんだかわからない。でも、危険だったのはわかってる。

「……えっ？」

足が動かない。

まただ。動かし方がわからない。

火の海に吞まれていく。

巨人の手が近づいてくる。

「やめろ……やめろ……」

きつと涙目になっているのだろっ。

恐怖が一気に沸き上がって、絶望が立ちふさがって。

やめてくれ。

殺さないでくれ。

お願いだ。

生きていたいんだ。

「やめろおおおおおおおおおおおおお！！！！」

叫んだ途端、視界が真っ白になった。

そうして、クラクラする頭を抑えていると、ぼやけてはいるも風景が見えた。

そうか、僕はまた気絶していたんだ。

納得した僕は、己のコンディションを元に戻すことを最優先とした。でも、それはすぐに打ち切られた。

戻り行く視界の中で見えた一つのもの。

プロキオンの銃剣の先。地面に横たわる赤い”何か”。

僕は初め、それはロシアにいた薔薇なのだと思った。でも、よく見れば違う。

ぼやけた視界を何とかしようと目をこする。そうしていく内にわかったのだ。

それは、”薔薇”ではなく”人”だと。一気に背筋が凍った。この赤は何の赤だ？機体の赤か？だとしたらこれは――

「嘘……だろ？」

流希だと言うのか。流希が死んだのか。これはA Dのカラーリングの赤だよな？決して出血なんかじゃ……

無理矢理に言い聞かせても、現実には抗えなかった。

視界が明瞭になった途端、彼女の体。真っ赤に染まった体が見えた。「えっ……おい、流希！嘘だろ！？嘘だと言ってくれよ！！」

彼女からの応答は無い。

僕はシートに力なく倒れる。すると途端、モニターにウィンドウが開いた。

「ほう、そうか。彼女が邪魔をしたのか。通りでオリオンが動かないわけだ」

ウラジミール・ロマノフ。

僕を騙した男。彼は小さく笑みを浮かべながらそういった。

「おい、お前……お前がこんなことをしたのか？」
僕は問う。

「ふむ、正確には私ではない。”我々が持つシステムが”だな」

「そんなのどうだっていい！」

モニターを殴りつける。一瞬、映像が乱れた。

「お前がやったんだな。ウラジミール・ロマノフ」

「……そうだ、我々が持つA E波介入式遠隔操作ウイルス。通称、^{ガイア}G A E A、彼女が君の乗ったプロキオンの制御系統を奪い、それをやった。つまり君はD E - Sを動かすだけの存在だったわけだ」

ロマノフは、顔色を一切変えずに言う。

僕は決意した。流希の仇を討つと。僕を何度も助けてくれた彼女、誰よりも真剣に生きていた彼女、自分の弱さを必死で隠そうとしていた本当は、か弱い彼女。そんな彼女の命を奪ったアイツを《必ず殺す》と。

「ウラジミール・ロマノフ……お前は——お前だけは絶対に許さない！」

第十話 彼女の決意

「クリムゾン01……信号、ロスト……」

オペレーターが小さくそう告げた。その結果は私にも見えている。スクリーンに投影されたレーダーから消えるクリムゾン01のIFF。それが全てを物語っていた。

「他のAD隊員との連絡は？」

「つながりません。電波障害が強すぎます。衛星画像で補足するのがやっとです」

舌打ちをする。

どうすればいいのだ。このまま連中は何をするつもりだ。

AD隊を東京に行かせた私の判断ミスだ。そうして部下を殺してしまったのだ。

首に下げたドックタグをつかんだ。これでまた、覚えなければならぬ名前が増えてしまうのか――

「あの……」

途端、少女の声が司令部に響いた。機械音と命令だけが飛び交う。ここではめずらしいことで、皆が一斉に声の方へ振り向く。

そこにいたのは、大輔の幼なじみ、雀野愛菜だった。

「あの……私に何かできないかなと思って……」

彼女は、恥ずかしそうに手をもじもじとさせながら言う。

しかし、これは好都合ではないだろうか。シリウスは超高機動型兵器であつたはず。だとしたら今、彼女は援軍としては最適ではないのだろうか？ 私は賭けてみたくなった。

「ここから第一級封鎖区画まで、シリウスはどれぐらいでいける？」と、私は問う。

すると、すぐさまオペレーターの一人が「最短でおよそ10分です」と言う。

「……駄目だ、もっと早くならないか。直線距離ではどれぐらいだ

？」

「およそ5分」

先程とは違うオペレーターが言う。

「分かった、国交省に通達。新長野市含め、第一級封鎖区画までのルートに緊急時特別避難警報を発令。今すぐ市民を退去させる。」それを聞いて、司令部が一瞬どよめきに包まれる。

「聞こえなかったか。これは命令だ」

私が念を押すようにそういうと「サーイエッサー」という応答が聞こえ、キーボードを叩く音、通信を行う音が聞こえ始める。

「いいか、3分以内でどうにかしろ。いいな？」

もう一度私は念を押す。

「あの……」

すると再び雀野愛菜が声を上げる。

「私は、シリウスで大ちゃんを助けに行けばいいんですね？」

彼女がそう問うたので、私は力強く「その通りだ」と答えた。

シリウスの中は、前と変わらなかった。雰囲気や匂い。あの時と同じ。誰かが語りかけてくるような、そんな感じがした。

私は大ちゃんのお父さんから渡された特殊な服を着て、コックピットへと入った。

渡された服は随分とキツイものだった。どうやら血液が逆流するのを抑える為だという。それを聞けば大抵の人は、こんなロボットに乗るのはいやになるだろう。でも、私は不思議とそう思わなかった。途端、シリウスのモニターに映像が映った。

かくかくとした一昔前のようなCG映像が映し出される。それがだんだんと明瞭になっていき、鮮明な映像へと変わった。

「雀野さん、貴方はまだ民間人です。いいんですね？」

耳に取り付けたインカムから女性の声が聞こえた。私は、それに對し、何の躊躇いもなく、「大丈夫です」と応える。

「了解しました。第八格納庫より、第三ゲージへ、シリウス移送開始」

彼女がそういった途端、くぐもった声で同じ事を復唱していくのが聞こえる。

そうか、私は軍隊で、しかも戦いに巻き込まれてるんだな。と、改めて実感する。

こんな光景、映画でしか見たことがなかった。

巨大なエレベーターを登っていく様が、モニター越しに映し出される。まるで映画のワンシーン。

そうしてエレベーターが上がっていると、轟音が鳴り響いた。ブレーキが作動したのだ。私は思わずその音に驚き、体を跳ねる。

「操縦を雀野愛菜さんへ」

インカムからそう聴こえるやいなや、目の前から光が差し込む。

「ゲート開放。以降は、ガイドビーコンに従って進んでください。ご武運を」

ガチャツ、と音がして、通信ウィンドウが閉じる。

胸が高鳴る。心臓がはちきれそうなのだ。

こう言ったら不謹慎なのかもしれない。でも、私にとっては自分がしたいこと、やるべきことを見つけられて嬉しかった。

「大ちゃんも、流希さんも。私が助けるから……」

唇にキスの感触が蘇る。

約束のキス。

私は絶対に助け出してみせる。

「シリウス、出撃します！」

汗ばんだ手で、レバーを押し倒す。

強烈なGが私の上にのしかかり、それと同時に、シリウスが駆けた。

ビルが沈んでいく。道がひらけていくのだ。

巨大なビル群がシリウスを避けるように沈み、その上をハードルを飛ぶかのごとくシリウスは、駆けていく。

私に掛かる圧力は無慈悲にも強くなっている。その証拠に速度計が現すシリウスの速さは、ますます上がっていった。

「VMFLよりシリウスへ、間もなく新長野市内を出ます。ガイドビーコンにしっかり従ってくださいね」

耳から聴こえるその声には私はなんとか相槌を打つと、ペダルを更に深く踏み込んだ。

モニターに三角形が現れる。ガイドビーコンとは、このことだろう。と、私は納得すると、自転車のハンドルの如く、レバーを切った。

機体が揺れる。ただでさえ四脚で歩きたびにガタンガタンと強い衝撃が伝わるのだ。方向転換などすれば体が振り回される。遊園地のコーヒークップを勢い良く回した時のような感じた。

歯を食いしばると、不思議と手に力が入って振動する操縦桿を抑えつける。

風景は瞬く間に変わっていく。先ほどの巨大都市は消え、のどかな田園風景へと変わる。

そうか、私はもうここまで来たのか。

すこしばかりの安堵と、不安。

シリウスが踏み潰していくものを見る度に、私は胸が痛くなった。

でも、構っていられないんだ。

私は、申し訳ないと思いつつもペダルに足を掛ける。

振り返ってはいけない。

そこにあるものの全てを、今私は背負っているのだから。

大ちゃんがどんな心境で戦っていたのか。少しでも分かったような気がした。

私だって最初は、ロボットに乗って戦いに行くなんて大反対だった。

それは軍人さんのやることで、私達には関係の無いものだった。でも、あの日を境に変わってしまった。力を持ってしまったなら、それを正しい道に使わなくちゃならない。

そして今、東京でそれを悪い道へと導こうとしている人達がいる。そうして流希さんは――

いや、彼女は、きっと生きている。確証は、無い。でも、そう思えた。

その刹那、目線の前で、何かが発光した。赤い光だ。

「あの、さっき何かが光りました！」

私はインカムのマイクに向けて言う。

「こちらでも観測済みです。おそらくプロキオンの放つDE・Sの光だと思われます。直ちに急行してください、第一級封鎖区画は近いです」

あそこに、大ちゃんがいる。

伝えなくちゃ。

私がこうしている理由。

私がどんな思い出ここに来て、何をしにきたのかを。

決意は固かった。

僕は、ウラジミール・ロマノフを殺したい。その気持ちでいっぱいだった。でも、それ以上に今の僕は非力だった。プロキオンが使えなければ僕はただの高校生だ。それ以上でもそれ以下でもない。

眼の前に広がる廃墟は、余りにも乾いていた。そこに佇む巨人は、シダやツタが生い茂っていて、その原型は確認できない。

不意に、プロキオンの持つライフルが輝き始めた。いや、正確には、

アンダーマウントレールに取り付けられた剣だった。

確かこの剣は、出撃前にロマノフが交換していた。もとはプロキオンに装備されている近接武器はバヨネット、即ちナイフだ。

しかしながらいま取り付けられている剣は、ナイフのような短刀ではない。細く、長く、切っ先が伸びている。所謂レイピアだ。そのレイピアが、発光し始めたのだ。

鋭い切っ先は、勝手に巨人へと向けられる。

嫌な予感がした。とてつもなく嫌な感じが。

途端、無線ウィンドウが開き、ロマノフが声を上げる。

「さて、君は最高の瞬間を目にすることとなるな」

嘲笑するかの如く、彼は言う。

「何が言いたい。お前は、こいつが17年前の元凶で、そしてこいつをどうするんだ」

「いいだろう、所詮君はもう捨て駒だ。そろそろ教えてもいいかな」

息を呑む。その音がコックピットに響く。

「DE-Sは、一体どんな効果を引き起こすか知っているか？」

僕は首を横に振る。

「よろしい。DE-Sは、相模原が17年前、ここでオリオンを発見し、そのサンプルを元に培養したものが始まりだった。今まで確認されたことのない構造のそれに、当時の研究者は驚いた。それと同時に、危険なものだと判断し、封じ込めた。それは、DE-Sが人の肉体に侵入し、身体構造を急速に変化させるからだ。さらに言えば厄介なことに、DE-Sは、ヒト型のものにしか反応しなかった。だから相模原は、封じ込めたんだ。それが――」

「プロキオン、シリウス」

「そうだ。だからこそ私は、DE-Sを失い、活動を休止したオリオンに、再び命を吹き込む。プロキオンを使ってな」

「それで、オリオンを使ってなにをするんです？」

「決まってる。破壊だよ。宇宙の創世も、地球の創世も、人類の創

世も。全て破壊から始まる。私は世界を再構築する。その力を、お前たちVMFLに渡しておくわけにはいかん！」

ロマノフが、そう叫んだ刹那、プロキオンのレバーが勢い良く前へと倒れた。僕は動かしていない。勝手に倒れたのだ。

そうしてそれに連動するかの如く、レイピアを突き立てる。

ブスリ、と君の悪い音がした。僕はそれに思わず目をつむってしまった。

仰け反った顔を前へ戻し、目を開く。

まぶたを開ける前から、明かりを感じる。何かが光っているのだ。

そう、オリオンが復活した。プロキオンのDE-Sを受け取り、オリオンは復活したのだ。

その直後、レーダーがけたたましく鳴り響く。次から次へと何が起きているんだ、と僕は熱源方向である後ろを振り向く。

上空には巨大な飛行機。それは見覚えがあった。ロマノフが乗っていた輸送艦。そしてもう一つ、砂埃を上げて地上を疾走するものが見えた。

それは、犬のような形をしている。大地を掛けるおおいぬ。

「大ちゃん！聴こえる！？」

不意に聞こえた声。聞き覚えのあるその声は、とても心地よく、なつかしく感じられる。

「愛菜……愛菜なのか？」

「よかった……今、助けるから！」

「待ってくれ、それに乗ってるのは愛菜なのか？」

僕は、そう問うた。アレは確かシリウス。動かないという風に聞いた。それなのになぜ。

「……愛菜、来ちゃ駄目だ！」

とっさに出た言葉。愛菜はそれに動揺する。

その刹那、巨大な輸送艦がプロキオンの上空を掠めていく。

まずい状況だ。ロマノフは、きつとオリオンに乗るつもりなのだ。

そうすれば愛菜に危害を加えてしまう。そんなの、出来るわけない。

僕の脳裏には、血みどろになった流希の姿がフラッシュバックした。やめてくれ。

もうこれ以上、誰かが死ぬのは嫌なんだ。

誰も、僕を傷つけないでくれ。

しかしながら現実には、無慈悲に襲い掛かる。

小さな影が、上空から落ちてくるのが見えた。パラシュートを開く様子は見られない。

ウラジミール・ロマノフ、彼が落ちてくる。

そうして落ちていく彼の下には、やはりオリオンがいた。

オリオンの放つ光は、彼をふんわりと包みこむと、そのまま飲み込んでいく。

「ああ、最高だ！私は……俺は今までこの為に戦ってきた。ようやく願いが叶う時だ。ベテルギウス！」

光が増して行く。周りを囲っていた草木はそれに吹き飛ばされていく。

再び、僕の脳裏に何かが浮かんだ。それは、とても君が悪い物。この記憶は一体何だ？

眼の前にいるオリオンと、頭に現れる巨人。

「僕は……こいつを一度見ている……」

吐き気がする。とても気持ちが悪い。それがより一層、愛菜をここから遠ざけたいという気持ちへと変換される。

「愛菜、今すぐ帰るんだ！お前は、ここにいないべきじゃない！」

「それは、大ちゃんも一緒だよ！」

愛菜が叫ぶ。シリウスは、もう眼と鼻の先だった。

「僕には、責任がある。こうなったのが僕の責任だ。僕は、ここにいないくちやならない」

「だったら、私だってそうよ！私がどういう覚悟でここまで来たかわかってるの！？」

シリウスが、僕の隣を掠めていく。

「私がどんな気持ちでこれに乗ってるかわかるの？私が……私がど

んな覚悟でキスしたのか分からない癖に！！」

叫んだと同時に、シリウスがオリオンに衝突した。

「早く、大ちゃんにはやるのが他にあるはず。流希さんは、きっと生きてる。男なら誰かの為に何かを試みるんでしょ？」

それを聞き、僕は、深くうなづいた。

第十一話 彼女との決意

司令部のモニターに通信が入った。それは第一級封鎖区画からのものではない。この新長野市からのものだ。

私は、オペレーターに「開け」とだけ言うと、座席に取り付けられたマイクに顔を向ける。

その直後、巨大なスクリーンに白髪混じりの男の顔がでかでか映し出された。

「瀬田司令、これはどういうことかね？」

男がそう言うと同時に、スクリーンに多数のウィンドウが乱立し、画像が表示される。映されているのは街を疾走するシリウス、そして第一級封鎖区画の中心で光を放つプロキオンだった。

「と、いいますと？」

言ってることがよくわかりません。とでも言うかのごとく、私は首を傾げて答える。

「どうしたもこうしたもない、政府がいつ君たちに第一級封鎖区画への侵入を許した？それに、ズヴェズダとかいうテロリストも通したらいいではないか。更に言えば、何だこの光景は？」

シリウスの映しだされたウィンドウが拡大される。

「首都である長野、そして君が管轄していない筈の埼玉まで警報をむりやりに発令させたというではないか。しかも、MFLは、出現していないときている。これはどう説明をつけるんだ、瀬田司令？」

私は黙って唇を噛む。前々からこの男は嫌いだった。

防衛大臣 篠山辰己。何かと彼とは反発し合った覚えがある。

V M F L 設立反対派リーダーも彼だったと聞いている。自衛軍からエリートを選出し、MFLとの戦いの為に作られた組織。しかもその母体は、政府機関ではなく、民間の研究施設ときている。反発するのは彼だけではなかった。

「我々は、国防の為に最善を尽くしたまでです」

「テロリストを我が国の領土に入れたというのにか？」

「ええ、それが最善の手立てだ。私はそう判断しました」

冷静にそう言うと、反して彼は血管を切らしながら「この売国奴が」と、小声でつぶやいた。これだからこの手にナシヨナリストは嫌いだ。

「それに、我がV M F Lの部隊が既に救援に向かっています。鎮圧するのは時間の問題です」

「救援？先ほどの犬のようなものが救援というのか？たかが知れている」

「そう思つたのでしたらどうぞ。でもこれだけは言っておきましょう」

私は、ゆっくりと右手を前に出し、マイクをつかむ。

「我々は、必ず勝利します。状況終了後、今回のスキャンダルの記事会見でお会いしましょう」

モニターには、シリウスとオリオンが揉み合っている姿が映し出されている。

僕は、胸が痛いけれど、それ以上に愛菜の思いを無駄にするのが心底嫌だと思った。彼女があれほどに大声を出して、感情を剥き出しにしたことなどそうそう無いからだ。

座席から降りて、コックピットハッチへと向かう。ロマノフが持つ《G A E A》とやらの影響で、ハッチは手動でしか開かないからだ。凹面となっているハッチ。その側面に設けられた巨大なレバーを握る。これが非常用の脱出レバーだからだ。

思い切り引っ張るが、それはビクともしない。万が一でも間違つて起動しないように出来ているからだ。

それにしても重い。僕は、顔に血を昇らせながらそれを引く。今、この時にも愛菜は、戦ってる。僕がなんとかしなくちゃならない。

「うおおおおおおおっ！！」

叫び、そして無理矢理に引つ張る。その刹那、金属製の重たいレバーは、ゴンツと鈍い音を立てて下がる。僕は、反動で尻餅をついてしまった。

何にしてもこれでハッチは開いた。急に冷たい風が入り込む。

金属と金属。シリウスとベルギウス。愛菜とロマノフ。二人が戦う音が耳を通じ、頭へとガンガン響いてくる。

行かなくちゃ。僕は、心のなかでつぶやくとタラップに足を掛ける。そうか、昇降用の小型エレベーターは無いんだ。

僕は、少し戸惑った後、コックピットから飛び降りた。

足が地面に着くやいなや、僕は体勢を崩し、体を地べたにぶつける。頬が痛い。すりむいたのだ。風が頬を撫でる度に傷口を刺激して、痛覚の信号を脳へと送る。

着地の時の痛みもあった。足がじんわりと痛む。

「それでも——」

僕は言い続ける。

「男なら、誰かの為に何かをしてみせろ！」

震える足を叩き起こし、振り上げる。足から発生した痛みは全身へと広がる。

「それでも——」

僕は、まだ言い続ける。

僕は、走り続ける。

愛菜との約束を守るため。大切な仲間を助けるため。

瓦礫の先、真っ赤なADが見えた。その途端、僕の脳裏に再び蘇るあの時の光景。血みどろになった流希の姿。

あんなの嘘だ。

自分に言い聞かせる。

感情の高ぶりが、僕を突き動かしていく。

何かをやらなければ始まらない。

弱いままの、プロキオンがなければ非力な僕じゃ何も変わらない。歯を食いしばる。そして走る。一心不乱に。

途端、瓦礫に足を躓いてこけてしまう。

それでも――

僕は、立ち上がる。

「流希イイイイイイいいいいいい！！！」

彼女の名前を叫ぶ。その最中、何か温かいものを感じた。

ポケットが輝き出す。僕はそれを横目で見ながら走り続ける。

『大輔君、そのまま進め』

不意に、脳に響くような声が聞こえた。その声は、つい最近聞いたばかりなのにとても懐かしい。

「鎚木さん？」

走りながら尋ねる。無論、鎚木さんは、ロシアで死んでしまった。この声の正体は幻聴か何かだろう。

『今の君なら、長門少尉を助けられる。君の力なら――』

理解が及ばない。それでも僕は、分かった。と心の中で呟く。

流希は目の前だった。

転びそうになりながらも足を止める。息が上がっている。

「流希……」

彼女の体は、ぐったりとしている。やっぱり無理じゃないか……

僕は、流希の亡骸の前で泣き崩れる。

「嘘だろ……こんな嘘なんだろう？」

そうだ、こんな現実狂ってる。

《それでも――》

なんでこんな事になってしまったんだ。

《僕は何度でも言い続ける》

流希が死ぬ必要性なんてなかったんだ。

《彼女は、救えるんだと》

「クソおおおおっ！！！」

流希を抱きしめる。

彼女の体は酷く冷たかった。

涙があふれる。

「鎚木さん、やっぱり無理だよ……」

大粒の涙をこぼして、僕は泣きじやくりながら言う。

『そうでもない』

再び、鎚木さんの声が聴こえる。そういえば先ほどの温かみは何だったんだ？僕は、ポケットを見やる。

発光している。眩い金色の光。それはとても暖かい。

ポケットに手を入れる。程よい暖かさが手を包む。その暖かさの正体、それは鎚木さんからもらった石のようなものだった。それが、金色に光り輝いている。

『できることをやれ。自分のできる何かを』
自分のできる何か。

それは、彼女を助けること。

でも、どうやって？

僕は、流希を抱き寄せる。

「なあ、どうすれば生き返ってくれるんだよ？なあ？」

問いかけても、答えは返ってこない。当たり前なのに凄く不自然に思える。

「なあ、教えてくれよ……」

僕は噉り泣く。彼女の冷たい顔に、僕の顔を埋める。2つに縛った黒い髪からは、仄かにシャンプーの匂いがする。

涙が彼女の頬を伝っていく。僕は、さらに彼女に近づく。その途端、唇を柔らかな感触が襲った。冷たく、しつとりとしたその感じ。僕は、いつの間にか流希と唇を合わせていたのだ。

その刹那、合わさった唇を何かが照らした。温かい光、石から放たれる光が点滅を始める。それに気づいた僕は思わず唇を離す。

すると、どうだろうか。流希のADが石と同調して輝き始める。

不安がゆつくりと薄れ、期待が増して行く。本当に、本当に流希を助けられるのではないか？実に現実味の無いことだが、僕には不思議と確信が持てた。

そうして光が点滅するスピードがだんだんと早くなる。ADの光も

早くなっっていく。

そして、僕の視界が光に奪われるほどの輝きがその2つを中心にして放たれた。

僕は、未だに流希を抱きしめていた。強く、強く。

そうしていると、何かがもぞもぞと動いているような気がした。

まさか？と思ったが、瞬時にそれを否定する。

「うう……」

また幻聴か？と、思った。が、そう思った矢先、僕の体を何かが跳ね飛ばした。

そのまま僕はコンクリート片に体を打ちつける。

「なっ、なにやってんのアンタ！？ほんっとーに飛んだ阿呆ね！！」

「え？」

言葉が詰まった。

それよりも現実が現実として受け入れられなかった。

「何よ？文句あんの？」

流希がその小さな体を起こしながら言う。

「いや、その……てつきり死んだものかと」

「勝手に殺すな！三途の川から帰ってきたわよ」

流希がそう言うと言僕を見て、微笑む。

「どうやら、DE・Sの力が私を起こしてくれたみたいね」

ライフルを持ちなおして、彼女は言う。

「そうなんでしょう？ウラジミール・ロマノフ？」

そう尋ねると、ロマノフが乗るベテルギウスから声が聴こえた。

「ああ、まさか鎬木とか言う奴がそいつを隠し持ってたとはな。君たちは本当に楽しませてくれる。なあッ？」

ベテルギウスの巨大な拳がシリウスを吹き飛ばす。僕はいてもたっ

てもいらなくなってきた。

「……流希、僕は、プロキオンの下へ戻るよ」

「少尉をつけなさい。——早く彼女を助けてあげて。男なら、誰かの為に何かをしてみせろ、でしょ？今度は彼女に何かをしてあげる番よ」

「そうだね……必ず生きて帰ってくる」

「ふっ、それは私のセリフ」

コッソ。拳を合わせ、僕らは向かうべき戦場へと走った。

第十二話 冬の大三角形

三つの星座が、今ここに揃った。

僕は、流希の護衛でなんとかプロキオンに乗り込むと、そのシートに体をうずめる。

「全く、君等は、本当に素晴らしいよ。瀬田大輔、君の持っているそれが何かわかってるか？」

ロマノフが問う。

「知らない。でも、お前に渡す気は無い」

「結構、ちょうどいい機会だ、君等も知っておく必要があるだろう」
オリオン——いや、ベテルギウスがその手に持った大剣を振る。瓦礫が吹き飛んで、ホコリが舞う。

「それは、オリオンの欠片だ。私は、17年前にここに来た。当時、ロシアで学会に出席していた相模原宗介と共に。あの時の事は未だに覚えているよ。まだ、駆け出しだった私が始めて出席した学会で、アレほど鮮烈なことが起きたんだ。その情報がロシアに届くや否や、相模原は、すぐに日本へと向かった。私は、それに無理を言っただけで同行させてもらったんだ。そして私は、ここに来た。地獄となつて間もなかった東京にな。そして私は、そこで君と出会ったんだよ。瀬田大輔」

「僕と……？」

「そうだ、君はちょうど17年前、何かがあつた時に東京で生まれた。違うか？」

僕は黙って首を縦に振る。その間にも僕は必死でプロキオンを動かす方法を模索した。GAEAの制御下にあるとはいえ、何か抜け道があるはずだ。

「そして私は、東京で君の母親、瀬田美雪と出会った。瓦礫の山

に埋もれていた彼女にな。あの女もお前みたいにしぶとく生き残ってたさ」

レバーを持つ手に自然と力が入る。僕は、母さんにあったことは無い。更に言えば写真も東京で何かが起きたことによつて一緒に消え失せた。だから僕は母さんの顔も知らない。それでも、親が貶されて何ともいえない怒りが湧き上がった。

「あの女は厄介なことに妊娠までしていた。その腹の中に居たのが君だ、瀬田大輔。そう考えれば私と君が戦うのは必然だったのかもしれんな」

「どういうことだ」

「DE-S 起動の鍵には、オリオンが放出した特殊なエネルギーが必要だった。しかし、ウィルスのように感染していくその鍵は、オリオンから放出されたと同時に、多くの人々を死に至らしめた。まあ、君の両親のように何とか生き残ったものもわずかながらいる。しかしながら、それは所詮逃げただけでしか無い。知っているか？君の父上はヘリの上から高みの見物だったのだぞ？——話がそれたな。

詰まり君は、唯一母体内でオリオンの放出するエネルギー波の影響を受けた。エネルギーと共存する形でな？それによつて共存に最適化された遺伝子配列は、オリオンのDE-S、即ちプロキオン、シリウスのDE-Sの鍵になってしまった。つまり君は、生まれた時からそういう宿命を背負っていたということだ」

「そんな……」

コックピットの中、僕はうなだれた。

僕は、生まれた時からそういう宿命だった？そんな馬鹿な。

僕は、いつだって自分で道を決めてきたつもりだ。たとえそれが偶然の産物であったとしても。

「さらに言えば、君の幼なじみ。そのシリウスのパイロットとは性交渉でもしたのか？DE-Sの鍵は、体液で感染する。とは言つてもその罹患率は実に低いものだがな。そこのお嬢ちゃんは実に不運なのだ。そしてそっちの威勢のいい子はオリオンの破片の影響を

受けたのだろう。あの発光現象、DE-Sの起動だ。おそらく君の使っている特殊スーツの装甲にはオリオンの破片が組み込まれている。それが彼の遺伝子配列と彼の持っていた破片に反応し、感染したのだろう。そうして彼女の体は仮初ではあるが急速な回復能力を得たというわけだ」

ロマノフはそこまで言うと、すうつと息を吸う。

「どうだ？全てを明かされた感想は？」

僕は、何も答えない。愛菜と流希も一切口を開かなかった。

「まあ、いい。どうせ君等はこの後死ぬのだからな」

オリオンの剣を天へと向ける。曇った空から僅かに挿し込む光を、刃が反射する。

「さあ、約束の時刻だ。17年前の続きを始めよう」

17年前の続きを始めようだった？

私は、状況を理解するだけで精一杯だった。気絶している間、正確には”死んでいた”のだろうか。

ただ一つわかつているのは、あの巨人がとてつもない存在であり、そして17年前の元凶であるということ。

私は、不意に辺りを見回す。そして、あることに気がついた。

薔薇だ。ロシアで私たちを苦しませた薔薇が、見事なまでに枯れてしまっている。

どういうことだ。と、わたしは、ロマノフとかいう男に悟られないように見る。

よくよく見ると、花卉が発光していたはずだった薔薇は、花卉ではなく、大地を発光させている。これはどういうことだ。

私は、なおも悟られないよう、目で光を追っていく。

「何をよそ見している！」

途端、件の男の怒声が響いた。私は、脚部バーニアを噴出させ、そのまま後方へ宙返りする。

「へえ、どうやらあんまり見せたくない物みたいね？」

意地悪そうに私は問う。

「フツ、小娘が！」

もう一度私は、バーニアを噴出する。足の動きに感応した補助バーニアが移動を補助し、ギリギリのタイミングで奴の大剣をかわす。

「いやね、随分と横暴よ、ウラジミール・ロマノフ！」

アンダーバレルグレネードのトリガーを引く。バレル下から放たれた榴弾が弧を描いて巨人へと向かう。それから一秒となくして大きな爆煙が広がった。

「瀬田特技兵！」アンタは、早くプロキオンを何とかしなさい！愛菜、やるわよ！」

「はっ、はい！」

シリウスが光り始める。全く、私は仲間はずれね。少しだけ自分を卑下した後、榴弾の空の弾倉を捨てて、新しい弾丸を詰める。

「側面から回りこんで。私は上を行く」

メインバーニアを噴出する。もう、推進剤は大した量はない。地上戦に持ち込まれる前になんとかしなければ。

急上昇した私は、そのまま足を振り上げて体をひねる。真つ逆さまへと落ちるのだ。

「愛菜！」

「はい、流希さん！」

彼女がそう答えると、シリウスは爆煙の中へと消える、変形が完了したシリウスは、光を放つためか、煙の中でも見える。それはオリオンにも言えることで、上空からその禍々しい光が見えた。

そして、私は気づいたのだ。その光が何を意味しているのか。

そう、薔薇だ。奴は完全に復活したわけではないのだ。だからこそ自分からは襲ってくることは無かった。こちらが近づかなければ攻撃はして来なかった。

「……そういうことか！」

補助バーニアを全開にする。もう、燃料がなくなってきたのか既にブスブスッ、と歯切れの悪い音になる。

「流希さん!？」

愛菜が動揺して、私に問いかける。私はそれに応答する間のなく、先程リロードした榴弾をオリオンではなく、薔薇に向かって放った。しかし、全く通じなかった。私は、動揺した自分を何とか落ち着かせる。

もう一度、薔薇を見る。おかしい、先程まで輝いていたはずの根は、何の痕跡も残さず消えている。

「ふっ、どうした？私はこっちだぞ？小娘」

私は、「クッ」と言っただけ顔を見ると、リロードをし、もう一度オリオンへと飛翔した。

「全く持って不愉快だ。その程度の力で歯向かおうとはな」

風を切る音が響いてくる。巨大な剣が虚空を切り裂き、その衝撃波にシリウスとADは、跳ね飛ばされる。

圧倒的すぎる。

僕は、焦っていたのだろう。どうにかプロキオンを動かそうと必死にコンソールを操作する。見たこともない英語だらけの設定メニューが現れたり、訳のわからないプログラム言語が表示される。

「どうしたプロキオン！私を殺すのではなかったのか？ああ!？」

ロマノフの怒声がスピーカーを通し、頭に響く。

わかっているんだ。でも、どうすればいいかわからない。

楠木さん、こんなときどうすればいいんですか？

僕は、涙ながらにそう心のなかで問うた。無論、回答は無い。

無慈悲に広がる現実をモニターは映しだす。オリオンに蹂躪される二人の姿。胸が痛くなる。

「瀬田大輔！いいのか？殺しちまうぞ！？」

ロマノフの怒声が強くなっていく。それと並行するが如く、僕の怒りのボルテージも高まっていく。

「大ちゃん！」

愛菜が悲鳴に似た声で僕を呼ぶ。

シリウスは、首を捕まえられ持ち上げられている。そして、流希は黙ったまま。ADはその小さな体を摘まれている。

「クソッ！なんでアンタはこうも簡単に人殺しができるんだよ！」

「何を言っている？私と君は変わらんよ。私は、人間を殺すことによつて創造する。対する君は、MFLを殺すことでここまで進化した。DE-Sの起動者、それに与えられた重責は君は理解できていない。ヒトを超えた能力を、君は、現に創りだした。もはやお前たちは、人間ですら無い！」

「そんな理屈！」

「理屈ではない、現実だ。君は、17年前に死ぬはずだったんだ。それなのに君はDE-Sの鍵として生き延びた。それが今、君のしている破壊による創造の原点。親を殺して、君は創造されたんだよ」「そんなこと……そんなことない！」

途端、プロキオンの画面が真っ赤になる。

《DE-S》

又、始まるのだ。

するとその直後、まだDE-Sの文字が振り払われていない時、僕の耳元に何かさがさやいているような気がした。

『怒りを力に変えるな。DE-Sは、可能性の力。君の可能性が無限に広がる限り、DE-Sは、それ相応の力を見せる。破壊の力を呼び覚ますな。創造の力を——救いの力を呼び覚ませ』

聞いたことの無い声だった。でも、不思議と既視感を感じがした。

僕は、ゆつくりと目を閉じる。

『怒りを力に変えるな』

肩の力を抜く。

『破壊の力を呼び覚ますな』

僕が——僕が今するべきこと。

『救いの力を呼び覚ませ』

スロットルレバーをぎゅっと握りしめる。その途端、赤く輝くDE-Sの文字は、裏返るようになった後、赤から青へと色を変える。

「そうか……相模原宗介、それがお前の考えか」

ロマノフがボソリと呟く。

「ウラジミール・ロマノフ。僕は、貴方を許せない。でも、殺すこともできない。それは、怖いからだ。ヒトを殺すのが、誰かを傷つけるのが怖いからだ。嫡木さんが言っていた、僕はMFLなら平気で傷つけるのに、なぜヒトは殺せないんだと。そうだ、僕は貴方と一緒に。誰かを殺して、自分の道を創造してきた」

「そうだろう？ だったら、私と共に来い。お前には、素質が——」

「だから！」

僕は、ロマノフが言うのを遮る。

「だからこそ、僕は、貴方を助ける！」

そして、DE-Sの文字が振り払われるかのように消える。

装甲が輝きはじめる。フェイスカバーが180°回転し、頬に取り付けられた排熱フィンが口元を抑える。そして、頭部装甲が降りると、プロキオンのアイセンサーは二眼となる。

機体各所に設けられた排熱フィンが展開する。そして、金色の粒子が、プロキオンの周りを包み込んでいく。

「可能性の力——僕は、貴方を助けだしてみせる！」

フットペダルを押し込む。機体背面に取り付けられた飛行機のような追加装備のフライトシステムが大きな音を立て、地面へと落ちる。

「何故だ……GAEAは、起動している筈だ……！」

ロマノフが怯えた声を出す。

「冬の大三角形は終わった。だが、星の力はこれからだ」

その刹那、プロキオンの手のひら、オリオンのコックピットが爆散する。無論、ロマノフもだ。

通信を開いたまま、愛菜と流希の顔がウィンドウに映っている。ふたりとも啞然とした顔をしている。僕もきつとそうなんだろう。

僕ははじめ、状況を理解できなかった。それから数十秒して、僕は、ようやく事態を理解する。

「僕は……救えなかったのか？」

二人は黙ったまま。僕も黙っている。

その静寂を、VMFLからの通信が終わらせた。

「大輔、無事か？」

「父さん？ああ、無事だよ」

「その——よくやった」

父さんは僕を褒めてくれた。でも、僕はもどかしかった。

流希も、愛菜も、僕も生きて帰れる。17年前の根源であったベテルギウスも破壊した。それでも、僕の中には何か違和感があった。

その日の夜。私は、未だに終わらない書類に悪戦苦闘していた。

警報の無断発令や、第一級封鎖区画への無断侵入。テロリストを領内に入れたこと。始末書の山だった。

その中に一つ、目に止まったものがあつた。

「VMFL 諜報部の予算提案書……そんなものあつたか……」

研究施設と軍事施設が主のVMFLに諜報部など無かったはず——
「司令、どうやら資料に目を通してくださったようですね？」

「……この書類、出したのはお前か、佐渡？」

先日からVMFLに現れていた男、佐渡。最初は、潜入工員か何かだと思っていたがズヴェズダの一件で彼の存在は一変した。

警視庁の刑事。しかも特殊犯罪を扱う。そんな彼がテロリストを追ってVMFLに潜入していた、ということだ。

「私は、こんなものを許可するつもりはないぞ」

「いえ、許可してもらうつもりはないです」

「どうということだ？」

私は、もう一度書類に目を通す。

「……なるほど、政府から直接のお達しか」

「そういうことです」

目を押さえて、ため息をつく。

「政府は、一体何を考えているんだ？」

私は問う。

「さあ？……では、私はそういうことなので」

佐渡が司令部から出ていく。自動ドアの開閉音がして、彼は、「それでは」と言った。そして彼は続ける。

「願わくば、貴方の計画に支障が無いことを。相模原宗介」

T o b e c o n t i n u e d .

第十三話 デブリーフィング

「それでは、かんぱーい!!」

司令部に大勢の声が木霊した。

第一級封鎖区画での一件から1日経った今日、VMFL基地では祝賀会と言う名の宴会が催されている。無論、僕も招待されたのだ。普段、様々な機械がひしめき合っている司令部には、作戦会議室から運んできた長机が置かれ、その上にはたくさんのごちそうが並んでいる。

「どうした大輔、あんまりくってねえじゃねえか」

大柄な男が僕の背中をバシバシ叩きながら言う。この人は、僕が始めてプロキオンに乗った日、僕と愛菜を助けてくれた戦車の砲手。溝口曹長だ。

曹長は、どうやら相当酒を飲んだらしくベロベロになっている。それからややあって、二三式のドライバーの人が曹長を無理矢理に引きずっていった。

僕は、やれやれ、と頭を横にふると長机の方を向く。机の上には巨大な鍋が置いてあった。そこからは、とてもスパイシーで美味しそうな香りが漂ってくる。

「大ちゃん!こっちこっち!」

エプロン姿の愛菜が手を振る。愛菜もシリウスのパイロットとして招待されたのだが、どうやら成り行きで料理を作る側になったらしい。一応VMFLには、食堂があるので、主にはその方々が作っただけだが、このカレーは愛菜がどうしてもと言って作らせてもらったらしい。

そうして、僕は愛菜の父さんとの約束を思い出す。生きてまた、カレーを食いに来いよ、と言われたこと。

約束は守れた。僕は生きて帰って来れたんだ。改めて実感する。愛菜がカレー皿にたんまりとご飯を盛る。ニコニコ笑いながら「た

くさん食べてね」と言う。

僕は、その量に少々不安を覚えたが、笑顔でそれに答えると、カレ
ー皿をつかんだ。皿越しに伝う熱が生きている事を確認させた。

すこし腹が膨れたような気がした。食べ過ぎたのだ。

僕はトイレで用を足すと、廊下の脇から外へと出た。裏口のような
ところだ。

外の風に当たりたかった僕は、何の躊躇いもなく、扉を開けた。そ
とは、結構冷たかった。

既に辺りは真っ暗で、見えるのは格納庫だけ。戦車や戦闘ヘリ、テ
イルトローター機等と言ったものは無く、平坦に続く滑走路が見え
るのみである。

暗く、淀んだ空に旅客機の放つ赤い光が見える。おそらくD区画の
国際空港へと着陸するのだろう。

「アンタ、こんなとこにいたの？」

僕がそんな事を考えていると不意に流希が声を掛けてきた。

「流希か、どうしてここに？」

「少尉を付けなさい。アンタを探してたのよ。トイレに行ったとか
言う割には遅かったから」

すると流希は、一旦渋い顔をして「もしかして下痢？」と言ったの
で僕は即座に「違う」と返す。

「何ムキになつてんのよ、全く」

そう言つて流希は、腕を組む。今日の彼女は、いつもらしからぬ赤
いドレス姿だ。基地にいるときは軍服だし、学校の場合は制服だし。
それ以外の服装を見たのは始めてかもしれない。

彼女の美しい黒髪が、丸い肩に沿って垂れている。それがなんとも
綺麗と言つか、見とれてしまう。それでも僕は、恥ずかしいのか横
目で彼女を見る。

「何？似合つてない？それならそう言いなさい」

「いや、違う違う！むしろかわいいよ」

すると流希は、途端に頬を真っ赤にさせ後ろを向く。顔は下を向く。
「う、うるさい、死ね！アンタって飛んだ阿呆ね全く。今からAD
持ってきてアンタの顔を7.56mmで蜂の巣にしてやるのか!？」

「はあ？なんでそんなに言われなくっちゃ——」

「いいから黙れ！もう……」

流希は顔を隠したまま。そのまま「うううう」と唸っている。
正直なところ、僕はそんな流希の姿を見て安堵していた。あの時、
東京でオリオンと戦った時、目の前に血みどろの流希がいたときは
血の気が引いた。

それでも今、彼女はこうして生きている。僕はほっとした。でも、
それ以上に不安があった。

「……何渋い顔してんのよ」

それを察したのか、いつもの冷静さを取り戻した流希が僕の隣に戻
ってきた。わすかに、シャンプーの臭いがする。

「いや、DE-Sとか大丈夫なのかなってさ。普通じゃ有り得ない
ことが目の前で起きてたんだから。どうしても気になるんだよ。ウ
ラジミール・ロマノフが最後に言っていたことがさ」

「なるほどね」

そう言っただけで彼女は腕を組むと、ため息をつく。

「アイツが言っただけは正直私には分からない。でも、少なくとも
私は大丈夫よ。あのあと検査入院で聞いたんだけど、DE-Sが
ウィルス状ってのはあくまでも比喩表現。詳しく言うとDE-Sつ
てのは、現象に過ぎない。ダークエネルギーっていう未知の力が働
くには特定の条件が必要。そしてダークエネルギーが作用した時、
ある一定の確率で、その条件は他へ拡散する。これが感染すること
ね」

「つまり、どういうこと？」

「ダークエネルギーが作用する物質構成、即ち遺伝子配列に変えら
れてしまうってこと。それがどういう仕組みなのかはわからないけ

ど、その組み換えられるっていうことは奇跡的な事らしいの。でも、オリオンの破片を媒介するとそれが拡散するのを手助けしてしまう。だから私は、あの時生き返ったわけ。17年前の時はきつと、それがもつと凄いい拡散だったんだらうと思う。それで、きつと人間が耐えうる限界を超えて、皆死んじゃった、と。以上、医者から聞いた長つたらしい説明。文句は？」

彼女は、自信たっぷりに言うので、僕はそのまま横に首を振る。すると彼女は満足気な顔をして「じゃあ、私は会場に戻るわよ」と言い残し、ドアの方へと歩き出す。

その刹那、耳をつんざくような爆音が響いた。強い風が体を煽る。

「なんだ……これ……」

思わず声を漏らす。帰ろうとしていた流希も足を止めて顔をあげ、その原因を見上げていた。

途端、パーティ会場になっていた司令部のコンピューターの一つが警報を響かせた。

「何があつた？」と、私。

「何かがここに侵入したようです」

急いでデスクへと向かったオペレーターが答える。コンピューターには未だにパーティ用のキラキラした電飾などが付いている。オペレーターはそれを気にすることもなく、キーボードを叩く。

口を抑えながら考える。一体何が侵入したというのだ。MFLならば自衛軍の防衛装置に引っかかるはず。他国の未確認機であっても自衛軍にスクランブルがかかっているはずだ。それでは一体何が……

「映像、出ます」

たくさんのモールと『祝 第一級封鎖区画より帰還』と書かれた横断幕で飾り付けられたモニターに明かりが灯る。

そこに映し出されたのは戦闘機のようなもの。” ようなもの” とつけたのは、それが戦闘機だとは断定しづらいからだ。

その機体は、バーニアが大きく下へ向いていた。かといってV・TOLという訳でもなさそうだ。

バーニアは足のように折れ曲がり、ランディングギアがゆっくりと出ていくのがわかる。

そこで、私は思い出した。

「そういうことか……」

小さくつぶやくと、それを聞いていた何人かが首を傾げる。

「いいんだ、彼らは味方だ。全く、時間にルーズなのかそうじゃないのか」

私がそう言つとパーティに参加していた者が皆、首を傾げた。

「これって戦闘機なの……？」

流希が僕の隣で声を漏らした。

僕らの眼前にあるもの。この爆音と爆風を生み出している正体。それは何とも形容しがたいものだった。

戦闘機、といえばそうなのだろう。細く伸びた機首にぶっくりと浮き出たキャノピー、主翼は折りたたまれ、尾翼が微かにバランスを取ろうと動いている。ここまではただの戦闘機と何ら変わらないだろう、つまり問題は他にある。

眩い閃光を放つ双発のロケットエンジン。それが”下”を向いているのだ。足のように折れたエンジンがVMFLの滑走路へと向けられ、反射した熱気が僕らを包む。

途端、その戦闘機のキャノピーが開いた。そこからは、逆光でよくわからないが二人の影が見える。

そのうちの一人、前方の席に登場している人が体を乗り出し、大声を上げた。鼓膜を破くような凄まじいエンジン音にかき消され、そ

れはよくわからない。

「おかしい、未確認機なら自衛軍にスクランブルが発令されてるはずだし、ここに向かつてるならV M F Lにコードイエローが下されるはず……」

流希が小さく呟く。彼女もこの状態を理解できてないんだろう。

僕は、強く拳を握ると「貴方達は誰なんですか!？」と叫んだ。

無論、返事はない。そもそも聞こえているかどうかも定かではないにしても妙だ、無効は一切攻撃の兆候を見せないのだから。それが逆に恐怖を煽るが、僕はひとまず向こうに攻撃の意思は無いと判断し、安堵する。

不意に僕の肩を誰かが叩いた。僕は、驚いて体を跳ねさせると直ぐ様叩かれた方の右を振り向く。

「父さん？」

濃い青色の軍服を見にまとった父親が、自分の隣に居た。

すると父さんは、僕の耳元まで顔を近づけると「これは私の客人だ。お前は少尉を連れて基地へ帰れ。もう時間も遅い、雀野さんも送ってやれ」と、言った。

僕は、ただそれに「うん」としか言え無かった。そのまま僕は流希の肩を掴み、出入り口へと歩き出す。

後ろを一瞬だけ振り向いてみる。そこで見たのは奇妙な戦闘機から降りる女性、そして少年だった。

「いやあ、すみませんねカーネル・セダ。どうにもジサボケってますか」

足が生えたような戦闘機。ベトナム戦争中に使用された米軍のF14を彷彿とさせるフォルムを持つそれは、足を畳み、翼を大きく広げると先程脚部のようになっていたエンジン部が飛び出たランディ

ングギアを使い、着陸した。

そして、大きく立てに開いたキャノピーから、女性が降りてくる。短い金髪をかきむしり、眠そうな目をこすりながら。

「出来れば作戦前には来て欲しかったのだが——まあ、おそらくそれが星の導きだったのだろう」

私がそう返すと「カーネルってばロマンチック！」と彼女は言う。

「全く、姉さんってば遅刻の事許してくれてるんですから感謝しないと駄目ですよ。それと、これは時差ボケじゃなくて単に姉さんが途中で独断行動に走ったせいです。そのお陰で救援が間に合わなかったんだから。プロキオンがベテルギウスに勝利したっていうのは本当に奇跡なんですから」

後部座席から少年が顔を出すや否や、彼女を叱っている。私は、それを見ながら「ふう」とため息をつく。

「全く、ガルダ姉弟は変わらないな——して、完成したのか？」と、私。

「ええ、オフコースですカーネル。プロキオン程とはいきませんけど互角か、それ以上に戦えるはずです、このアルタイルは」

奇形の戦闘機を見、彼女は言う。

「頼んだぞ、これから先は冬の大三角形だけではどうなるかわからないからな」

「任せてください」

彼女は腕組みをして、自信たっぷりに言った。

私は、奇形の戦闘機を——アルタイルを見上げた。
拳を強く握る。

『星の力はこれからだ』

あの時、ウラジミール・ロマノフが残した言葉。

私の中には、希望は無かった。オリオンが、17年前の原因とは思えなかった。それが恐怖をかきたて、そして行動を起こさせる。

夏の大三角、希望の予感が感じられないことに私は何の疑問も感じなかった。

第十四話 飛翔する鷲へアルタイル

結局、あの後すぐにパーティは終わった。僕と愛菜はもう時間も遅いとのことで片付けはVMFLの人たちに任せ、帰った。

何事もない日常が戻ってきたのだろうか？少しだけ不安になる。

僕は、教室の自分の机に居た。顔を突っ伏して、まさに寝ようという状態。

「おつ、ようやく戻ってきたか」

不意に、久しい声が耳に響く。

「なんだ、涼介か……」

「なんだとは、なんだ!？」

いつものバカみたいな会話を交え、涼介は席に就く。

「にしても俺だって驚いたんだぜ、お前が例の新兵器のパイロットだってこと」

「なんで、それを知ってるんだ？」

僕は、どうにも怠かったのか低いトーンで返す。それでも一応驚いているのだ。

「いや、長門少尉に聞いたまでさ。俺は、あの日ロシアに飛び立つ新兵器を拝もうとしたらどうにも出くわしてね」

「ふーん」

適当に相槌を打つ。そして、顔を下へと向ける。

「なんだ、元気ねえな？」

「疲れてんだよ……もう眠い」

とは、言っても授業は始まってない。朝のホームルームさえも。どうにも先が思いやられる。

「はいはい、VMFLのEスさんは、お疲れだこと」

ふてくされるように涼介は言って、黒板の方を向く。いつもはここでご自慢の写真を見せびらかすのが日課なのだが、今日は珍しくそれがない。

涼介の癢に障るようなことを言ってしまっただろうか？僕は考えながら目を瞑った。

スコン、と頭に何かが当たった。

既視感デジャヴというのだろうか。僕は、前にもこんな状況になったことがあるような気がした。いや、あった。

「瀬田、復帰早々居眠りとはいいい度胸だな。ああ？」

見上げると、そこにはゴリラのような顔がニツコリとわらっている。「えっと……すみません……」

適当に謝罪の言葉を述べて、姿勢を正す。潔い態度に拍子抜けした先生は、ポカンと口を開ける。

「まっ、まあ瀬田はいろいろ大変だったからな。だが、授業中はおきているよ」

先生が教卓へと向かう。僕はその背中に対して「はい」と、生返事をした。

制服の袖の上で眠っていたせいか、頬には皺があつた。僕はその辺りをポリポリ掻きながらおぼろげに前を見る。

「えー、それでは、ホームルームを始めるわけだが。まず、今日から交換留学生がこのクラスに来ることとなった。入れ」

先生がそう言うてから約2、3秒。沈黙が訪れてから引き戸が開く。普通、こういう場合は「可愛い子かな？」とか「イケメンかな？」

とか騒ぎ立てるのだろうか、そんなことは無かった。空気が、凍ったように止まる。

美しい顔立ち。金色の髪に青い目。まるで人形のような件の交換留学生は教卓の前で足を止める。

「今日から新長野市立第三高等学校にお邪魔させていただきます」ナスル・ガルダ”です。よろしくお願いします」

流暢な日本語で彼はそう言う。

ピンとした背筋と後ろで縛った金髪。女の子と言っても通じるのではないかという出で立ちだ。しかし、彼の着ている服はどう見ても男子が着るブレザーである。

前の席の涼介が興奮しているのかしていないのか、よくわからない微妙な表情をしている。因みに隣の席の長門流希はというと、左手で頬杖を突きながら右人差し指で机をトントントントン叩いている。その速度は徐々に増している。

僕も、件の交換留学生については、さほど何も思っていなかった。でも、途端に流希の表情が変わったことで、僕はそれに気づく。

僕は、このシルエットを前にも見たことがあった。そう、それはつい昨日、VMFL基地で。

「あー、つまるところ歴史上におけるあらゆる破壊活動に置いても17年前に起きた何かは異例であって——」

ホームルームが終わってから現代文の授業があり、そして今は、歴史である。担当教師が黒板に用語を書きなぐり、それを解説している。

僕はそれを適当に受け流していた。こんなこと、僕は全て真相がわかってからである。

17年前の何か。僕は、その根源と戦った。そして勝利した。何となく心残りはあるが——

隣の席の流希はというと授業開始から間もなくして寝てしまった。休み時間、僕の方を向くや否や彼女は、「私寝るから、なにかあったら起こして」と言って教科書に顔を隠して眠りに落ちた。

まだあとけなさが残る17歳の少女。幼い顔立ちの彼女の寝顔が僕のすぐ隣りにあった。

僕は、心臓が高鳴るのを必死に抑え、教科書を見ることにした。気持ちいを落ち着かせようと思ったのだ。

「例を挙げるなら旧ソ連のツァーリ・ボンバ。これの爆風は地球を約二週したと言われている。対する１７年前の何かは――」

駄目だ、集中できない。僕は教科書に落としていた目を上へと戻す。その際、目に映ったのは黒板ではなかった。綺麗な金髪だった。

確か、ナスル・ガルダ君……だっただろうか。

僕は思い出す。昨日見た二人組、あの奇妙な戦闘機のパイロットを

その途端、チャイムが鳴った。

「あつ……と。それじゃあ今日はここまで、日直」

先生がそう言うと言った日直であつた生徒が号令を掛ける。その間に僕は流希をツンツンとつつき、起こす。

「ああ……何よあ……」

流希が不拔けた声を上げる。

「授業終わったんだよ、早く立って」

そう言うとな彼女は眠い目をこすりながら立ち上がる。

「礼」

生徒が言つて、皆が礼をすると同時、先生は教室からはけていく。

しかし、僕の視線は、そこではなく、別のものにあつた。

ナスル・ガルダ。彼の綺麗に整つた横顔を見つめていた。

「どうした？そんな顔して？」

不意に、涼介が言つた。

「いや、何でもないよ」

「ああ、それならいいんだが……」

涼介が口ごもる。それを見て僕は、「何かあつたか？」と、問うた。

「いや、何でもない。それより次の授業確か外国人の先生が――」

涼介が言いかけて、何かがそれを止めた。警報だ。教室のスピーカーからサイレンが鳴り響く。

《政府より新長野市民の皆様に通達します。現在、新長野市D区画

方面より、MFLが侵入しました。市民の皆様は急ぎ、シェルターに避難してください。繰り返し――」

毎回変わらぬ女性のアナウンスが響き、学校全体が騒然となる。オリオンは倒したはずだ。つまりは残党ということなのだろうか。

「涼介、先に逃げてて」

「おお、エース様のご登場ですか!？」

涼介がはやし立てる。僕はそれを適当になだめると流希の方を見た。彼女は深く、頷く。

「早く行きましょう、あと愛菜さんも連れて行かないと」

僕は、彼女の言葉にコクリ、と頷く。すると、その途端に携帯が震えた。僕がすぐさまそれを取り出し、耳に当てる。

「もしもし?」

流希と涼介とは反対の方向を向き、僕は言った。

「瀬田特技軍曹ですか?こちらはVMFL司令部です。ご存知の通り現在、新長野市内にコードレッドが発令されました。つきましては皆様を向かえに車が向かっています。すぐに校門の前に――」

その刹那、僕の視界に二人組みの男女が映った。

ふたりとも綺麗な金色の髪で、一人は細身の女のようにも見えた。

そしてもう一人はショートカットの長身の女だった。

「瀬田軍曹?聞こえていますか?」

電話の向こう、オペレーターの女性が声を掛ける。それでも僕は、僕の目の前を掠めていった男女を見えいた。既に彼らの姿は見えない。

後方から、流希と涼介、そして合流した愛菜が声を掛ける。しかし、僕は呆然と立ち尽くしていた。

VMFL基地司令部。多くの情報を操り、戦場を指揮する場所。コ

ードレッドが発動されてからここは慌ただしかった。

「ふむ、アルタイルを早速実戦投入ですか？」

司令部の一番上に位置する総司令席、そこに座っている私に一人の男が言った。グレーのスーツを着た男。彼は、警視庁の特務課を名乗り、拳句の果てにV M F Lに謀報課なんてものを設立した”佐渡”という者だ。

私はどうにもこの男のことが気にいらぬ。どこか抜けているのか、それとも何かを企んでいるのか――

どちらにせよ彼は、前科一犯、スパイとしてここに潜伏していた。注意することに越したことはないだろう。

「ああ、もともとアルタイルは、米軍から実験の為に我々が戦闘テストを引き受けたものだ。その予定が数日遅くなり、ターゲットが止まっているから動いている怪物に変わっただけだ」

私は、そう答えて視線を佐渡からメインモニターに移した。巨大なスクリーンには地下の格納デッキの映像が映し出されていた。

「パイロットはまだか？」と、私。

「間もなくです。一分後には出撃可能」

オペレーターが言う。私はその言葉に安堵し、背もたれに体重を預ける。

「プロキオン、シリウス、アーマードレスはどうなさるんです？」

佐渡がしつこく問う。おとといの一件で損傷していることは彼もわかっているはずだ。妙なことを悟られなくなかった私は、黙って無視した。

「――そうですか」

佐渡が神妙な面持ちで言う。私は横目でそれを見ていた。

メインスクリーンに光点が映し出される。それからしてその点に”Altair”と表示される。ついにアルタイルの実戦が始まる。

「それにしても妙ですね。米軍がわざわざV M F Lに実験の依頼をするとは、」

「M F Lは日本にしか出現しなかったが、最近になってロシアにも

現れたからな。その対策ということだろう。諜報部ならそれぐらい把握しておいたらどうだ？」

私は毒を含ませてそういった。

「それは失礼。では、私は私の仕事に就くとしましょう」

「仕事？」

即座に問う。

「諜報活動、ですよ」

佐渡は、そう言うと言部からはけていく。司令官には部下の行動を把握する権利があるが、どうやら彼にそれは通用しなかった。

奇形の戦闘機、アルタイルは昇降機に乗り、滑走路へと向かっていった。無論、戦うために。

そして、僕は、そのパイロットである。これから戦いに行くのである。

僕は、ナスル・ガルダ。交換留学生の振りをして新長野市にやってきた米軍のテストパイロットだ。

「姉さん！早く！」

走りながら、僕は言った。

後方、数十メートル後ろに金髪の女性が見える。彼女が僕の姉であり、アルタイルの機長。アン・ガルダ。彼女は、外国人教師としてこの学校にやってきた。

「待つて待つて！プリーズウェイトー！」

姉さんは息を切らし、そう叫ぶ。僕は仕方なく足を止める。でも、アルタイルの出撃はもう間もない。

もし自分が一人がアルタイルに登場したとしても動かせはしない。

僕は副機長であり、攻撃を専門に行う。つまり、アルタイルの足はなくなってしまうわけだ。

姉さんはそれでも息を切らしながら走る。それでも軍人か？と僕は首を傾げてしまうが、彼女は本気だから仕方ない。

その間、僕は対Gスーツのチェックを行う。ヘルメットを被り、酸素ボンベにチューブが接続されたことを確信する。バイザーを降ろし、ヘッドマウントディスプレイを起動させてみる。

悪くない、コンディションとしてはいつもどおり、もしくはそれ以上だろう。

それからして、姉さんがようやくやってきた。

「はあ……はあ……もう、これじゃあ本国の方がよっぽど楽なんじゃない？この街入り組みすぎ、迷っちゃうわよ……」

「それはいいから、出撃しないと」

僕は、姉さんの言うことを無視し、続ける。

「アルタイルよりV M F L、間もなく出撃可能。予定通り3番ゲートから出撃する」

それから直ぐ様、ヘルメットに搭載されたヘッドフォンから女性の声が聴こえる。

「V M F Lよりアルタイル、了解した。報告を続ける」

そして、ヘルメットを被った姉さんがやっとこさ搭乗する。

「ナスル、キャノピーを閉めて。アンド、H Qに連絡」

途端、姉さんの口調が変わった。そうだ、戦いが始まるのだ。

姉さんは、戦闘機に乗れば正確が変わる。いつもの英語交じりの日本語は変わらないが、それでも言葉の重みが断然違う。

僕は一言「分かった」と、告げて回線を開く。

「アルタイルからV M F L、出撃可能」

「了解、出撃許可。秒読みを開始する」

昇降機が、ズシン。と音を立てて止まった。景色が開け、青空が見える。アメリカとは違った澄んだ青空が。

「ユー・ハブ」

僕は姉さんに小さく告げる。

「アイ・ハブ」

姉さんが答える。

そして、秒読みが開始する。

「5」

姉さんがペダルをゆっくりと踏む。

「4」

後方から、眩いスラスタ―光が僕を照らした。

「3」

可変翼が大きく開く。

「2」

僕は、モニターを見つめ、レバーを握り締める。

「1」

もう一度、青空を見る。

「0」

「アルタイル、テイクオフ！」

そして、姉さんの声とオペレーターの声が重なる。

体にとてつもないGがかかり、それにより血液が下方へと落ちないよう対Gスーツが体を圧迫する。

視界がひらける。

アルタイル《飛翔する鷺》は、天高く舞ったのだ。

僕の心のなか、何かが引つかかっていた。校門の前に止められた軍のジープ。それに乗り込み、基地へと向かう間中ずっと例の二人組の事を考えていた。

ナスル・ガルダ。彼は何者なのか。そして昨日の戦闘機は一体何だったのか。それはきつとあの時一緒にいた流希も思っていることなのだろう。それでも彼女はいつもと変わらぬ眼差しだった。

どうにも彼女のような人間はスイッチの切り替えが上手いらしく、

学校で見せる顔とV M F Lで見せる顔は大きく違う。猫をかぶっている、といえばそうなのかもしれない。いつもは縛っている髪を降ろし、メガネをかけ、優等生のように（実際優等生なのだが）振る舞う姿は今とは大きく異なっている。

「瀬田、任務に集中しなさい」

不意に、流希がそういった。

「そつ、そつだね……」

彼女の観察眼というのは、まったくもって鋭い。

僕は深く息を吐くと、シートに体を埋めた。

「あの……それで街は大丈夫なんですか？もうすぐ基地ですけど、被害とか……」

愛菜が小さな声で問う。

「今のところ、コードレッド発令に基づき各隊迎撃に当たっています。現状、被害は軽微、といったところでしょいか」

「数は？」

流希が続ける。

「確認されただけでは一つ。おそらく増援は無いと思われますが――」

運転手の男が言いかけて、途端に車が激しく揺れた。僕の体はシートベルトに引つ張られ、なんとか壁に衝突するのを避ける。

急ぎ、窓から外を見る。白い煙が舞っていくのが見える。いや、これは煙ではない。むしろ雲に近い。

もしか、と僕は思い、視界を上に向けた。

案の定、だった。

「アイツ……」

宙を舞う戦闘機。プロキオンの二倍近くある巨体が大空を舞っている。

僕は、居ても立ってもいらなくなり、衝動的にドアを開ける。そして、携帯電話を制服のポケットから取り出して、ある番号に掛ける。

2、3回コールしたところで僕は運転手の男に「ここの座標は？」と聞いた。

それからして、電話が繋がる。

「A27ブロックです——まさか!？」

男が言う。でも僕は座標だけ聞いてあとは聞き流す。電話に耳を傾ける。

「私だ、何があつた？」

低く、しゃがれた声。父さんが答える。

「今すぐプロキオンをA27ブロックに飛行用追加装備をつけて送って欲しいんだ」

「ふむ、構わんが。プロキオンの整備は万全ではないぞ」

父さんが低い声で心配する。でも、僕は答える。「構わない、確かめたいことがあるんだ」と。

新長野市の上空、鳥のような怪物が宙を舞っていた。僕はそれをHMD越しに見る。

「ナスル、周囲のVMFL機に警告。この空域は私達が受け持つて」

姉さんがそう言い、僕は頷く。パチン、とスイッチを押して回線を開いた。

「VMFLより出撃中の各飛行編隊へ告ぐ、この空域はこれより合衆国空軍(USAF)が引き継ぐ。VMFL機は直ちに帰投せよ」
僕がそう言い放つと、青空の中で灰色の三角形がうごめくのが見えた。VMFLのF-35編隊だ。その相対距離はどんどん狭まってくる。

それからして、内蔵型のヘッドフォンにノイズが響く。

「ペガサスリードからペガサス各機RTB。……合衆国空軍(US

AF機、それが噂の新型機か、忠告しておくがMFLに通常兵器はろくすっぱ通用しない。覚悟しとけよ。オーバー」

「そうね、忠告にサンクス、ジャパニーズファイター」

姉さんがそう言って、もう一度ノイズがする。HMDに通信終了のサインが表示されて僕は息を飲んだ。

「姉さん、そろそろ敵機と接触する」

「わかってる、AAMアンロック急いで。すぐに交戦準備、アクテイブレーダー誘導で」

静かに、そう言い放つ。

僕は言われるがままに従い、コンソールを操作する。そしてコンソールの連動してHMDにカーソルが表示される。

ヘッドフォンからピッ……ピッ……とレーダーが響かせる電子音が聴こえる。

「ロックオン可能領域までこのまま突っ込む、ドリルの準備をよろしく」

「まったく、人使い荒いんだから」

愚痴りながらも一度コンソールを操作した。この対MFL用可変戦闘機”アルタイル”には、接近戦用に機首にドリルが搭載されている。傍から見ればおかしいと思われるかもしれないが、これはこれで戦闘機の格闘性能を上げることに一役買っている。

機械音がさらに増す。後方から鳴り響くバーニアにも勝るとも劣らずなドリルの音。

「あとでいっぱい愛してあげるから、今は任務に集中。初の実戦でヘマなんてできないからね」

「はいはい…… AAMアンロック、ドリル回転完了、いつでもオツケー」

僕がそう言つと、姉さんは黙ってスロットルレバーに手をかける。

「揺れるわよ」と、一言だけ告げて姉さんは思い切りそれを引く張る。

途端、体中が締め付けられた。尋常ではない速度がGを生み出し、

それに反応して対Gスーツが僕を締め付け、守る。

「……そのまま動くなよ」

僕は小さく告げる。攻撃は僕の仕事。飛ぶのが姉さんの仕事。そうして僕達姉弟は生き抜いてきた。

姉さんが操縦桿をいっぱいにつ張り、急下降する。

「次のアプローチで決める。しっかり狙いなさいよ！」

「わかってるよ！」

目を見張る。HMDに表示されたカーソルに巨大で、それでいて不気味な怪物をあわせる。電子音の鳴る間隔狭まっている。あと少しで、ロックは終わる。それまで持ちこたえてくれ。

僕の切なる願いをよそに、姉さんの操るアルタイルは荒々しく旋回する。ピッチが一気に下がり、体が浮いたような気がする。

途端、ヘッドフォンから警報が鳴り響いた。

「クソッ、ナスル、フォックス2！ブレア放出、相対速度上げるわよ！」

右手側にあったブレアの放出装置を殴るように押す。眩い光が機体後方から放たれ、それに包まれたミサイル状の物体は朽ち、落ちていく。

また、速度が上がった。660ノットを軽く超えている。即ち、音速を超越している。

「ナスル！AAM発射！今すぐ！」

姉さんが叫ぶ。でも、ロックはまだ終わっていない。さっきの旋回で誘導が大きくそれたのだ。

あと少しだった。あと、少し。

待ってくれ、と心のなかで姉さんに言う。

体中が汗ばんで、トリガーを握る手がしびれている。

音が変わる。短く、跳ねるような音だった電子音は、一つの長い音へ。

カチッ、とトリガーを引く音が響いた。微かな音なのに僕にはよく聞こえた。

キャノピーから見える空に新たな雲が出来上がる。一筋の細長い雲が大きく弧を描き、怪物に向かっていく。

「……着弾した？」

姉さんが問う。僕は直ぐ様レーダーを確認した。

「……グッドキ——違う、何だこれ」

途端、消えた筈の反応が現れる。それも一体だったのがいくつにも増えて。

「なるほど、あながち忠告も間違っちゃいなかったわね」

どういうことかと思い、僕はコンソールから目離し、空を見る。

そこに映っていたのは、先ほどの怪物。しかし、先刻より小さかった。

でも、違う。小さくなったんじゃない。増えている。分裂している。

「本国よりずっと楽しいじゃない。面倒な対地支援なんて目じゃないわ。ナスル、β形態の使用許可を合衆国空軍（USAF）に取り付けて！」

姉さんは、嬉しがるようにそういった。

僕が父さんに連絡をとってから一分も経たない内に目の前のゲートが開いた。

エレベーターのように地下まで続く出撃用ゲートには、薄暗く確認しづらいがプロキオンが徐々に上がってきていた。

「瀬田！私と愛菜は一旦VMFLに戻ってから出撃する。いくらアントンがDE-Sを使えるからって無茶なことは、絶対考えるんじゃないわよ。それにプロキオンは修理中なんだから！」

流希が車の中から大声を張り上げ、言った。

「無茶って、例えばDE-Sを使って機体を無理矢理に修復したり

とか？」

僕は適当に例を挙げる。

「場合によってはするかもしれないな……」

ため息混じり、携帯電話をポケットにしまいながら言う。

「アンタ、それがどういうことかわかってるの？DE-Sは危険だつて、17年前と同じことが起きるかもしれないのよ？」

「わかってる」

僕はそれだけ言っただけでゲートに近づいていく。一歩、また一歩と。

通常、道路脇のしがない駐車場であるそこには、地面が大きく割れた箇所があった。プロキオンは、そこからやってくる。

「大ちゃん！」

不意に、愛菜が言った。僕はそれに呼応し、振り返る。

「すぐに向かえにいくから……」

消え入りそうな小さな声。胸で手を合わせながら愛菜がそう言う。

僕はそれに返答する代わり、深く頷く。

その刹那、僕と愛菜、流希の間を白い壁が隔てた。いや、正確には壁では無く”巨人”が。

「行くよ、プロキオン」

たらしされた昇降用の小型エレベーター。僕はそれに足を引っ掛ける。真っ白い装甲と灰のライフル。青いフレームが光を反射し、それが僕の目に入り、眩しく見える。

DE-S起動前、バイザーが展開されておらず、横長のアイセンサーが一本、顔の真ん中に鎮座している。各所のフィン、本来の役割である排熱を果たし、かすかに熱気を感じる。

胸のあたりで昇降機が止まった。僕はそのロープのような昇降機を片付けるとコックピットハッチを開き、投げ入れる。

「瀬田特技軍曹。現在、鳥型のMFLが新長野市上空を旋回中。アルタイルが迎撃に当たっています。座標を表示するのでそちらに向かってください」

オールビュースモニターに明かりが灯る。プロキオンの視界が映し出

されるそれに黄色のビーコンが表示された。そこが戦闘空域なのだろう。

僕は、《アルタイル》という言葉が突っかかっていた。

昨日見た戦闘機、そしてナスル・ガルダという存在。

「瀬田特技軍曹、プロキオン。どうぞ」

オペレーターが小さく告げる。

「——了解。プロキオン、出撃します」

顔を上に向けた。その動きにプロキオンが同調し、アイセンサーが上空を映し出す。

スロットルレバーを一気に引いて、バーニアを点火させる。眩いスラストー光が後方から放たれ、プロキオンは、空へと飛び立った。

「ハア？β形態が認められない？」

操縦桿を握り、それを動かしながら姉さんが言った。

「ああ、さつき合衆国空軍（USAF）に連絡をとってみたら演習メニューにそんなものはないから認められないって——」

僕は消え入りそうな声で言った。対する姉さんは、これでもかというほど怒りを顕にしている。それはさつきからカタカタとフットペダルを踏む姿からわかる。相当機嫌が悪い様だ。

「VMFLはなんて？一応テストの指揮権限はカーネルにあるはずよ」

「入国してから一日しかたって無いし、何より姉さんが道草食ってたせいで上がてんでこ舞いだったらいいんだよ。それでまだ指揮権は合衆国空軍（USAF）にあるみたい」

「ビッチー！」

ガチャッ、とレバーを倒して姉さんは言った。途端にアルタイルが

大きく右へと旋回する。

「姉さん、言葉遣い！」

「うっさい、そんな事気にしてられますか！上のお偉方に私の代わりにアルタイルに乗ってもらおうかしら、ねえ！」

「スロットルレバーを大きく前へ傾ける。無数の鳥の中へ、アルタイルは突貫する。

「ドリルは用意できてんの？一点突破、なんとかするわよ！」

「ちよつと、それは無理が——」

「いいからやるの！」

僕の言葉を遮り、姉さんが言った。僕は渋々それに従い「用意は出来てる」と言う。

コンソールに機体全体の図が表示される。そして、機首の方に注釈が出る。

《Available》

金属の音が更に強くなる。歯医者で聴くあの音をもっと大きくしたと考えればいい。

《Assault begins》

敵との相対距離が近くなり、表示される文字が変わる。

「姉さん！フォックス3！」

同時にアラートが鳴り響く。無数の弾丸が膜をなし、宙を舞う。

「ハハハ、ワツアッブ？」

更に加速する。無謀だ。弾幕の中を突撃するなんて。普通なら死に行くようなものだ。

でも、姉さん——アン・ガルダは違う。

「接触と同時、βへ移行そのままコントロールをナスルに」

「はいはい」

弾幕の中、最小限の動きで避ける。その間に姐さんは作戦の内容を伝える余裕まである。

主翼が折りたたまれ、加速したアルタイル。微かにラダーが動き、寸分の狂いもなく弾丸だけを避けていく。まるで、弾丸がどこに飛

んで来るのか知っているかのように。

「もう少し——」

中心に、一際目立つものが見えた。分裂した際の”核”だろうか。球体のようなものが宙に浮かんでいる。

「これで……ブレイク！」

接触する。高速回転するドリルが球体に接触し、その中心に穴を開ける。

「ナスル、急ぎβに！」

「わかってるよ！」

コンソールの《Transform》押す。そしてコード入力が必要される。

「面倒な——」

僕はつぶやいて、解除コードを入力する。その途端、キャノピーから映る景色が一変した。

全体が灰に包まれる。キャノピーに被せられる装甲。それが僕の視界を奪ってから数秒、もう一度空が映し出された。しかし、これは本物の空ではない。

アルタイルの装甲が2つに割れ、その間から灰色の顔が現れる。水色のアイセンサーから読み取られた情報が、HMDに映像として映し出される。

双発のバーニアが2つに割れ、足のようになる。隠されていた両手が装甲下部から露出、左右へと伸ばされる。

これが《アルタイル》の本当の姿。

機首は胸部へと折りたたまれ、ドリルに突き刺さった球体は胸元にある。

「ユーハブコントロール」

姉さんが言った。

「アイハブコントロール」

僕が返す。

僕の左右、計器類がこつた返していた中から二本のレバーが現れる。

僕はそれを握ると力強く前へ倒す。それに連動し、アルタイルが胸元の球体を両手で鷲掴みにする。

「……ガンポッド展開、射撃を開始する」

レバーの先端、透明なカバーを外し、真っ赤な引き金を出す。

僕はそれを優しく押した。その刹那、アルタイルの胸元で閃光が走る。

両手首から現れる銃口。その2つが捉える球体。交錯する弾丸が確実にそれを捉え、撃ちぬいた。

プロキオンのオールビューモニターが映し出す空。真っ青なその中に無数の黒点が見えた。しかもそれは徐々に落下している。

あれは一体なんなのだ？僕の好奇心が高まり、自然と放出されるラスター光が強くなっていた。

件の黒点の中、僕はもうひとつ何かを見つけた。その黒点の中心に佇む灰色の巨人。おそらくプロキオンよりも大きい。

未確認機なのだろうか？僕の疑念はさらに高まっていく。

僕は、試しに交信を図ってみる。コンピュータが付近の周波数を検索し、未確認機と思わしきものを見つけ出す。

「こちらはV M F L所属、プロキオン。未確認機、応答してください」

僕はヘッドセットのマイクに向かっていった。そういえばいまさうだが自分は制服のままだったと気づく。

「未確認機？なんのことですか？」

聞き覚えのある声でした。

「もしかして——ナスル……ナスル・ガルダ？」

僕は問う。その後、息を飲むような音が聞こえた。

「そういう貴方は……」

ナスルがゴクリ、と唾を飲む音を響かせ、続ける。

「僕は……瀬田大輔……プロキオンのパイロット——です」

「ふーん、君が噂のニンジャボーイ？」

途端、女性の声が響いた。

「ニンジャ……ボーイ？」

「そうよ、ハイスピードで敵を翻弄する日本人パイロットがいるってきいたから」

「ああ……そうですか……」

苦笑いをしながら僕は答える。

「ところで、その……お二人は一体……」

「私たちは合衆国空軍（USAF）からの特令でこの機体、《アルタイル》のテストパイロットとしてVMFLに派遣された軍人。私はアン・ガルダ。そしてナスル・ガルダ。アンダスタン？」

妙な英語混じりに彼女は言う。

「それじゃ……アンさん達は仲間ってことですか？」

「アンで結構よ。つまりそういうこと、仲良くやりましょう？」

アルタイルが僕の方へと近づく。灰色の巨体は人型であったが、それは間違いなく昨日見た戦闘機だった。

僕は、安堵していた。そして、それと共に喜びも感じていた。

「はい！」

僕は返事をする。アルタイルは、その巨体のマニピュレータを差し出す。プロキオンもそれに対し、手を差し出し、握手を交わした。

第十五話 ファースト・コンタクト

「こつ、これがジャパニーズキャピタルの実力……」

新長野市Bブロック。学校などの教育機関と商業施設が立ち並ぶこの区画。その中心にそびえ立つ大きなショッピングモールに僕は来ていた。

エオンショッピングモールは、この新長野市で一番の商業施設だ。僕は、ガルダ姉弟との親交を深めろ、という父さんの粋な計らいで訓練返上でここへ来ていた。僕にとっては訓練を休めるので大変ありがたい。

「オーマイゴッド、まさにジャパンの技術力は世界一ね」

アンは、一人で興奮している。遙か遠くまで続く吹き抜けを見つめる。その周りに円を書くように立ち並ぶ種々様々なお店。彼女の目は輝いている。

「まったく、姉さんはいつもこうなんだから」

後ろで縛った金髪をなびかせてナスルが言う。

「まあ、いいじゃないか。こうして日本になれることも重要なんじゃない？」

「そうですけど……」

そうして僕は、一緒に来ていた女子組の方を見た。アンの横、二人で仲良さ気に洋服を見ている少女たち。愛菜と流希はすっかり意気投合してしまっていたようだ。僕がロマノフと共に行動していた時に何かあったのだろうか。

なんとも平和ではないか。僕は、この状況が何とも心地よかった。いつもの日常が、友人と騒いで、何となく過ぎていく。そんな”普通”が心地よかった。

「……でさ、」

僕は、一呼吸置いて。

「なんで涼介までいるの？」

模型店の前で目を輝かせている少年。第三の制服を見にまとった彼は、物欲しそうに戦闘機のプラモデルを見ている。

「別にいいじゃねえか、俺はエースパイロット様達に囲まれて幸せだぜ？ 最も、俺もその中に仲間入りしたかったがな」

彼は一人、黙々とプラモデルを漁っている。それから少しして彼は大声を張り上げて「見つけた！」と叫んだ。その大声に周りにいた客を始め。僕やガルダ姉弟、愛菜達も驚いてしまう。

「そうそうそう、これだよこれ！ F14 トムキャット。もう絶版だと思ってたのになあ……」

そうして涼介は、プラモデルの箱をまじまじと見つめる。全く、おめでたいやつだ。F14 モドキの可変戦闘機のパイロットなら、すぐ隣にいるというのに。

僕は溜息をつき、左手で頭を抱えた。自分が”普通”ではないということを改めて近くしたからだ。

僕の座るベンチに微かに風が流れてくる。空調設備によって人工的につくりだされたそれは、ゆっくりと僕の頬を撫でていく。

ウラジミール・ロマノフ。彼は一体何がしたかったのか。いや、彼はベテルギウスを使って世界を再構築すると言っていた筈だ。しかし、僕にはそれが段々嘘ではないかと思えてきた。

そういえば、こんな症状を前に涼介から聞いたことがあった。ストックホルム症候群だったろうか。被害者が犯罪者に感情移入してしまうということ――

駄目だ、段々僕の思考がおかしくなってきた。

仕方なく、僕は顔を抑えていた手をどける。ピントが合わず、霞がかかったように見えた。

段々、視界が明瞭になる。

「大ちゃん、これ」

不意に買い物から帰ってきた愛菜が僕に何かを手渡した。コーラだ

った。

僕は、愛菜からペットボトルを受け取ると、キャップを開ける。プシュツ、とキレの良い音がした。僕はそれを口へと運んでいく。にしても彼女は結構な買い物をしたようだ。僕の隣に座る彼女の横には大量の買い物袋がある。しかもかなり大きめの。

「ん？どうかした？」

「いや、なんでもないよ」

視線をどこにやればいいのか困る。大量の買い物袋のお陰でベンチは結構窮屈だ。僕は伸ばしていた両足を引っ込めると、肘掛けの方へ体を寄せる。少し脇腹が痛いけど、まあ、いいだろう。

「ったく、なにやってんのよアンタは。女の子にジューズ奢って貰うんだ？」

お次に現れたのはクリムゾン小隊の隊長にしてV M F Lの若きエースパイロット、長門流希だった。

僕は、彼女と視線を合わせないようにしながら「後で金は返すよ」と小さく答える。

「え？いいよ、別に。私が好きでおごったんだから」

「ばっ、愛菜！そんなこといったら僕の立場が無いだろう！」
必死になって反論する僕。流希はそれを見て苦笑した。

時間は、昨日まで遡る。

「ふむ、アルタイルβへの無断変形。確かに任務は達成できた。こちらとしてはアメリカに早い段階でデータを送ることが出来たわけだが……」

僕、ナスル・ガルダと姉のアン・ガルダは瀬田大佐の執務室へと呼び出されていた。無論、それはアルタイルの無断変形についてであ

る。

大佐は、深々と椅子に座りながら僕が書いた報告書をに目をとおしている。こういうデスクワークが無ければパイロットは最高の職業なのだが。

僕は、書類にしっかりと変形時の内容を書いておいた。変形時にかかるG、タイムラグ、利便性や敵への対MFL兵器としての有用性『変形なんてしていない』と書けばいいのだろうと思うだろうがそれは虚偽記載として立派な違法行為である。日本に軍法会議がなかったのが幸いだろう。

「まあ、この事については内密にしておこう。私の方で緊急の司令を出したことにしておく。次はないからな」

「さっすがカーネル、本国のボスにも見習わせたいわ!」

姉さんが言った。僕は急いでその姉さんの不躰な態度について謝罪する。

大佐は、苦笑しながら「まあ、今は見逃そう」と言ってくれた。

僕は胸を撫で下ろし、一礼する。そうして一步下がるとドアから廊下へと抜けていった。

そして現在、新長野市のショッピングセンター。

「F14トムキャット……貴方、センスあるじゃない」

「いやあ、アン先生にそう言っていただけるとは光栄です!」

姉さんはすっかり瀬田君の友人である西君と意気投合していた。どうやら戦闘機の趣味があったらしく、二人で語り合っている。

瀬田君はというと美少女二人にいじられてご満悦の様子で、僕はそこはかとなく疎外感を感じていた。

「俺、トップニヤンっていう映画に憧れて、それ以来ずっとF14が好きなんですよ」

「レアリー？、私もそれを見てパイロットを目指したのよ」

僕は買い物袋片手に二人の様子を見ていた。袋の中には姉さんが買ったわけの分からないぬいぐるみがたくさん詰まっている。それを見て、僕はため息をつく。

『あとでいっぱい愛してあげるから、今は任務に集中。初の実戦でヘマなんてできないからね』

「……嘘つき」

僕は一言、そうつぶやいた。

結局、僕は荷物持ちに過ぎなかった。

流希いわく、「これも訓練の一環よ、それぐらい持てなくて兵士は務まらない」だそうだ。

巨大な買い物袋は一つ、二つ、三つ、四つ……。指が引きちぎれそうだ。

因みに言うと、長門琉希は大量の荷物を残したままトイレに行く始末である。

「全く――」

一息ついて、頭を上に向ける。さっきから僕はずっとベンチに座ったままだ。シヨッピングモールの吹き抜けは、天高く続いている。天窓から見える青空が美しかった。

「ねえ……」

不意に愛菜が僕に言った。僕は空を見上げたまま相槌を打つ。

「大ちゃんはさ、流希さんの事どう思ってるの？」

「……はあ？」

僕は思わず、顔を上げて聞き返した。まさかそんな事を聞いてくるとは思っても見なかったからだ。

「だって、二人とも仲良さそうだし……」

「いや、アレは単に流希が僕を虐めているだけでだな。大体僕と流希は仲良しというより戦友——いや、アイツ上官だし……」

よくよく思えば僕と流希の関係とは何だ？ 今までも何度か考えたことはあったが、結局答えにはならなかった。

戦友、上官と部下、友人……

いや、違う。きっとそれでは言い表せないだろう。

「ねえ？」

愛菜の声で、僕は、はっとした。

「ごめん、ちよっと考え事。——さっきの質問の答え、保留ってことでいい？」

「うん、いいけど……」

すると愛菜は俯く。それから少しして、彼女はその小さな口を開いた。

「必ず答えは出してよね」

「分かった」

僕は力強く、その一言を口へと出した。

「司令、未確認機が大西洋沿岸よりこちらに接近中です」

途端、オペレーターの一人が焦り気味に言った。

「MFLか？」と私。

それに対してオペレーターの女性は「まだわかりません、自衛軍に掛けあってみます」と答える。

私は一言「頼んだ」と言うのと映し出されたモニターを見た。

衛星画像からは翼のようなものが見ることが出来る。数はおそらく二つだろう。

昨日今日と立て続け。兵の気力も、軍備も疲弊しきっている。

「連絡がとれました、戦闘飛行隊のようです。数は、二」

予想通り、二機の『何か』がこちらに向かっている。

「さて、MFLでないと分かった以上は——」

その刹那、私の頭に電撃がほとばしった。形容し難い苦痛が体全体を襲ってくる。

眠い、今にも体から魂が抜けそうな感覚。

おかしい、私の体に何が起きているというのだ。

「司令？」

報告を続けるオペレーターが私を心配してか、そう問うた。

「いや、なんでもない。報告を続ける」

また電撃。体中が痛い。

何なんだこれは？一体何が起きている？

《瀬田浩三、そろそろ時間だ。君の仕事は交代となる》

「何を言っている？」

どこかから聴こえる声、私は息を切らしながら答える。

《言葉の通りだ。ズヴェズダと鎬木による妨害が入ったが、これでDE-Sは正常作動する。君の仕事は終わりだ》

そして、視界がブラックアウトする。

何も映らない。ただ、オペレーターが私を心配する声だけが聴こえる。

何だ。何が起きているというのだ？

「大丈夫だ、もう調子はよくなった」

誰かがいった。これは——私？

違う、これは私では——俺はこんな事言っていない。

「では、アルタイルとプロキオンを出撃させる。AD隊、並びに機甲中隊は市民の避難を最優先。自衛軍を手伝え」

違う、これは俺じゃない。違う、何故気づかない。

「ですが司令、アルタイルとプロキオンのパイロットは司令のご指示で外出中では……」

「そこは問題ない、用意は出来ている」
違う、これは違う。

一体何なのだ。何が起きていると——
そこで、思考が途切れた。

もう日が暮れ始めていた。よくよく考えれば結構長い時間ここにいたんだなと僕は実感した。楽しい時間はすぐに過ぎてしまうとは本当だ。とはいっても、僕は殆どベンチに座っていたようなものなのだが。

それでも、こうして日常を満喫できたのは良かったことなのだと思う。新たにV M F Lに加わったガルダ姉弟とも仲良くやっていけそうだ。

僕は、携帯を開き、時計を見る。そして制服のポケットにしまった電子定期券を取り出す。タッチパネルを操作し、時刻表を呼び出す。「うーん……もうすぐ電車も来るみたいだし、解散にしたほうがいいかな？」

「そうね、またいつM F Lが現れるかもわからないだし、それに暗くなつてからじゃあれだしね」

流希がそう言つて僕に賛成すると、皆が頷く。

「じゃあ、帰りの電車は案内するから。愛菜と涼介は先に帰つてて、僕と流希は二人を見送つてから帰る」

「えっ」

途端、愛菜の顔がひきつった。それを見た涼介が「どうした」と声を掛ける。

「いや……なんでもないよ。うん……」

その表情からして何かあるとは思つた。でも、僕はあえて何を言わなかった。

「じゃあ、一時解散つてことで。何かあつたら連絡する。じゃ」

そして、各々の向かうべき方向へと歩みだす。愛菜と涼介は徒歩で自宅へと、僕と流希はガルダ姉弟を連れて駅のホームへと。

電車はすぐに来た。問題はA区画行きへの列車が否かで、それは30分後に到着の予定だ。

ホームは、学校帰りに買い物に来た学生や夕飯の買い物に来た主婦でごった返している。因みにガルダ姉弟はというと土産物屋に行った。僕がまだ時間はあると言った途端、本国の仲間にお土産を買いたい。といって駅内の土産物屋へと向かった。10分後にはここで落ちあう予定である。

「ねえ、アンタ愛菜との付き合い長いんだったわよね？」

不意に流希が聞いてきた。

「いや、まあ……小学校からだから十年ぐらいかな？」

「アンタ……そんなに長く付き合っていてわからなかったのか……」
流希が酷くひきつった顔で僕を見つめる。それはまるで蔑んでいるような眼差しだ。

「どういうことだよ。僕は愛菜が心配だから涼介と一緒に帰らせたじゃ——」

「アンタって本当に鈍感ね！」

途端、流希が僕の制服の襟をつかんだ。そして、そのままホームの壁へと人を掻き分けて押し付ける。

「ねえ、分からないの？愛菜がどうしてあんな顔をしたか？分からないの？」

そのまま彼女は僕の体を揺さぶる。縦、横、斜め……

「ちよつと……周りに迷惑——」

「そんなのどうだっていいわ！アンタの事、私少しは好きだった。

でも幻滅した。彼女には悪いけど言わせてもらう、愛菜はアンタのことが好きなの、アンタと一緒に居たかったの。だから私は二人の邪魔をしない為にもトイレに行くって嘘ついて席を外した。なのになんなのよ？彼女の気持ち、踏みにじってんじゃないわよ！」

そして、流希は僕を投げ飛ばす。ホームの床へとたたきつけられる。どうやら腰を打ったようで、さすりながら僕は立ち上がる。

「……追いかけなさい」

俯き加減に流希は言う。

その時、僕には見えていた。彼女の涙、彼女のあどけない顔から溢れ出る雫。

「早く追いかけなさい！上官命令よ！」

そう、僕に怒鳴りつける流希。

僕は拳を固く握り締めると「ごめん」と一言つぶやき、走った。

結局、私の選択は良かったのだろうか。

私はアイツにどうして欲しかったんだろう。自覚は出来ている。私はアイツが――

でも、それ以上に愛菜を応援したいという気持ちでいっぱいだった。あんな顔をされては譲ってしまうのではないか。

「私ってつくづくお人好しね」

人ごみの中、小さく呟く。

最初は彼女のことを酷くおせっかいな幼馴染だと思っていた。でもそれは違った。アイツが好きで、アプローチしてるんだって。

そう考えると私は何をしてきたんだろう。罵声を浴びせ、訓練では死にそうになるまでシゴいて、実戦では文句をタラタラ……

こんな女よりきつと大人しい愛菜の方がいいだろう。料理も上手いし、家事全般は出来るんだろう。それに比べて私は何だ。戦うこと

しか能がない女だ。

「そうよね、アイツには愛菜がお似合いよ……」

口に出して確認する。その途端、涙がさらに溢れてきた。止めようとするにも止まらない。

仕方なく私はハンカチをポケットから取り出す。ホームの壁に寄りかかって、顔をうつむかせたまま。

ハンカチはすぐにビチョビチョになった。そんなに悲しい事じゃないはずなのに。

私はずっと一人で戦ってきたはずなのに。何なんだアイツは――

『そうだね……必ず生きて帰ってくる』

彼の言葉が再生される。その声が聞こえる度に胸が締めつけられるように痛い。

「本当、飛んだ阿呆ね。全く」

鼻を嚙りながら呟く。それは自分を安心させるため。いつもの自分を、『長門琉希』というエースパイロットに戻る為に。

私は、ただの女の子じゃないんだ。だから、こうするしか無いんだ。ハンカチをポケットに入れる。もう泣かない、泣いてはいけない。

彼女の為に、『長門琉希』という存在の為に。

「Come again? What is already finished?」

途端、ホームのガヤを切り裂くように声が響いた。怒っているかのようなその声は日本人のものではない。流暢な英語はどう考えてもネイティブだ。

まるでモーゼの如く、金髪の男女が人ごみの中を掻き分けていく。

ショートカットの背の高い女性はその光景を全く気にしていない。
対して後ろでモジモジとしている少年は申し訳なさそうに頭を下げ
ている。

間違いない、ガルダ姉弟だった。何をやってるんだか、と私は思い
ながら近づく。

近づいてみるとアンの手に携帯電話があるのがわかった。

「どう、いいものはみつか——」

「ムダ話をしてる時間は、どうやらナッシング」

アンは私の口の前で人差し指を立てる。

「OK, Work on one's own. Are you
sure?」

再度、静寂が訪れる。彼女の言葉には何か力があるのではないかと
思ってしまう。騒ぐものは誰一人いない。皆、彼女が流暢な英語を
離す姿をじつと見つめている。

「However, the answer is not li
stening, huh?」

そして、彼女は携帯を閉じる。その顔はどうにも不機嫌だ。先程ま
で満面の笑みでショッピングモールを走り回っていた彼女の姿はな
い。

「……どうやら、本国は《あの二機》を投入するらしい」

「あの?」

私が聞き返す。すると彼女は黙って人差し指を上へと向けた。

細く、長く伸びた指。白く、すうっと伸びたそれは、夕焼けの空を
指している。

私は見上げた。何が起きているというのだ。

その刹那、何かがホームの上を通過した。漆黒の影。それはホーム
に突風を巻き起こし、過ぎ去っていく。

「なんなの……」

「ベガ《ハゲワシ》とデネブ《白鳥》。もう後戻りはできなくなる」
ナスルが、そう小さく呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6407x/>

閃光のプロキオン

2012年1月12日16時48分発行